一日朝の景色を見んとて、眠き目をこすりつゝ、五時頃になつかしき床を放れて街の方に出でゆきぬ。素より日は高うなりたれども、戸を閉きたるはなし。シャンゼリゼーの大路を上りゆくに、妻夜かけてさばかり雑沓する道路も、未だ人影散ふるばかりなるもめづらし。左右の公園の青々たる芝草は、並木の緑と相映じ、處々に植え成されたる、赤き、黄、青き、白き草花などの露を帯びて咲きかゝえたる、ゆのつから足とゞめらる。

鳩雀など、昨日遊びし人々の遺したる麵麭屑などを拾ふにや、とゝかしこに群がりつゝ、啄み居るも愛らし。何となく別天地のやうなる心せられて、大通りの方をさしてゆきゆくに、目につきしものゝ、ふかす〳〵左のごとし。

道洗ふ人。　道路は至る處、人道はセメント、車馬道は木片を組み合せて固め成せるとは、屠ば記しゝがごとし。この人道と車馬道との間は、必ず小さき溝のやうになりて、水道の水をいつこよりも、自在に引出し、怒にして小川を成せるやうに構造せり。されば壺の間も、をり〳〵はこの水の流るゝを見ることあれども、朝は、いつこも、〳〵、振りたちて流るゝ、いと心よし。洗ふ人は、この水をポンプに吸ひ、夜をかけて汚したる跡を押流すなり。一通り洗ひたる後も、丁字形の火なる水のさきに、ゴムつけたるにて、拭ひゆけば、つや〳〵として、一種の黒光を放てり。この間は一點の塵埃だにもとゞめず、たゞ並木の青葉の露の、風にゆられてをり〳〵滴り落つるを見るのみ。

新聞及び牛乳配達人。　大方の戸も未だ閉ざしたるに、急せきて、こゝかしこに走り歩く人々は、新聞及び牛乳配達なり。新聞配達人は男多く、牛乳配達人は女多し。新聞は大きなる籠口に、押重ね入れられて、肩より引かけられ、又はその脇に抱込まれたるも見ゆ。牛乳は硝子又はブリッキ瓶に入れられて、持ち運ばる。この配達の男女の中には、相應の教育あり、賤しからぬ家に生れながら、時の不運にして、落ぶれたるものも交れりなど聞くに、いつこの國も同じきにやと、いと憐れにこそ覚えしか。

麵麭車。　我が國の大八車より大きなる車に数多の麵麭を積みゆく中に、いと

大きなる、しかも色黑き麵麭を數多積みけるは、兵士の食ふ料なり。昔てこの麵麭を求め見しことありしが、その形は楕圓にして、長さは二尺以上、巾は五六寸ばかりなり。國家の干城の食物は、いづこの國も粗のわるきものなり。

荷車。　未だ普通の馬車もあまり通らず。舗道馬車なども通らざる先に、彼是見ゆるは荷車なり。その物ばいろ〳〵あるべし。大方夫婦相乘りして、その手綱を取りゆかざるはなし。其かせぎの働き思ひやらるゝにも、我が國との趣を異にせる、また見ざころあり。

乞食立ン坊。　乞食と立ン坊とは、晝夜を問はず、いづこの街にもたゝずまはなければ、朝の中は殊に多し。さるは未だ道掃除のなき前に、落ちたる物を拾はんとにやあらん。煙草の屑、紙きれ、麵麭屑など、爭ひ探すさま、いかなる人の果にかと思はるゝにも、世は平等を有ち得らるまじき理さへさとり得らる。是等の徒は大方家もあらざるべく、公園の公共臺さては寺の門前などに起臥して、心細き日月をおくるなるべし。楽より屋もなく、帽子もなし。女の子なども、さすがに色白く物言ひさはやかなるも、衣は破れ髮は亂れ、ふるひながら歩くを見るに、心さへ、ま、道に迷ひやせんと憐なり。

食物車。　市中處々に市場あれども、最も大なる市場は、市の中央に在り。この市場に、市中の食物毎朝買出しにゆく有機ずまじきまでに賑かなり。いま目の前にあまたの食物車の通るは、魚れもそれに赴かんとするものと、既に買ひ整へて、歸り途につく者となり。獸肉、鳥肉、魚肉、野菜、萬物統れも籠に入れられて、殘重ねられつゝ、馬車に乘かれゆくを見るに、市民の大口のほど思ひやらるゝかし。

麵麭屋。　朝早きより業を執り居るは麵麭屋なり。狹くより戸を開きて、此の棚彼の棚など並べ居るさま賑かなり。つゞきては肉店なれど、これは鎖細立たる家の内に、片股大腿など形見ぐるしきを、釣り下げたるのみにて心ゆかず。

騎兵憲兵及び巡査。　非常を警むる爲に備へられたるものとはいへ、騎兵憲兵及び巡査の務こそいと堪へがたきものなるべけれ。事とあれば必ず役せらるゝは、さることにて、朝未だはのくらき中に、ポロ〳〵と音し、バタ〳〵と音して來る

は、騎兵及び憲兵巡査なり。素より交替に時あり、蔬を取るに定まりあるは、言ふまでもなけれど、八方睨の龍のごとく氣を配りて事に從へるさま、勇壮なり。

七時に至れば、鎮道馬車、乘合馬車も開通を始むれば、人々の往來漸々繁くなりぬ。かくて軒ごとの店の戸も開かれ、犬も走り、猫も起きぬ。珈琲料理店なども、朝飯を食ふ人の爲とにや、そろ〳〵食卓など並べ整ふるもこの頃よりなり。八時九時に至りては、忽ちに市街の面目を新にし、十時十一時に及んでは、さばかり掃き清めし道路も、塵埃に埋もれ、更に又別天地の思を成さしむ。

かゝれば朝寢に慣れざる旅人なども、一たびこの地に入れば、ゆのつから夜よかし必要、早起き無用の習慣に樂ひなるゝも、止むを得ざることなり。

あなうたて朝飯くはず朝寢する
人を能く見れば紳士なりけり
働かでは得生きざる者のみ朝起きするとぞ

巴里の夕(夏)

夕日影八衢の並木に横はりて、人の影も長くうつる頃のさまぞ、朝晨とはかはりて、また見ものなる。さるは島と北に起き出でゝ、各〻その職務を執りし者も、今は時了りぬれば、家路をさして急ぎゆく、いと心あわたゞし。二頃立の馬車に、その馬の毛色さへ揃へて夫婦相乘りせるは、清涼の空氣を終日公園に呼吸して歸れるなるべく、乘合馬車に、負籠げに刎ひ上れるは、お役所本公の小使なるべし。スタッキ打ふりつゝ、帽子もやゝ仰げざまにかぶりて、三々五々打興じつゝ、歩行するは、夕食を了へて、漫遊を志す學生にして、網袋の中に、麵麭野菜など押し詰めて、東奔西走ふりたて、袴とり、少くは、下女などの今夜の食料を整へゆくものなるべし。押並べて、衣服のさま等しければ、誰れか富裕、誰れか商工、誰れか寄生など、區別し難けれども、眼にも目につきて見ゆるは、女工のむれ〳〵なり。そも〳〵當府にては、女子の職業、我が國よりも多く、各種工場、各賣店など、十中の九までは女子なり。加之、

官衙にさへある向きには、女子を用ひれば、時至りて、是等の各隊、思ひ〳〵に急きゆくさま、女學校の運動會のごとし。これ等は帽子より履に至るまで、大力賀宗に取裝ひて、彼の白粉を施し、衣文を繕ひ、強て艶めかす、卑しむべき白首の徒とは、全然趣を異にせるもゆかし。

之につぎては男子の土方なり。服の上より、更に白き或は青き布にて蓋ひ、足には木屐を穿ち、歩くその品の下れることはさるものにて、終日穴を掘り、道を繕ひなどして、専ら身體を役するものなれば、その體格の大なる、ゆゞろくべきもの多し。帽子などは、素より有合なるべければ、高きあり、低きあり、軍帽あり、麻頭あり。その舞その頭などは、土のつきたるをも厭はずがや〳〵として、こゝかしこに一むれ二むれつゝ歩りゆくさま、昂りて珍らし。巴里といへば、犬猫まで飾を装ひたるやうに思はるれども、かゝるさまのものもまた少からず。共和國の本體、普通投票の權を與へたる結果は、是等の徒動もすれば、集合して、内閣に反抗し、時としては、非常の騒擾を引きおこすことなきにあらず。さはれ、江戸ッ兒の氣象は、神田ッ兒のチャキ〳〵に在るが如く、巴里ッ子の本色は、是等の中にバリつくとうけたまはるも頗もし。

大通り小通りを問はず、太陽沒すれば、直に代るに電燈瓦斯を以てすれば、別に暗しとも思はず。その光の點々として、打きらめくが、反つて賑はしさを增すが如きは、さすがに天下の公園なり。店は飲食店を除きては、夕になれば大方は閉ざさる、されば高軒悉く商店なる處は、その店のきらめかざるはやゝ淋しき心地すれど、例の珈琲店は、この頃より一層入り來る人多く、やゝ濕し曇き昨今は、人の數殆ど椅子の數よりも多し。一杯の酒に、數時間を費して、茫然通行人を眺むるあり。約束の人を待ちて、うなたるゝ赤毛の少女あり。手紙かくあり、話するあり、笑ふあり。是等の人々を附込んで、物賣らんとするむるやからあり。手巾足巾して錢乞ふあり。夜に入りての繁盛實にゆゞろくに堪へたり。

鐵道馬車、乘合馬車の停まる處々も、夕の頃は晝より增して賑かなり。大方の停車場は、その車の來るごとに、番號の順に、人のたゞずむこと、鎖の行列せるが如し。大

競馬の夕などは、道路は殆ど馬車にて塞がり、横断せんとするものは、遥かの側すべる棒の下をくぐりて、進るがごとく行くを例とす。あはれ天下は廣し、日月は照さぬ陰はなきに、何ぞしかも一處にのみかく集まり來るよとうたてし。

いつの夕なりしか、凱旋門のあたりを通りしに、俄に西より黑雲おこりて、見るが中に、絶まじりの雨ばら〳〵と降り來りぬ。無數の人々は、この雨にぬれずと急ぎて門に入るあり、大木の下にかくるゝあり。やがて雷鳴は北方に響りて、土も裂るばかりに打ひびきぬ。小供は母が袖にすがり、旅は姉が裳に取りつく。避雷針こそ數多立たれ、文明の進歩も、宋だ天に勝つこと能はずと打かこたれぬ。晴れて後大路を見れば、こゝかしこより繰り出す男女のむれ、幾萬といふを知らず。たゞ軍隊などの一時に押し出したらんやうなりき。おのれもその一人となりて、宋路に急ぎしに、セイヌ川を隔てたる向ふは、雨宋だ止まず。エッフェル塔の側り塔の上に變えたるも、珍らしかりけり。

ムードンの森たちいづる夕立の

雲より高きエッフェルの塔

巴里の夜(初秋)

高燈かゞやく巴里の街は、太陽沒したりとて、闇路をたどる人も无けれど、蚤の間とはなのづから、そのさま變れるぞ。さすがに月と星との天下とは思はれける。この夜を時として、多くの人と、反對に働く者は、既れの國にも在ることなるが、こゝにては、第一に、珈琲店、第二に、劇場、寄席、第三に、舞踏場と知るべし。

大方の料理店にて、人々飲食するに、その珈琲は必ず出でゝ、專門の店にゆくが例のごとし。されば、かゝる道中の必要上、寄り來ると、又は散歩の序に立よると、或は遊戯の目的を以て集まり來るとにて、いづこも〳〵夜に入りて、大繁盛を見るは珈琲店なり。

されば日の暮るゝと、共に、その足すりこぎに、その口つどけざまに、眼を八方に働かし、鼻を十方にきかして、百方にいそがはしげなるは、この店々の給仕人なり。一方

にて麦酒を呼べば、飛んでそを持ちゆき、一方にてブランデーを呼べば、走つて之に赴き、或は勘定或はお世辞、只一文にても、酒代の多からんことを願る。その心の落付かざること、下り蜘蛛のごとし。

中にも例の腰細脚大の徒、群集し來る店々にては、その賑はしさ、騒がしさも、一しほなり。向ふの隅に陣取りして、武者ぶるひせる丈夫もあれば、隅の卓に寄かゝりて作戰の計畫せる武士もあり。誘かたちこそやさしけれ、心は鷲のごとく、魂は猛のごとき面々、衣べを飾りて、百方に突き入るに、中には相打して大騒動となれるもあり。客は素より内外人打混じたれば、互に意思の通ぜざるも多かるべく、其々妻に之を統ぶる、店の主人の心配さへ、思ひやらる。實に施彼の別天く、夜の見もの〻第一として無のつくは、此珈琲店なるべし。人間の蝙蝠一名鳥ともいふべき、俳人仲間なり。是等の徒は、壺の間は薄くらき家の中に籠り、夜に入りて、各所の劇場、寄席等に躍り廻はる。我が國にては、寄席を除きては、劇場の重なるものは、大方晝間に行ふ習ひなれども、こゝにては、悉く夜の興行なり。世界第一と自稱せるに負かざる大劇場オペラの如きは、各夜に行ふ例なるが、こゝにては一時高金を煙る名優ども、おの〻競ひて、その腕をふるへば、高等なる夜の慰みには、第一と歌へらる。その他アアートルと稱し、スペクタークル、コンセルなどいはるゝもの、その數いくばくかあらん。一たびその中に入れば、昔樂書き電燈かゞやき、伽藍廻もかくやと思はるゝ樂々は、きらびやかなる裝ひにかゞやき合ひて、さながら天國に遊ぶがごとし。これ等も我が國とは違ひて、大方の俳人は女子にして、男子は稀なり。

舞踏場といへば、町ごとに、大方無きにあらざれども、上中下とおのづから階級あり。これも晝の間は行ふことなく、悉く夜のものとす。こゝには紳士、婦女相抱きて舞ふもあれば、下刃下女相携へて躍るもあり。或は官吏、或は書生、或は職人、或は俳人おもひ〳〵に馳せ集まりて、カドリユのかどなく、ワルスのわるふざけもまじりて、歓呼の中に跳ねまはるさま、初めて見たる時は、目のまふ心ちしたり。

大方の巴里ッ子は、この舞踏をもて、交際上缺くべからざるものとし、男も女もそ

の若き間は、この上なき樂みとせり。素よりかゝる場所にては、知ると知らぬとの別なく、內外國人のわらびも无けれども、またおのづから心のひくかたありて、それ〳〵に相組み相携へゆく、眞にその味を知らば、いかにも忘れがたきものあるべし。

蓋の間は淺黃的顏色をふりまはせる紳士連も、夜に入りてはこの舞踏場に入り來るに、その顏つき俄に變じて猶面的になれるも異あり。若し鼻毛三千丈線圍如此長と踏はれんも、防ぐ調はなからん。

かの流れ蕩のかよりかくより、艶に世をおくる少女がどもは、夜に入れば第一に珈琲店に集まり、第二に劇場、寄席を伺ひ、第三に舞踏場を襲ふ。目ざす敵はその猶面鼻長の侍にして、期する處は只金の如何に存ず。まことやこの國の風として、いづれも〳〵夜の興行場には、一種の女子を雇べて無錢、或は三分の一等にして、出入を許す定めなれば、最來の多きも理なり。さはれ目ばゆきばかりの燈光の下、衣服帽子の麗もかぞへらるゝ程なれば、ひげに肢しきものどもは、おのづから徘徊せず、その數へられざる程のものは、こゝの衢かしこの木蔭に、三々五々群を成し、變現出沒、運行の人々に毒氣を吐くに、その火炎殆ど天をも焦すべし。

「夏は夜」といひけん古の時代には、月を賞し盛をめで、さては草むらに蟲をたづね、澤水に水鷄を逐ふなど、風流士の遊びなりしが、文明といふすさまじき怪物は、尖等天然の快樂を驅逐して、人をして悉くその炎の中に引き入れぬるぞおそろしきや。

巴里の月(仲秋)

月の興すべきことい と多し。春の曉花の露重げなるに、有明の月の細う影を宿せるが、ふと風に吹き散らされてきわゆくなど、憐れふかゝり。遠山の雲おぼろに暮れかゝる頃、歸りゆく鴈の翅に連ぎられて、ともすれば見失はんとする三日月のほのかなるも、心にくし。夏の夜遣水に影やどせるは、打見るからにいとすが〳〵しく、月もいかに處得たるらんと、蓋のあつさも忘れぬべし。まして某の川、某の池

などにおもふどち、棹さしゆくに、月もやがて打乘れるまたなき樂しみなり。或は笛とりいだし、或は歌うたひ、或は琴かきなでなどして、明くるも知らで、波にまかするも、月なくていかでさあらんとぞ思はるゝ。

秋になりては、空いよ〳〵澄みまされば、月の影一しほさやかにて、見るまゝに心の塵も收まるなど深からずやは。はしき子ども引つれて、盧擲といふ彩するに、轉むし、はたおりなど、華たかう打ひゞかす。そこさして行くに、月の宿せる露を命に打飾へる、さすがに暫し打守らる。多の夜ふく風さむく、川の水も氷れるばかりなるに、片われの月の、いと淋しう照らせる、あはれなり。街々の燈も消ねて犬の遠吠のみ、きれぎれに聞ゆるに、滿ち〳〵たる月いと清う照せるが、山おろし俄に吹き來て、水枯に複せたる水どもの、さま〴〵に影をうつせる、又なきあはれなるものなり。

あるは盈月にむかひて、その缺けゆかんを歎き、或は亡き親の面影を偲わゆく月にかこち、或は遠征を思ひ、或は良緣を願ふなど、月ばかり人の心を穿ち、人の思ひを、砕かすものはあらざるべし。

さはれ、こは古への夢なり。過去のくりごとなり。文明といへる今の世のすさまじきものはこと〴〵く是等の懷抱を奪ひ去れり。月とて盈あるにあらず、そが露にやどり、水にすむは、そのやどるべく澄むべき理あればなり。三日月の心ほそきとおもふは、我が心よりすることにして、盈も收まるとおもふも、おのが心のしわざなり。月は人にかゝづらひて形を改むるものにもあらず、人の爲に大きくなり、小さくかはるべきものにもあらず。この影にむかひて、或は喜びあるは悲しみ、或は悔い或は歎くとも、月はた何とか思はむ。月は光あるが故に明かに、明かなるが故に、我等の便を爲すこと多きのみ。かゝる滿ち缺けするものに、思ひをかけて之を樂み、之を與やるは、何事の理も開けざりし世の事なり。今はその光れるいはれそのかちかけするさまを、そがいかに我がすむ國にかゝつらひありやなしやなどをこそ、務めて學ぶべけれ。さては月見の宴など、何のいはれもなく、まして、その光を借りて、夜を過さんなど思ふをや。

電氣瓦斯は、人の心ぞへによりて滿ち缺けあるべくもあらず。雲おこり雨ふりたりとて、その火かげくらくなるにもあらず。月を見んとならば、その運をこそきはめつくすべけれ。恨をよせ歎をかこち、あるは喜びあるはいかるは、おろかなるものゝ心むざなり。巴里の月！巴里の月！巴里はこの文明とかいふものゝ中、そらなり。春のおぼろ夜、夏の短夜、秋の長夜、さては寒き冬の夜、月はそのわかちなく照らせれども、見んとするものもなし。ルーブル宮殿には、昔のまゝの月てれども、之によりて思ひめぐらすものもなく、凱旋門の月は世の滿ち缺けする習ひを示せども、一人だに之に當時を訴ふるものもなし。

古への盆踊は、月人男そが妹人たり。今の舞踊は、電氣瓦斯に導かる。隅田川、加茂川、猶月の宿る潮はあるべし。セイヌの大流、流船賑き、軌鉄馳せ、その一滴だに、月の光を宿さしめず。街々の家は、密に密ゆるばかり高く建てつらねられたれば、空はいと狹う細う見ゆて、月のゆくへを知るべくもあらず。まして例の電氣瓦斯は、軒ごとに輝き合ひて、晝夜の區別さへ知られざるをや。

巴里の月！巴里の月！月よ〳〵。君は事ろ、その光を收めて、速に東方に出るべし。東方には、猶君の光を宿す潮もあるべく、君をおきて二心なしと、昔憂交も訴ふるものもあるべし。金銀珠玉より成り立てる大木あり。その一枝折りてといひし、晝夜姫時代の蓬萊島は、見ねば知らず。火鼠の裘をのみ取裝ふ、西の果の國々より、其の心安さは、遙にまさりぬべし。かくいへば文明は、月の仇にして、開化はそが光を殺ぐものともなるべく、東方猶月を賞すといへば、そのいはゆる文明開化の至らぬ限ともおもふべし。さはれ然らず。電氣瓦斯に眠くらみて、眞に月の光を味はざるものは、野蠻の民なり。宋國の俗なり。巴里の三百萬人いかでこの俗物のみならんいかでこの蠻族のみならん。公園陰深き處に、獨り月に呻吟するもあり、流れにむかつて、月影の浮き沈むをかこてるもあり。大哲學者大文豪の思は、往々かゝる途に彷徨して、遂に天下萬世の警語を發せしむるが少からず。[illegible]

かの春の曉、夏の夕、秋の夜、冬の夜、おの〳〵その趣を異にせる月の愁しくも嬉しくも打眺はるゝは、眞に人の情なり。いかなる文明いかなる開化も人情を離れて

は、何の雲にかせむ、あはれ、月巴里の月、照れや、照れや。

萬國大博覽會は近づきぬ。見慣きものも、この時には見らるべく、未だ人の知らぬものも、この時にはあらはれぬべし。月の神や、月の會、そのおはす本國のありさまを、この期にあたりて、遍く知らしめたまへ。その光れる工夫、その見の枠打ふるあたりまで、遍に悟らしめたまへ。巴里の本色は夜に在り。若し人々月の神の在り處を詳にせば、億萬の電氣瓦斯は、この命の許に奔走して、更にこの國の業を見るべく、さては餘所ものにせじ月を貴ぶ心もおこりぬべし。愛は失ふべからず、あはれ月巴里の月。

書き了りて、窓押し開けば、空晴れて月は遠く西山に傾けり。嬉んと思ふ時も過ぎて、打眺むるまゝに、思は果つべくもあらず。

かゝりける人をあやしき西京

月はひとつに照らせるものを

議員選擧に就ての張札

共和政の根本たる當國にては、議員の選擧に狂奔するはさる事ながら、日本人などの考にては、殆ど想像にも上らざる有様なり。此頃市會議員改選の期來れりとて、上も下も男も女も口に沫を飛ばして、各その黨の人を擧げんとするさまこそ面白けれ。さるはこゝかしこの秘密會演說會などいふ事はおきて、我々の最も目に立ちし珍らしきは、其の候補者の姓名を張札にする習はしなり。昨今市中を散歩して、思はず立ちどまらるゝは此廣告なり。

そをいかにといふに、赤き、青き、白き、さては黄なる紙の、あるは四五尺四方、あるは二三尺ばかりなるに、其の候補者の姓名を筆太に摺出し、中には其宜言などさへ加へたるも見ゆるを、到る處ごとに張付ることなり。之層、見世物、公園、寺院、博物館、製工場など、人の群集する處はいふも更なり、共同便所、馬車の中、さては橋の欄干、塀及び家の屋宮宙の家は石造及び煉瓦なれば、其の屋の處凡て三四尺若くは六

七尺ありなどに透間なく張り付けたれば通りゐる左右を見ればさながら錦繡の幕を打ちたるがごとし。

これに付て最も面白きは例へば甲の黨派の人來りて其の候補者の札を張りゆけばやがて又乙の黨派の人來りて其の上に又も新濃く我候補者の札を張り重ね上若し雙方の人出會ひて張札を爭ふ時には互に負けじと張合ふをもて遂には其の數重なりて紙の厚さ五六寸に上るも見ゆ。此の張人は一日何錢として雇はれ居るものとはいへいづこまでも其の責任を盡さんと勤み若し敵黨に負けたる時には跡より物に來りて之を引裂きゆくもあり。されども少しも口論がましきこともなく醫張合ひ揃り合ふ等の事はなし。抑も人の家の塀及び其の屋などは常に光るばかりに拭ひあるものなるに此の張札を無遠慮にふるまふこと極ならざるやうなれども之れのみは咎むることも爲さざる習はしなりとぞ。かれば選擧定まりたる上は直ちに來りて所黨相笑つて之を剝ぎ取り水にてその糊の汚を洗ひゆきて去る例なり。よくいへば君子の爭ひ冷評すれば兒戲の如し。

歴史行列

年の六月の中旬は巴里市の祭なり。男女共に狂奔す。老人はその齢を忘れて街に笑ひ小供は足を空に躍り悅べり。この人氣の浮立たるを時として某々の公園某々の街に、さま〳〵の興行物はじめらる。昨日はオートモビールの競走ヂーイルリー公園に行はれ今日は自轉車の競走ボアー公園に開かるなど傳へらるる中に歴史行列の事最も高し。

こは十七十八と二日をかけて巴里市中を練り歩く態なれば。プラスドラコンコルドといふ大廣場に往きぬ時は十八日の午前なりしに人は例のごとく四方より群集して幾重にも墻を成したれば馬車大八車椅子階子の類を人後に列し一人前何錢と定めて見せしむるやうに仕掛けたるに昇れり。

太陽は無遠慮に照したまへば暑さは汗ゆるやうなれども、いかで一つも見のこすべきと各〻爪立ち伸び上りなどして待つ中に隊列の樂は公園の方より響

きて、人馬の足音やう〳〵きこゆそめぬ。

程なく目に入りしは、燕尾形青赤の旗にして、その柄先には鋒鋭き劍を附したり。之に次ぎて來れるは、青衣赤帽の軍人にして、鈴にて飾り立てたる馬に跨れり。喇叭手はこの馬に隨つて歩み來れり。これこの行列の先驅なり。續きて數多の軍隊は、最も上代風に裝ひて歩み來れり。

之につゞきて、各職人連合の一隊中古の風俗に裝ひて歩み來れり。第一は鮮龍屋連、第二は肉屋連、第三は家具屋連、第四は陶器屋連、第五は飾物屋連、第六は金銀細工屋連なり。連ごとに古代の旗を建て、あるは女あるは男あるは小供など、各〻隊を組み、更に音樂をさへ古風の音を吹奏しつゝゆくなど、見る人聞く人誰か當時を忍ばざる。加之や一連ごとには、必ずバルムの葉を手にしたるもの十人ばかりづゝ並びゆけるなど、趣なからずやは。

次には清稽に取裝ひたる一組あり。或は眼更に眼を大にし、鼻を高くし、或はその面に彩色を施し、その口を左右に釣り上げなどせる、孰れも人の顔を解かぬはなし。それもわざと古代に倣れるは、この行列の主旨を忘れざらんためにやと、をしがし。

汗あゆるまで見る人々を笑はせて後、徐々として、しかも優美に飾り立てたる一隊は花の冠を戴き花の衣を裝へるものなるが、これも例の古風を失はじと蓄めたる更に見どころあり。これにつゞきて漁者の一むれあり。各〻手に網又は矛の如きもの持ゆきしは、セイヌの流に從ひて、魚を追ひけん古へのさまを思ひ出ださるゝ。次に來れるは中古の武人なり騎馬なるあり、徒歩なるあり、その甲冑その劍槍等、今は兵器博物館、さては歴史の挿畫などにてのみ見るものをかく生き働かせ見せること、この道に忠ある人々を盡すこといかばかりぞ。

最も後に來れるは、巴里市の古代の建築を示さんとてなるべく大きなる古風の家屋を作り立てたるを、車に乗かせたり。この他船を二艘ばかりも乗き出したるが、一は最も古く一はやゝ今に近づきたるなど、やう〳〵進歩せるさま比較せられて興多かり。

この家この船等には、數多の人々の、その時代の服裝して打乘れるは更なり、必ず女王めくものゝいたく飾り立てゝ高壇に直立せるは、殊に見ものなり。且つ附隨せる樂器の悉く古風にして、その音響の今人に耳慣きなど、そゞろに我が古へよりと思ひくらべられて、珍らしかりき。

是等行列の中に旗ども多く立てられたるが、孰れも船形を附したるはゴーロワ時代の名殘を重んじて、今は巴里市の紋章ささへなれるものにて、日朝を尙ぶ人民に保守の心智しも止まざるを證して餘りあり。凡そ歴史は國を維持する精神なり。國民にして歴史を忘れたらんには、その國の滅亡整し遠からざるべし。されば、いづれの國の教育も、歴史に本づかざるはなく、歴史によりて政治を施さゞる國はあらず。巴里市の祭に際して、歴史行列の盛おこり、その實行にあたりて、殊に市民に歡迎せらるゝも故なきにあらず。

散髪及び洗湯

散髪と洗湯とは、必ずめかすことにあらねど、時々之を用ひざる時は、垢積りて塵となし、髪逆立て天を衝く恐あり。されば孰れの國を問はず、何も都街を成し、樹村を成す處には、必ずこの設あらざるはなし。洗湯は知らず、散髪の俗は歐羅巴が本府にして、我が國は支店なり。さはれ今はこの俗を用ひて、殆ど三十年に達せれば、こゝに來り見れば、また自ら我が國とその趣を異にせり。これ我は探求して一種の日本風散髪を形づくれるものにして、猶洋食の我が國に入りて、特別の味ひを生じたるがごとし。

そのいはゆる本店は、一市街に必ず二三ヶ所あり。我が國のごとく、その形こそ大ならね、猶赤白の捻り棒を目標とせり。但し戸は孰れも閉ぢあれば、外よりは見すかされず。散髪せんと思ふ人は、戸を押しあけ、今日は、の調と共に入りゆけば、主人は同じく今日は、の調を以て之を迎ふ。職工は大方燕尾服にチョッキ、ズボン等の上より、白き布を掛けたり。そのさま我が本供の胸當といふものに似たり。空席なきときは、まづ脇なる控間に誘ひ、新聞雜誌等をあてがひ、到着の順によりて取りかゝ

ること、我が國と異ならず。全體家屋内部の装飾は玻璃鏡なるが多きに、この店には、殊に多くを用ひたるは、いはでも著しき理あるに依れり。格子の並べかた、鏡の工合、洗鉢の据ゑやうなどかはりたること、ならず。たゞその卓の大方大理石を用ひたること、いづこよりも〳〵、小管を捻れば、水または湯のさら〳〵と出で來ることは、東京などにて稀に見る處なり。髪の切りかたは、分けたるあり、ガリ〳〵なるあり、四角形ガリ〳〵は巴里特有の風にして、大方はこの俗に由るがごとし。これは半ば機械的剪刀を用ひ、半は全く手剪刀を用ふ。されどもその剪刀を使ふは、我が國のごとくチャきつかせて、拍子取るにはあらず。髭剃るには、殆ど顔の地の見わぬまで、石鹸を施し、鋏る後徐に刀を加ふ。これも我が國のごとく、頬をつまみ、唇をねぢり、鼻を引張りなどして、丁寧にもてあつかはず。また決して鼻の孔及び耳の孔の毛をそらず。眉をよせず、額を削らず。是等はいづれが得失あるを知らざれど、涙を呑みタシャミをこらゆる要なきは、我等ごときには最もよし。髪を刈る前には、まづ香水にてこなし、白粉を施し、漿附にてあしらひ、然る後に刈りはじむ

切り毛の類を防がんが爲には、喉の廻りに真綿を繞はしめ、肩より足に至るまで、白布を蓋はしむ。これらの白布は、必ず一人〳〵に新しきを用ふ。刈り了れば客の意見を聞きて、香水にて頭を洗ひ、又その顔髭は鋏小手または剃にて佛國風にひねり上るを例とす。

髪のみを刈り込むもの、顔髭のみを手入さするもの、おの〳〵思ひ〳〵なること我が俗のごとし。たゞおしなべて獣人は、その毛柔かなること猫の毛のごとくなるに、我々はその剛なること針鼠のごとくなれば、度ごとに刈人をおどろかさぬは稀なり。刈込料は中等の處にて、我が七八十錢、別に心附として十錢ばかりを與ふるが例なり。

洗湯は、大に我が國とその趣を異にす。こは我がごとく容易ならず。その湯屋はいづれも堂々と構へて、一階より二三階以上に渉れるもあり。入湯せんとおもふ人は、まづ入口の受付に至らざるべからず。さてその守衛人に、湯の例の種類なるかを問ひ定め、甲種乙種などいふことし、切符を買ふ。これには必ず浴室の番號を記

せりこをもちて指示する處にゆけば男子の番人あまたあり。彼等は客の顏を見て無禮なる挨拶と共に、その切符をうけとり、その室に誘ふ。さて湯をひねり出し、巾を敷くなど、忙はしげに立働く。

そも〳〵我が國にて、洗湯といへば大なる湯桶に並彼の別なく平等に眼を洗ひ、足を洗へども、こゝは然らず。一室は一人に限りて使用することゝしてその間は中より鍵を卸して人の覗ふことを禁ず。湯桶は最もよきは大理石、然らざるは側板なり。いづれも船形にして、以て寢るべく、以て坐すべし。水と湯とは管をひねれば自在に出づるやうにせり。或は天井より一直線に湯水を下して、身體に全部を洗ふやうにせるもあり。浴室にはこの湯船の外に、椅子をおくこと二三、又化粧用の品を備へつけたるもあり。洗はせんと思ふ時は、その旨をいへば、番人來りへゲの皮の手袋として、ガシ〳〵と洗ふ。石鹸は前以て水にて溶解せしを、小桶に入れて持て來り、頭より足の爪先に至るまで無遠慮にこすりつけ白坊主の如くに取成し、温で洗ふに氣味わるけれど心ちよし。

浴衣は最も清潔なるを與ふれど、大方我等よりいと大きくダブ〳〵とせる、身につかぬ心ちせらるゝもをかし。中等位の湯には必ず湯船に敷くに白布を以てし、その上に湯を入れて浴するやうにせり。これは昔我が國にも行はれし所謂風呂敷の名の存する事にして、何となく桑郷の懷せらるゝは、我のみにや。

湯屋のありさまはかくの如くなれば、一家にて數百の湯船を備へ、數百の浴室を備へざるべからず。且人ごとに之を清め、之を更ふれば、その手間のかゝること我が國に倍すべし。かゝれば賃錢のごときも頗る不廉にして、最も低きも我が三十五錢四十錢の間を下るはなし。

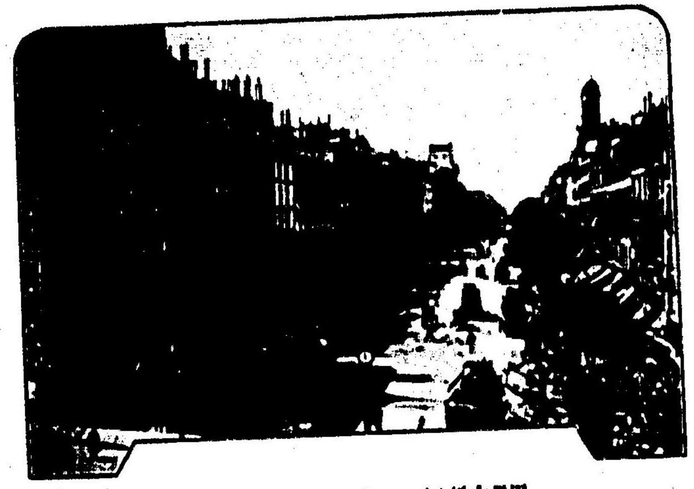
されば當地の人々は我が國のごとく日々入湯するものはなし。大方の人は月に二三度、下等の人民は年に二三回、甚しきは一生入湯せざるものもありといふ。我々日本にて慣れし俗によりて、一週に二度も入湯すといへば人々皆あやしがりて、その所以を問ふに至る。これこゝの人は、日々水にて身體を拭ふ習慣あるにより、湯に入らざること、一ヶ月を經るも、割合に疵ゆき處も生せざるとぞ。

花戰(即カルナバル祭)

春立しより池の氷も解けそめ、昨日今日は草木もやう〳〵笑を含めり。長き日數を暖爐の前に過しゝものどもゝ、爲に事に外がちなるを時として、カルナバルの祭は行はれぬ。

二月十四日は、その當日なれども、大通りは既にその二日ばかり先より花戰はじまれり。十二日の夕それと聞くより亞り見しに、人はこゝかしこに山なし、各その障とりして戰ひ樂なり。奈しく見てかへらんも本意ならざれば、一町ばかりの間戰ひて、この夜は歸りぬ。

十三日は雪の中よりと思ひしかど、障ありし爲、夜の十時ごろより出かけしに、その戰ひ樂なること、昨夜に倍せり。この度は味方三四人を得しかば、一しほ勢ひづきて、大和をのこの腕見よがしに戰ひ、二時頃家にかへりぬ。遂て後も明日の戰ひの用意をさ〳〵忘らず。夢はグランプールバールあたりに馳せたり。



巴里大通りグールバールにそりヤン

第一圖　佛國巴里

十四日目さむれば、雨すこし打かすみたり。晝になりて空晴れぬ。二三の人々と間じく戰場に押し出しゝが、今日はいづこをその街と定むることなし。門を出づれば四方悉く敵にして、戰を挑まざるはなし。されど猶グランプールバールをさして行きしに、さばかり廣き巴里の大路も、殆ど人もて埋められたり。

戰は止む時なければ、錦花は常に空に舞ひ、人々皆錦を裝はざるはなし。その花戰の方法は如何といふに、五色の紙を丸く小さく切り、凡そ一分四方遥ふ人ごとに、そを一握も二握も打かくるなり。この紙

は各〻用意するにはあらず、必ここを商ふものありて、至る所に繁はり上げて買ひ候へ〳〵と強ひ居るなり。その入れたる袋は一斤入五十サンチーム(我が二十錢)を例とせり。それより以上はいかなる大袋もあり。されど通行する人は、皆二斤若くは三斤ばかり買ひ求め前後左右に向つて打合ふなり。その他同じき五色の紙巾二分ばかりなる、長さは數十間もあるを卷きて、賣れるあり。ごは高き窓より投げおろし、或は立木に打かけなどする爲なり。また同じきほどばかりなる紙にて、我が國の塵拂の形につくれるもあり。ごは肩につもれる紙片を拂ひ、或は之にて人の顏を撫でん爲なり。

かゝれば各市街の並木には、かの五色の長紙を打かけたれば、さながら花盛のごとく、又七夕祭の趣あり。又高樓の上より之を數百千本投げおろすありさまは、錦の湯布とや名づけまし。

今日は老いも若きも貴きも賤きも、一日の暇を得て、悉くこの花戰に臨めば、その盛なること思の外なり。素より敵味方の區別はなく、いはゆる當り法廻に打合ふさまいと勇ましく優なり。然れども大別すれば、男と男とは味方にして、女と女とは味方なり。即男女の戰爭なり。且に負けじ劣らじと揉み合ふに、かの一斤二斤の紙袋は、碎く間に拋ち盡すべし。されば、さばかり博き巴里の市街も至る處、この小紙の積ること二三寸ならざるはなく、深き處は一尺以上に及べるもあり。こは一たび地に墜ちるは決して拾ひ採ることを許さざる定なればなり。若し之を再び拾ひ採るものあるときは非常なる不名譽にして、永く社會に入れられざるに至るといふ。

おのれ等の一隊は、初陣の功名せんとて、共に進みて奮戰に力めしが、時の間に散り〳〵になり、一騎にて數千騎に當りければ、體はさながら錦にて綴はれたるがごとくになりぬ。これ必しもお轉場ならざるも、今日を晴と若かざりて、男に沙汰合ふを名譽とするが上に、日本人はことに目立ちて見わしかば、襲撃せられたるに由れり。されば一人はかへりて後、衣を脱ぎしに、紙の出でしこと凡そ五合ありきといひ、一人は鼻の穴と耳の間とに、四五百片挾まれたりといへり。その激戰の

ほど思ひやるに足らん。

戦ふ中に最も目立ちて美なるは、少女の背後に垂れたる毛髪にこの紙片の花のごとく打かけられたるなり。最も面白きは男の口髭の上に、あまた植れるなり。最もをかしきは物いひ笑などする中に、口の中に投げ込まれて、ムシャ〳〵する男女なり。げふ、げふ、假裝をさへ許し、あれば中には天狗のごときさせるもあり。印度亞弗利加あたりの裝ひせるもあり。赤き帽子、尖り帽子、般若面鬼面ヒョットコ頬などもとより拂ふ所にあらず。

この混雜この雜沓の中に、われ〳〵をして最も成せしめしことかず〳〵あり。互に戦ふ時には、「今日は」「或は」「お機嫌よろしう」「さいひて」打かくれば、「有がたう」「さいひて打かへす。或は「貴君萬歳」と唱へて打かくれば、「貴嬢萬歳」といひて打かへす。故にわれ〳〵は屢々日本萬歳の聲の下に打かけられ、佛國萬歳の調と共に打かへしたり。たゞやゝ不快なりしは、我々に向ふて支那萬歳、遼殿萬歳などの聲を以てせしことなり。

相戦ふ事數回にわたれば、或は肩をさり、帽をつかみて、紙片を押入れんとするものあり。されども五六回以上になれば、互に相別るゝこと、約するものゝごとし。これ遊戯より眞の爭に陷らんことを防ぐなり。たゞかの色を賣るはしためのごときは、黄なる聲を出し、特更に敵の男軍に深入するも見ゆ。されど決して猥りがはしきまでには至らず。

酒に醉たるもの更にまじらず。偷兒小盜等立はたらかず。腕張り胸伸して、人を邪魔するものなし。たま〳〵馬車などにて、通りかゝるものある時は、帽ひよりてその戸を開き、例の紙片を打込み、萬歳を唱へて、通過せしむ。決して車より引おろす等のことは爲さず。

老人小供などは、かゝる處は危險の事に思へども、互に道をゆづりて、之を扶くるさまいと殊勝なり。されば孫曾孫の手をひきて、老婆老媼も、見物がてらこの群集の中にまじれり。

この日は遊は更なり、夜を徹して戦ふ事なれば、新聞などには、巴里人の狂氣する

日なりと記せり。おのれらは十二時過に凱旋せり。

そも〳〵このカルナバルは、希臘におこり、羅馬に及び、それより加特力教の行はるゝ國々に渉り、俗はり〳〵て今に殘なりといふ。古へは鮮紅粉或は菓子をもて打合ひたりしが、衣も汚れ傷をも生せしより、この小片紙に替へたりとぞ。巴里にては、もとかの廢佛めきたるものにて、互に顏を撫で合ひつゝ合ひたりしが、五六年前よりこの小片紙(コンフェチー)に爲したりといふ。

余亦與君同看花戰者、今抄當時日錄中一節、附記于此

今日屬住兒娜瑪爾節、出觀伊太利街、不問老幼男女、不論貴賤貧富、四集來于此地角天平、滿街盈巷、無不衣香、無不簪髮、出合爲集、蟻屯蜂擁、不知其幾十萬人々手把五色紙片、男擲于女、女投于男、片々舞風、花々繽紛、陸離光怪、不可端倪、眞天地之奇觀也、而其間痴々癡々、來往有一人、風流怒號、奔擁蹂踏者、此會風俗于此、不得不許以文明也

(日南)

廣告

商賣の盛なる處として、廣告にさま〴〵の工夫を凝らしあること、我國の比ならず。先づ市街の並木の間に、凡そ十間ごとばかりに、甲人形のごとく、また石燈籠のごとく立てるものあり、近より見れば、各劇場、その他の廣告柱にして、高は三四間もあるべし。夜に至るごとには、火を點ずれば立て列ねられたる瓦斯燈と競ひ合ひて、更に市中の美を增せり。余は之を名づけて廣告塔といふ。これその一法なり。

又、大きなる車に、三角形の板を載せ、そをさまざまに色どりて、賣り出しの品など、峯太に繪さへ加へて、書き立てつゝ、曳き歩くあり。凡そ車として人の曳くものはなきも、これのみは人を用ひあるは、徐歩して限なく見せしめんとなるべし。されば中にはその曳く人の衣さへ、やがて廣告になるやうにせるも見ゆ。余は之を名づけて廣告車といふ。これその一法なり。

最も簡單なる仕方は、人ごとに背に廣告札を負ひて、三々五々、徐歩するあり。さな

から大江山鬼狩行列のごとし。これらはをり〳〵聲を發して、その品の効能をいふもあり。余は之を名づけて廣告人といふ。これその一法也。

凡そ新に家を建て、或は垣塀等を修繕せんには、必ず往來人の目を憚らざるべからず。さては足場の外圍には、悉く板塀を設むを例とす。これこの板塀無地ならんは、慰もなく興もなければ、必ず廣告札を限なく張りつむることなり。大旅館など新築せる外圍の板塀には、その家の成就したらん時のさまを畫き、或は亞細亞阿弗利加、歐羅巴至る處の都府よりこの家に通ふ鐵道汽船などの道筋をかきたるもあり。余はこれを名づけて利用廣告といふ。これその一法なり。

この他鐵道馬車、馬車、汽船、汽車等の中に、張紙をして廣告を競へる社は、我が國と異ならず。停車場芝居寄などのごとく、人の群がり集る所に、各意匠を競ひて廣告し、又往來に立ちて通行人に小札を配る一種の廣告法も、我が國と異ならず。嘗の將に暮れんとする日、大通りのありさま見んとて、二三丁ばかり散歩せしに、この小札の廣告紙を與ふるもの幾人かありけん。與ふるまゝに請取りて、外套のポッケットに押し入れ〳〵したりしが、歸りて見れば三十八通ありき。是等は住立屋眼鏡屋、寄席、小間物、薪炭屋、家具屋、さては遊戯府、寫眞舗など、飲へ進すべくもあらざりしが、中には殆ど一小冊のごとくに綴ぢ成されたるものもありき。

商賣は、その品物を確實にすると、その販路を擴張するとに依りて、繁榮を來すべきものなれば、各商競ひて廣告に力を盡すは當然の事なりとはいへども、かくまでに工夫を凝らし、かくまでに費用を惜まずして、力を注ぐに至りては、殆ど驚かざるを得ず。まして都下勸工場の廣告目錄に至りては先にも言ひしごとく一々價を付し品の說明をさへ加へがれば、みづから行く事能はざるものは何品の何番と記して郵書を飛ばせば、一日の中にその品は屆きぬべし。是等はその表紙表題などにも最も意匠を凝らしたればさながら美術雜誌を見るごとちす。

プラスドラコンコルド

凡そ一國をなすものは、必ずその首府を有し、首府は必ずその中心點より割り出

されて千軒高軒また之を標準として建て列ねたり。我が古への京都は、禁裏御所を本として、一條より九條に至る市區を形づくり、今の東京は吹上御所を本として、高街を區劃せらる。是れ東西古今國をなすもの〻同じきことにて、今更にいふを要せざるべし。

當佛國の首府は言ふまでもなく巴里なり。巴里の中心點はプラスドラコンコルドなり。此を以て佛國に遊ぶものにして、巴里を知らざるはなく、巴里に來るものにして、コンコルドの大廣場を見ざるはなし。府民のこの地に金錢を費して美觀を添ふるも、また當然の理なり。

されば內外人ともに最も美麗に最も壯大に感ずるは、この處なり。この地は實に三百五十七メートル方形にして、長さは二百十七メートルに及べり。兩はセイヌ川につゞき、橋を隔てゝ衆議院は聳わたり。北は大通りにつゞき、遙にマドレーヌ寺を見る。東はチュイルリー公園より、ルーブル宮殿につゞき、西はシャンゼリゼの大通りにつゞき、遠く凱旋門を望むべし。

今は共和太平を謳ひて、廣集する馬車は、俗人紳士を載せざるはなく、見わたす街見わたす家、悉く太平の樂を奏せぬはあらざれども、若し一たび思を過去に馳せなば、彫像噴水共に哀愛を分つ料とならざらんや。

中にもストラスブールの彫像には常に花を捧げ喪服を裝はせあるぞ巴里人の心のほどもおしはかられて頗もしき、さるはその州なるアルザス、ローレンは獨逸に割取せられしかば、その死したるを悼めるなり。ある花環の中に Ci-gît France! Quand même. と書きたるを見しこそ、殊に心をよせられたりしか。

悲風慘雨

大統領フォルリエル氏の死

一千八百九十九年二月十六日夜、一天雲無くして風雨起れり。この風や尋常の風に非ず。この雨や普通の雨に非ず。されば敢て屋宇を動かす力あるにあらねど、家ごとには黑幕打渡し、三色旗には黑絹まじり飜れり。敢て大空より水を注ぐにはあらねど、人々の衣は皆濕されたり。この悲風慘雨はシャンゼリゼーの方より起

され千家萬軒また之を標準として建て列ねたり。我が古への京都は、禁裏御所を本として、一條より九條に至る市區を形づくり、今の東京は吹上御所を本として、萬街を區劃せらる。是れ東西古今國をなすものゝ同じきことにて、今更にいふを要せざるべし。

當佛國の首府は言ふまでもなく巴里なり。巴里の中心點はプラスドラコンコルドなり。此を以て佛國に遊ぶものに心して、巴里を知らざるはなく、巴里に來るものにして、コンコルドの大廣場を見ざるはなし。府民のこの地に金錢を費して、美觀を添ふるも、また當然の理なり。

されば內外人ともに、最も美麗に最も壯大に感ずるはこの處なり。この地は實に三百五十七メートル方形にして、長さは二百十七メートルに及べり。南はセイヌ川につゞき、橋を隔てゝ衆議院は聳えたり。北は大通りにつゞき、遙にマドレーヌ寺を見る。東はチユイルリー公園より、ルーブル宮殿につゞき、西はシヤンゼリゼーの大通りにつゞき、遠く凱旋門を望むべし。

欠

MISSING

今は共和太平を謳ひて、盛衰する馬車は、佳人紳士を載せざるはなく、見わたす街見わたす家、悉く太平の樂を奏せぬはあらざれども、若し一たび思を過去に馳せなば、彫像噴水共に哀愁を分つ料とならざらんや。

中にもメトリスプールの彫像には常に花を捧げ、喪服を變はせあるぞ、巴里人の心のほどもおしはかられて、頗もしきさまなるはその州なるアルザス、ローレンは獨逸に割取せられしかば、その死したるを悼めるなり。ある花環の中に Qui. est. France: Quand même. と書きたるを見しこそ、殊に心をよせられたりしか。

悲風慘雨

大統領フォールリエの死

一千八百九十九年二月十六日夜、一天雲無くして風雨起れり。この風や尋常の風に非ず、この雨や普通の雨に非ずされば敢て屋宇を動かす力あるにあらねど、家ごとには黑幕打渡し、三色旗には黑絹まじり、飜れり。敢て大空より水を注ぐには、あらねど、人々の衣は皆濕されたり。この悲風慘雨はシャンゼリゼーの方より起

りて今は佛國の天を蔽へり嗚呼上帝はこの無常の風をおこしこの無情の雨をふらして大統領フエリクスフォール氏をエリゼー宮裏より奪ひ去れり道路傳へて云く氏は本日の午後までは何の異狀もなかりしなり この日は面會日なりしにより多くの人々と快よく談話せられたり夕の六時頃やゝ頭痛すとて近侍の人々に語られしも さしたる事にもあらじと氣にもとゞめざりき日の暮れゆくと共に頭痛は猶止むべくもあらねば此に初めて醫師の許に人を走らせたり醫師の來だ來らざるに氏は長椅子に横臥して余は最早絶命すべしと叫べり醫師來り診せしに この病は卒中症にして百藥も今は効なし覺悟すべしといふ即ち驚きて諸方に電報を發す これに胸うたれて來り集まりし人々は内閣大臣上下兩院議長 さては氏の家族親友の某々なり 各〻手を執り耳に口よせて呼び叫べども今は甲斐なし だゞ氏の令孃の涕泣して父上々々と續けざまに呼ばりしに 幸うじて眼を開き最早是までなりと夢中に答へられしが此世に遺し〻謂なりといふ時に正十一時

かゝる急病なれば何事も間に合はず授戒の僧も目ざし〻者は來らず止むを得ず近き寺の凡僧を誘ひ來りし程なりとぞ

嗚呼今より數時間前までは佛國大統領として威名赫々歐洲の文明は我より之を發すとばかり誇揚せしに 今は枕頭燭盡の火におくられて長くかへらぬ人となれり 氏は一千八百四十一年一月三十日巴里に生れぬ 家は椅子製造職の商人なりき 初めアーブル港の製皮職商家の小僧となれり 勤勉篤實なりしかば大に主家の信用を得 種無く別に戸を設け葡萄商を始め 貯蓄信用益〻加はり 遂に問港商法會議所の長となりぬ この間兵役に當りて陸軍大尉まで進みしこともあり 年四十に及びてアーブル港より選ばれて下院の議員となれり これ氏が政治界に於ける運動の初なり 氏は常に勤勉篤實を以て人に推され 遂に下院副議長の職につきぬ 氏の名望此に至りて益〻加はれり かくて氏は海軍大臣にまで累進し 後故ありて暫職せしが 萬衆の希望は氏をして長く閣處に置かしむること能はず 千八百九十五年一月十七日 國民議會投票の多數を以て大統領の職には

就きしなり。

そも〳〵當國大統領の任期は七年なり。然るに氏は漸く四年一ヶ月にて、この名譽の位地を拋つ、不幸に陷りしは、氏の爲に最も惜むべし。人々はいへらく、氏の職に在る間著しき事は見わすれども無爲にして治れり、將に來らんとする大博覽會の如きは、最も氏の功名を圖はす時期なるべかりしを、嗚呼如何せん、今は遂けり、佛國の天地は、悲風慘雨をもて蓋はれたり。

國一日も主なかるべからず、この悲風慘雨の中に、早くも新大統領選擧の聲は傳はれり。一方には奏凱に奔走し、一方には選擧に奔走す。巴里市中は囂々、泣くもあり、怒るものあり、新聞賣子は、聲を枯して舊大統領の死を叫び、新大統領候補者の檄を傳ふ。かくて十七日は過ぎぬ。

十八日は愈〻國民議會開會の日となりぬ。國民議會とは、路易十四世の宮殿たりしヴェルサイユに開かる〻ものにして、全國の民望に依て、國の主宰者を定むるものなり。こは古へよりの習はしにて、大革命の時にも之を開きて、民望の歸する人を貴し、夫より大統領選擧は、例に依て必ずこゝにて行ふ事とす。即ち、全國民の代表者、上下兩院議員の投票に訴へて之を定むるなり。昨夜以來この候補者に指れし人々は、上院議長ルーペー氏、前々内閣總理大臣メリーヌ氏、前陸軍大臣カペーニヤク氏、下院議長デシャネル氏、現内閣總理大臣デュブイ氏等なり。例の黨派多き國柄なれば、各〻我が黨の人を擧げんとて、謀略少しも忘らず、檄文舞ひ電書飛び、大勢何處に歸すとも見わざりき。

開會は午後一時を以てせらるべしといへば、上下兩院議員は更なり、傍聽せんとて出でゆくもの、不成に倦へんとて詰めかくる憲兵巡査、共和護衛兵さては之を見物せんとする老若男女、巴里よりヴェルサイユに至る停車場は、さながら黑山の如し。時刻至りて議事は始まりぬ。此に至り大勢は既に定まりてルーペー氏の名は至る處にさゝやかれぬ。然れども氏に反對なる面々は、何處までも仇せんとにや、投票の了るまで、日々に何故にドレフユザールを選ぶか、パナマストを排斥せよなどゝさへ叫び、王黨の一人は起ちて、王萬歳を唱へ、更に議長に向つて、共和

政の奏なることは恐れ入りたりなど、冷かすもありき、果ては囂々喧々、聴衆席よりも聴撲するなど、亂軍のさまありしが、結局左のごとくに落付たり。

投票總數	八百二十四
無効	十二
有効投票數	八百十二
過半數	四百〇七
ルーペー氏	四百八十三
メリーヌ氏	二百七十九
カペニャク氏	二十三

その他は十、八、四、二、一などの數にて言ふにも足らず。豫期せしごとく、ルーペー氏は、最高點を獲て、時時に佛蘭西共和國大統領ではなれり。然るに、巴里人の多くは、かのドレフュース排斥主義を有すれば、この新大統領に快からず、衆多の人民は、彼處に千人此處に千人所々に群集し、殊にはゲェルサイユより汽車の到着すべき巴里の停車場に推寄せ、新大統領の到着を迎へて、火に焚り火に叫ばんとす。事の體容易ならざれば、政府は兵隊巡査を繰出して、厳重に戒めたり。然れども衆寡は敵すべくもあらず、新大統領の到着するや否や、衆は一時に酔職々々ドレフュザール、バナミスト、と連呼し、彼の護衛兵の有るに拘はらず、彼の馬車の前後を擁して、遂に彼が邸に押し至れり。その數凡そ二、三、萬人、一時は馬車より引卸すべくも見わしが、護衛兵の抵抗にて事無きを得たり。跡にて聞けば、この夜拘引せられしもの四百五十人なりといふ。されば人々は早くも新大統領は長持はせざるべし、かのカジミールの如くならん、否々上院に非常の勢力を有すれば、憂ふるに足らずといふものあるなど、批評は今に絶へず。

さてエリゼー宮にては、故大統領の賊を來る二十二日まで、假床に安置し、乘棺をして之を葬せしむといへば、日々そのあたりは、人々の群がりゆくこと蟻のごとし。今日十萬人ゆき昨日は八萬人ゆきしなど聞くさへいと珍らしければ、一日おのれも詣でぬ邸の四方には憲兵巡査巡々しく立並ひて護衛怠らず。人々は道も

見ねぬまで門前に詰めかけたり。即ち徐にその中にまじり、盛の少むがごとく、推され〳〵て邸内に入りぬ。たゞ見る黑幕打ちたる殿堂には、處々に三色旗を交叉し黑絹を加へて、喪を表せるいと悲し。百二百人ばかりづゝ、一つれになりて進みゆけば、大なる廊下の奥に、故佛國大統領の柩は安置せられたり。四方には諸方よりおくれる花何萬となく飾られ、幾千の燭臺は、その光を放てど、何となく薄暗き心ちせらる。柩の側には僧尼讀經し、親族侍せり。式部官は處々に立ちて、この入り來る人々を迎へ送り、護衛兵は諸方に立ちて嚴粛を守れり。その人々は、素より、老若男女を論せず、貴賤上下を別たず、内外人を分別せず、されば宋だ五六歳の小兒もあれば、七八十の老人もあり、職人などのその服いたく汚れて傍の人々鼻を掩ふばかりなるもあり。かくさま〳〵の人、いろ〳〵の者ども集まれども、互に離を呑み、道を譲り履の音にも心をくばりゆくさま、森厳にもあはれなり。一拜了りて更に庭に出づれば、卓は六七ヶ所に設けられて、各その氏名を署するやうになりをれり。予はすゝいそがず、静にその名を署しゆくも、何となくものかなしく、おのれも同じく〳〵氏名を署し、日本人なる旨をも加へかきて、その邸を出でたり。

悲風慘雨の中に、早くも一週日をおくり、二十三日の晩とはなりぬ。げふは佛國民が、佛國をおくる日なり、故大統領の屍を國葬を以ておくる日なり。されば、その式に列なる人々は更にもいはず、高きも賤しきも永別の情を告げんとて、ユリゼー宮へと押し寄するもの、引きもきらず。さはれ宮裏は限あり、いかでこの無數の人民を容るゝことを得ん。是に於てその柩車の通行すべき道筋に、早くより詰めかくるものまた數へ盡すべからず。

此日一天霽晴れて、さながら春のごとし。然れども街々の瓦斯燈には、各々火を點せられ、更に黑絹を塞はれたれば、何となく憐れを催さる。余は八時頃寓を出でゝシャンゼリゼーの方へ向ひしが、人々は既に群がりて、さばかり廣き大通りも隙の間はんだに無し。この柩車の通行すべき筋々は、その寺なるノートルダームを經て、ペール、ラセーズの墓地まで、寸地も空しきはなしと聞けど、せめては少しにても廣き處をとて、プラスドゥコンコルドの邊に落付ぬ。

楽より人は七重八重に垣なしたれば、いかに延上りたりとて、馬の尻だにも見ゆべきやうなし。されば、この遊れば、せの人々に便利を與へ、且はおのが利を得んとて、素早き商人は、或は階子或は椅子、さては荷車踏臺やうのものを持出し、一人前凡そ何圓と定めて、乘れよ上れよと勸む。その價四圓以下一圓以上なるべきやうなければ、さるべき場所を選みて乘りぬ。暫しする中に後をかへり見れば、又二重三重に臺を構へて人は山のごとくに高まれり。

さて通りを見れば、その通行すべき兩側には、龍騎兵、獵騎兵など、槍を揃へて護衛せるさま、先づいかめし。出棺は九時半と聞ゆれば、百萬の人々今か〳〵と待ち待つに、凱旋門に備へたる大砲の音續けさまに響きわたりぬ。之を合圖にして、先づ來れるは胸甲騎兵、その數幾大隊かありけん、路を揃へて徐々と歩み來ぬ。ついで各國よりおくられたる花、凡そ十二臺、皆二頭立の馬車にてふさ〳〵とおくられ來ぬ。引き續いて打裝れつゝ馬車に乘ける婦人及び小兒は、故大統領の家族なるべし。程無く六頭立の馬車の黑々と裝はれたるが見ゆるは、即ちけふの主人たる故佛國大統領フェリクス、フォール氏の柩を載せたるものなり。

馬には黑絹を裝ひ、車は船形の黑塗なり。蓋ひは悲花形にして、無裝し、更に飾るに黑絲を以てす。かくて四方には生花、或は造花の環形なるを取付け、又佛國國旗を交叉す。車輪も同じく黑塗銀裝にして、徐々と歩みゆく馬に連れて旋れる、いと悲し。人々は悉く脫帽せり。涙を呑めり。息すまりせり。

續いて歩み來れる人々は如何。曰く新大統領。曰く內閣大臣。曰く各國公使。曰く上下兩院議員。曰く官吏。曰く農工商。曰く軍人。曰く各州代表者。曰く新聞記者。その他數へ立てば殆ど指も損はれぬべし。各々其關係ごとに旗を立て、花を捧げて靜粛に歩みゆくさま殊勝なり。この中に殊に目立て見ゆしは、各國公使の各々その國風の裝ひせるさまなり。又裁判官及び學士會院會員、大學教授等のその服の古風を裝へるごとなり。袖長く丈長く、希臘羅馬の古畫を見るがごとくなりき。

花は既れも環形なれども、各〻その意匠を異にしたれば、いたく目立ちたるもあり、さならぬもあり。その大なるはその環のさしわたし三間以上もあるべく、小な

るものも一間以下なるはなかるべし。吾々我が國際の名をかき、故大統領君に乎向すなど記せり。旗は錦繍など〻思はる〻もあり、又生絹に繡せるも見ゆ。大方横旗(所謂西洋風)なる中に、たま〳〵縱旗もあれど、孰れも短し。この花、この旗を持つ人は、同じく、その行列中の人々にて捧げ決して人足などの怪しきものには持たせず、最も眼を引きたるはアルザスローレヱ州の代表旗なり。さるは小さき黑旗に、一はメッ、一はストラスブルグと記せるが、共に少女に捧げしめて、その後につきて悲壮の音樂を奏しつ〻來れるなり。余等外國人としても、敢て佛を愛し獨を愛せずなどいふことはなけれども、何となく涙を催されぬ。

この行列は、午前九時半より午後一時に至りて、辛うじて了りたり。尊より高地にかけては、二里あまりも有るべけれど、後衛の來だ出できたらざる中に、式は既に尊にて半を過ぎたりといふ。以てその盛なりし事を思ふべし。

この費用は十六萬五千法にして、その半を以て市街その他の用に供し、その半を以て外國人接待及び電信遊覽等の用に供すといふ。歐洲各國が外交に力を盡し居るさま、之にても悟らる。式場にては、新大統領及び內閣總理大臣以下の演說などもありしかども、入るべきやうもなく、聞くべきやうもなかりき。

こゝに記しおくべき一事あり。さるは巴里人の多數は、新大統領を悅はず、又王黨及び國民黨と呼るゝものは、共和政を好まず。故にこの機に乘じて、一大革命を企てんとする兆の屢〻あらはれし事なり。政府にては十八日の騷動ありしより、國葬の日には、極めて靜粛を守るべき旨を布告し、警視廳か怠らざりしも、一の騷動は猶ほこの日に起りたり。そは前にも記し〻前陸軍大臣カペニヤク氏の官房長なりしロージェ氏、此日護衛將軍の一人たりしを、衆多の革命派を勸め、今は旗團長たりしロージェ氏、此日護衛將軍の一人たりしを、衆多の革命派は、横失ふべからずと爲し、列を亂して入り込み、將軍の馬の手綱を執りエリゼー宮に向はしめんとせし事なり。幸ひにして將軍の堅く執て動かざるより、大亂に至らざりしかども、その黨派は數人縛せられしなど、非常の騷雜なりき。蓋し、大統領の在らざるを幸ひにこの將軍をエリゼー宮(即ち大統領邸)に引入れ、此に衆を募り、天下に號令せんとの謀略なりしなるべし。この將軍さほどの名望家にも有

らざるべけれど、之を事の初とし、王黨にては、その首領にして今は佛國より遠はれて、白耳義に在る公爵ドーレアン氏を招かんも安かるべく、又かゝる期に至らば、ズーラングン將軍(王黨の領袖巴里總督)カペニヤク氏等を起すにも便りあらんことを思ひ量れるなるべし。されば今に公爵ドーレアン氏は檄文を飛ばせりなど、籠々として傳へらる。又急激社會黨無政府黨などは、素より王黨の主唱する所とは黑白の差あれども、その機を見て乎を下すべきは一なるを以て、是等の面々も、數多加はれりと傳へらる。思へば、佛國人民は、悲風慘雨の中に、故大統領をおくりしもまた如何なる悲風慘雨を與さんも知るべからず。是時に當りて、職に大統領に就きたるルーベー氏の一身は、その重きとアルプ山の如きものあらん。

郵便及び電信

電線蜘蛛の巣の如しなど言ひて、開けたる國柄を示すは、宋だ幼稚といふを免れず。されば郵便といへば、就れの國を問はず、人口は日々に增加し、家屋は月々に增築せらるべき筈なれば、大なる電信柱など並び立てられたるは、其爲はしく、且は道路の風景をも損すべければなり。

「柳樹をこきませて」と詠ひけん古への朱雀大路は見ねば知らず、巴里市を散歩して心ちよきはいづこを見てもすさまじき電信電話電燈などの柱なく、人道車道明かに分れて、柳樹やうの木を左右に一文字に植ゑ聯ねたることとなり、遠くより之を望めば、春の朝の霞に隱ざられ、秋の夕の露に色めくなど、わもいはず、これ電信電話電燈線等は、悉く大地の下に通せしめて、すさまじきを避けたるが故なり。」

若し電信電話等を使用せんとするときは電信郵便局に至れば、直に辨ずることを我が國と同じ。殊に電話及ひ自働電話は人々の集まる料理店休息所には、火力設けあれば、自ら所持せざる者は、さる所に頼みてもよし。こは必ず電話ある旨を外より見ゆるやうに記しあれば、內外人の區別なくいひ入るゝを得べし。

郵便物には種々區別あること萬國共に同じ。然れども宋だ我が國には行はれざるカルトプリュマチック電信端書とも稱すべきものこそいと面白く速かなるも

のなりけれ。さるはその形は普通の端書より聊か小にして二つの種類あり。一は書きたる後二つに折りて糊附にし、人に見わざるやうにするもの、一は書き放しにて普通の端書のごとくするもの、こは空氣の壓力にて鐵管を走り、我思ふ方に、自由自在に送りやるものにして、電信につゞきて迅速なるものなり。されば電信にては、言ひ足らず、さりとて書狀にては時間を費す恐れある時は、この端書に依頼すれば殆ど僅少の時間にて用を辨ずることを得。その價も甚だ廉なり。

そも〳〵これ等の電信及び郵便等を使用せんとおもふ者は、その局に至れば電信紙は願はずとも勝手に取り得るやうになり、郵便は云々と一口いへば直にその請ふものを出す、その迅速なること影の形に從ふがごとし。小包郵便を出さんとには、一寸とした書付をすれば、直に運びくれ、その他雜誌、原稿、新聞等の類は衡ありて出しあれば、その目方を量るに、自ら載せ試みても先方に頼みても、何の評もなし。墨筆の類は數多供へ付けあれば、表書などはこゝにて認めてもくるしからず。

投入すべき箱は巴里、巴里外、全佛國、及び諸外國、草稿、雜誌、細と書分けて、一目瞭然たれば、すこしも惑ふことなし。この他總ての街ごとには、必ず投入函あること、我が國と同じ。但し大方は人の家の戸或は塀、又は瓦斯燈などに取付あり。かくて是等の事務を取扱ふ局員は、男女相半し、配達人は電信郵便を問はず、悉く男子なり。それ等は兵士風の帽子を戴き、服裝も軍人めきて、赤襟赤筋金色の釦など、頗る洒脫にして、足さへ早きを覺ゆ。

交通機關

坦々たる道路は、杖ふりながら、腹背高く少くも心ちよき車ながら、馬車若くは汽車に乘りて、打めくるもまた一興なり。馬車には、その種類頗る多けれども、一般に最も用ひらるゝは、毋衣馬車、箱馬車、及び鐵道馬車、電氣車、乘合馬車（日本の所謂ガタクリなり）なり。毋衣馬車、箱馬車は、恰も我が人力車のごとく、至る處ごとに客を待たざるはなし。車は多くは黑塗にして、馬はつや〳〵と肥え太りたるに、馭者は

高帽子(但プリッキを黑塗にしたるもの)に、職服を着し、重たげなる體を取者羨の上にもたげたり。乘らんとおもふ人は、ことさらに物いふにも及ばず、杖を上げ、又は手を以て招き、又は口にてチューといへば、直に應じて我が力に寄り來る。即ち打乘りて往かんとおもふ處を告ぐれば、鞭の音と共に馬は走りて、その力に進む。例の砥のごとき大路なれば、四五丁若くは六七丁の間は、目たゝく間にゆくべし。その價は、遠近を論ぜず、市中は總て壹フラン五拾なり(即ち我が六拾錢)これに必ず酒手として、我が貳拾錢、内外を與ふるを例とす。

いかなる身分卑しきものなりとも、僅に壹フラン五拾を投ずれば、我が大臣馬車のごときに乘り得ることなり。されば夫婦の相乘り、引眼の相乘り、書生の相乘りは珍らしくもなし。下女下男のごときものも、乘りゆくこと、更に我が人力車に異ならず。

鐵道馬車、電氣車、乘合馬車は、市中を縱横自由に縫ひゆけり。こは大なる文明にて、その往く處々の町名を記しあれば、別れざるものにても、安心して乘りゆくことを、

を得。その製、東京の鐵道馬車に異ならざれども、たゞ二階を設けたるは、我が國にては、未だなし。あまりに込合ふ時には、その所々に設けある待合に詣り切符こは何町ゆき何號と記しあり)を請取り、車掌に示せば、車掌はその番號の順によりて席を定むることなり。こも市中おしなべて、下は參拾サンチーム(拾サンチームは我が四錢なり)二階は拾五サンチームなり。これは酒手を要せず。一天雲晴れて、小春日和の頃、この二階に腰打かけ、頬杖つき、市中を東西南北に馳せゆきて、雜沓せる人間どもを見むろすは、また旅中の憂を晴らすに足る。

これにはさま〳〵の人相乘り、肩をすり足を重ねて坐することもあれば、風俗言語を知るには、一の平民學校とも名づけらるべし。成人のごときは、終日この馬車に乘り、我に隣れる人に物をたづねて、佛語を卒業せるもあり。これ決して不都合の語にあらず。

汽車は市中を走れるは、甚ゆるやかなり。これも馬車のごとく二階をつけたるもあり。但し馬車に比すれば、その速力早ければ、所々に停車するをまちて、乘らざる

べからず。但は馬車に同じ。かの類杖見物的の旅客の用には、これもまた多し。されゆくがごとき誤なしといふべからず。

はれ馴れざる間は、よくその町名をおぼわ乗らざれば乗せんと欲して、西にひか

汽船とはセイヌ川を往復するものにて、こもその数甚多し。こは種々の處には必ず機構ありて、乗り降りの便に供へたり。この川は市の中央を流れたれば、この船を利用する場合も少なからず。例の安直なれば、われも〳〵と乗客絶わず。旅人としては、この船に乗りこの川の両岸の工事の盛大なること、種々の構造壮厳にして、一々その式の異なるを見ること、さてはあまたの船舶の荷物をあげおろしするを見ることなど、また實学の一端ともなるべし。夏の夕ぐれ涼風に衣をふかせて、両岸の燈花のごとく波にうつれるを見ながら風流なるをどこをみなの音樂を奏しつゝあやしき節にてうたひゆくを聞くなど旅の楽みの一つにも数へらるべくや。

地獄極楽

佛と名に負ふ國なれば、極楽のあるはさる事ながら、地獄の沙汰も金次第にて見らるゝこそ面白けれ。下等社會の遊戯所ときこゆるマンマルトルといふ處は我が浅草の奥山などの如く、さまざまの異行物ども多かり。そが中に地獄極楽といふ名のくすしく思はるゝまゝに、一夕ゆき見ぬ。

入口に天女の像を立て、火焔の形に限どりたる、塀やうのもの取巻ひたるは、即ち極楽天國なり。入らつしやいといふ生ぬるき詞を挨拶に、導かれゆけば、廣く長き室あり。中央にテーブルを据ゑ、左右に数多の椅子を並べたるは、入り來る客を坐せしめん爲なり。見れば脇にも向ふにも、上にも下にも、あまたたゞやめるは、髮ひ異やうなる人々なり。或は白髮長袖して、肩より羽翼を生じたるあり、或は長烏帽子めくものを冠り、大きなる鍵を持てるものあり。あるはその面天狗のごとく、あるはその髭白針のごとく、さては黒衣白裝さては青衣赤履を穿てるなど、物すご

きまでに怪し。音樂の空に響くと共に、朱面綠衣なる大の男小高き壇に上り、さまく〳〵に天國の貴き由を說く。見れば四方の壁に飾れる牛羊犬豕の類稍昔して聽けるも奇なり。この間客はかのテーブルにつきて茶を呑むあり、酒を飲むあり、笑ふあり、ひやかすあり。

かくのごとくすること暫時にして、更に錫杖やうのものをつき、漫歩めくものを著たる男、我等を天上國へと導く。階を昇ること二十ばかりすれば、別に數多の屏掛を並べたる室あり。打休らひ居れば、正面の處に、一條の光を放てり。見れば、妙齡の美人、天女の形に裝ひ成し、(西洋流の天女は、皆れも裸體にして、肩より羽翼を生せり。我が國のお寺の欄間などに在る天女とは大違なり。思ひ偶ふべからず。)を舞ふいどうるはし。

續いて數多の天女は、或は檜扇をかざし、或は花を嗅きなどせるが、ことく〳〵く他氣作用にて、さま〳〵にとり成せる、目もあやとはかゝる技をやいふべからん。この天女等は、始終無言にて音樂に合せ手を揚げ足を伸すのみに止まれども、何となく落つきて見やらる。一幕了るごとに、彼の導師はをり〳〵滑稽をまじへて天女の妙を說くに心は宙宇に逃ふらんをのこども多かるべし。客の中よりも、傾に任せて天女と爲るを許す旨をいふに、二人ばかりの白をとめ、乘り込みてこの列に加はりしこそ、ことに賞めはやされしか。此處見了りて隣なる地獄に入れば、見る限りすさまじく恐しく、身の毛も立つこゝちす。導くものより初めとして、中に居並べる男どもは、悉く鬼なり。或は赤く或は青く、角さへ生ひて劍を横へ棒を提げるなどいとおごそかなり。音樂を奏するものを見れば大なる盃の中に在りて、その下よりは火をドウ〳〵と燒き立てあり。

我等の入り來るを見て、一人の鬼、日本萬歲と聲かけて導くに勇み立ちて行けば、數多の卓子並べたるが、就れも赤く青き火の中に在り。そこに坐せよといふに、臆せず坐せしに、あつくもあらず。さて四方を見れば、大蛇卧ひ獅子吼わ虎怒り河豚嘯き獨惱恨む。その心ちわるさいふばかりなし。腸を裂くごとき音樂に合せて、是等の怪獸ども、突然走り來て喰ひかゝらんとするに、女のアルーと驚けるなど、地

獄とはかゝるものにやとくすし。

やがて一鬼大口あけて演說す。ゞりて更に又奥に導く。鍵をくゞりてゆきゆけば、ほの暗き處に席あり。赤鬼出で來て脇なる「ピアノ」を彈ずれば、正面の幕開く。一角なる鬼さま〳〵の齒を行ふ。浮世には見られずと思へばおもしろし。やがて大釜を引き出したり。この中には若き女の火蛇にまかれながら立てるがあり。暫く見る中に火はやう〳〵燃え上れり。女はやう〳〵焦かれそめたり。あはやと思ふに炎はその身をとりまきて見えずなりぬ。鬼はやがて棒もて大釜の中をかきまはして、打よろこぶ。その物すごきこと、ねもいはず。この釜にも、嬰みにまかせて入るを許せば、物好の女男二三人同じく見物人中より出でゝ焼かれたり。

そも〳〵地獄極樂の說は、その本づくところ極めてふるきは、今更に言ふを要せず。たゞ東と西とにて、その說くところ多少趣を異にせりといへども、挨する所は勸善懲惡に在り。この說や甞だ古く、この事や頗る幼なし。學問の進歩せる今世紀にありては、誠か之を眞とし思はん。然れども猶かゝる想像的實景を作り出でゝ、人を引く具とせる、人情は古今共に易りなきにや。

出でゝ行くこと數丁、燭光薄くらき家あり。案内者にひかれて入れば、こはいかに、所の字受賣の押し賣るゝ裝束も、尤き面勝ども人の入り來るを見かけてその平打ふりつゝ寄り來るなりけり。そたゝきまながれなど、大足に歩きて、五月蠅なす言問ひかはす。誠か汗あゆ肝潰れざらん。あはれこのしけこき小屋まぐもまがるゝもアニマルならでやはかくもあられけるよと、眞さめてこそ逃げ出でたりしか。

サンクルー遊記

學友水堤子、伯林より來りてサンクルーに寓す。一日書を飛ばして云く、巴城の紅塵は消尽の秋ふところなり。何ぞ天高く地闊き瀛納河畔に來遊せざるや。乎製の旧本貨は敢て宿の主人を勞するに及ばず。一車飛び來らば共に飲み共に食ひ、内外吾今に沙りて大に論ずる所あらんと。時に三十三年一月五日、故郷は是れ新年

客舎の日即ち身を汽車に託し、留離宋だ感膜に殘れるに、巴里は早う霧烟の中に蓋はれてサンクルーの旅客となれり。

この地は塞納河に深ひだる一丘陵にして、巴里を距ること我が二里餘り、汽車に次ぐに鐵道馬車を以てしたれば、凡そ四十分に足らずして忽ち着きぬ。水城子出で迎ふるに日本服を以てし、且つ云く、我々は本日は純粋の日本流を取るべし、嘉肴あるにあらねど牛肉の山なすあり、美酒といふにあらねど態々日本酒を貯へ置けり、腦神濱米これに適ひ、鶏助賣カバンノ中に陣し、烟徳利列を正して庖舎に控へたり、以て君が遠來の勢に酬ゆるに足らんと、即ち相共に坐につく。

子又云く、曾は豊太閤士卒をねぎらふに、空腹の時を以てしたり、我れ等敢て旅のまねするにはあらねど、共に公園を廻り、舊城の跡をたづね、而して後相共に飲食せんこと可ならずやと、即ち杖を執りて寓を出で、坂に從つて上る、行くこと數歩にして、右に見ゆる大樓は、高等師範學校にして、ジャクレー氏之を統べ、佛國普通教育源泉の一たり、此の前をやゝ上りゆけば、即ちサンクルーの大公園にして、萬木並び繁り池あり石階あり野あり森あり、彫刻諸所に異り、小舍所々に建つ、そのさま小グエルナイユの趣あり。

之につづきて一段高き處は即ち舊城の跡なり。王朝時代には行幸行啓屢々せられ、殊に奈破翁一世及び三世は、深くこの地を愛し、殆ど離宮のごとくせしも、彼の普佛戰爭に當りては、この地は普軍に占領せられ、城は壊られ、處は裂かれ、今は密しく田圃となりてその礎だにもとどめず。

そのかみの面影うかぶ池水に
ねぶれる鳥の夢路しらずも

水鳥いかで心あらんやといふゝ降り來れば、水城子が知れる一老夫來會ひて、かしこの處も普人に踏み潰されたり、こゝの家も普軍に壊られたり、あはれこの城の高く聳えたりし時は、わが鼻もいと高かりしものをなど、打かこつも憐れなり。

是より更にサンクルーの町に至る、住民凡そ六千三百七十四人、一大寺觀あり、こ

れ即ちサンタルーの名の起れる所にして、古へクロピースの一子僧と爲りサンタルーと號し、こゝに草庵を營みしにより、今にその名を傳ふといふ。

との地陶器にて有名なるセーブルに續き、又ゲエルサイユにゆく道すぢなれば、その吸合大方ならず、芝居あり、寄席あり、珈琲料理店あり、中にもペピオンドブラーといふは、最も廣大にして、時々舞踏場に用ひられ、又上流社會の婚姻の宴など行はるゝことありといふ。

まことやこの公園にて最も名高きは人造の大瀧なり、こは常には水を落さず、時ありて噴水を興す、之をグランゾーと唱ふ、水の昂ること實に四十二パートル飛沫入方に散りその觀ゲエルサイユの噴水に次げり、則傳相抱き巖石相向ふ、人をして凄然たらしむること少からず。

又兵營あり、訓練の整常に絶わず、馬嘶き喇叭響き、そゞろに我が國の盛を思ひおこさしむ、況や彼は利根川を帶とし、是は寒納川を裾とするをや。

時に限あり、見る日は盡くべくもあらず、腹中また虛際を生せざるにあらず、即ち共に手を執りて、水城子の宮に歸る、肉あり酒あり、米あり、菜あり、給仕を命ずるものもなけれど、碧眼嬢の侍らざるにあらず、さはれ我が國權を擴張してこの米研げよと云ふべくもあらねば、水城子日本服に換とり〳〵水口を捻ねれば、おのれはフロックコートのかう〳〵と巧者ぶりつゝ、兎斯に火を點じ、嬢が眼を驚かしたるものをかしげふは嬢て岩本雷峯氏の監督の下に働ぐべき約ありしに、氏は急に病をおこして會合を辭せられたれば、相食ひ相飲むものは、おのれ等二人の外に、田付十口氏の入り來れるのみ、十口氏は巴里に家することを久しく、佛日料理の精通なれば、その味ひ以上は總て氏の全權に委ねたり。

燒鍋卓上に坐せられ、飯鍋、飯蛋なり、その脇に侍せり、瓶詰の日本酒、瓶詰の麒麟酒、必ずしも鉛筆を用ひされども、箸の不自由なく、小コップ以て我が銘酒を舌打するに、適せり、高襟正しく畏みかしこみて喫ふ必要も、先れは、ソップの吸ひ方にさへ心配することもなし。

食盡き更傾きたれども、談は了るべくもあらず、嬢坐をおし進めて、この家は古へ

の大劇場の跡なり。花破翁三世は屢々この劇を觀られ、帝の玉座の跡今猶存せり、見候はすやといふが面白ければ、蠟燭乎にゝゝ携へて限なく見廻る。嬢はこゝを先途と妙なる調に一層力を入れて、この室は座敷なりしなり、かしこの口こそ、礼を賣る所にてはありけれ、こゝぞ即ち帝の玉座の跡なる廊の長々しき階子のまがれる、總て劇場の製作ならすやなど、いふ〳〵引きまはさるゝに冬の長夜もほのほの明けんとす。

淋かまたむかしを想ふるうつせみの
世はわざをぎのわざならすやは

情は數くべくもあらす、談は丁るべくもあらざれども、さのみやはさて、水城子と袂を分ち、十口氏と共に、例の宿車にて巴里に歸りぬ。家につきし頃は、星の光やう〳〵薄らぎて、世は早う六日の空となれり。

萬國大博覽會

十九世紀の末葉に當りて世界の呼聲は博國博覽の事件ゝ、佛國萬國博覽會ゝに歸せり。當時余は幸に巴里に在りて、親しくその狀況を知れり。いかで一篇の記なかるべけん。

實にやこの大博覽會は平和的世界の戰爭ともいふべき大仕掛にして、宏大なることは、從來に嘗てその比を見すいはゆる敷地は巴里市の西南なるシャンドマルス、エンヴァリードを左右の中心點としセーヌ川を挿みて、トロガデロー附近、オルセー河岸、コンフェランス河岸、アンクン街、クールクレーヌに及ひ、その面積實に百八萬平方メートルを寫けり。之に陳なる建築は右各地に散在せるが總坪實に五十四萬平方メートルに達せり。試にこれを從來のものに比ふれば、左のごとき差異あり。

千八百五十五年　總面積十六萬八千平方メートル
建物坪十二萬平方メートル
千八百六十七年　總面積六十八萬七千平方メートル

建物坪十六萬平方メートル

千八百七十八年　總面積七十五萬平方メートル

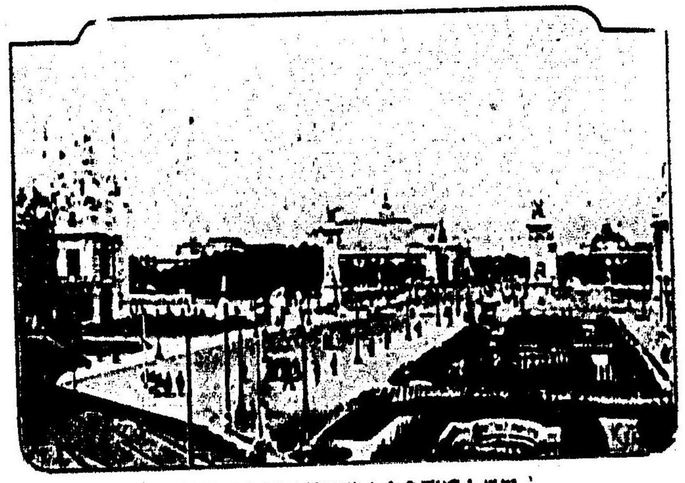
建物坪二十八萬平方メートル

千八百八十九年　總面積九十六萬平方メートル

建物坪二十九萬平方メートル

一度は一度より宏大なれども、未だ今回のごときはあらず。これ近十年間世界實業の發達を徵するに餘あらん。

この宏大無比なる建物は、大凡五ヶ所に分つて築き成されたり。第一はシャンゼリゼーといふ、巴里第一等の大通りより入りたる所にして、新開の道路、即ち露國皇帝の名を取りたるニコラス二世街と云ふ處なり。ここには大小の美術館あり大庭園あり、世界の美花は、時を選ばずこの館中に滿ち滿てり。第二は同じく新にセーヌ川に架したるアレキサンドル三世橋を渡りたる、エンヴァリードの廣場にして、佛國及び各國の工藝館美術館等悉を聯ねたり。第三はエンヴァリード橋



巴黎大博覽會大小美術館及歷山三世橋

より、アルマ橋に至るまで、セーヌの兩岸の建築にして、その左岸はヒュイッサンス、デゼトランゼーと稱し、各國互に固有の方式によりて、構造輪奐の美を競ひ、その右岸は園藝館、萬國會議館、その他諸館並び立てり。第四はシャンドマルスの大場にして、祝祭殿をはじめ、機械、理化、教育、文學、技術、農業、山林、水產、織物、穀物等の諸館相並べり。第五はトロカデロー樓閣を中央として、露國東方、支那、日本、及び英佛殖民國の建物興行物等、各その特色を輝かせり。この五大區域の外、また所々に一廓を爲して、各地の觀世物興行のみを專

第一圖　佛國巴黎

らとせるあり、各國產物の販賣及び飲食店あり。

かくのごとく所々に散在せしめたる配置は、觀覽者を四方に分散せしめん方法なり。これ若し一ヶ所に宏大なる館を作りたらんには、觀覽者は日夜こゝに集中して、徒に混雜を引おこし、これが爲に、心身疲れて、その目的を遂することを能はざる恐あればなり。然れども會の統一と、觀覽者の便利とは、最も肝要の事なるを以て、全敷地中は容易に達し得らるべき便を與へたり。いはゆるアレキサンドル三世橋をはじめ、從來のエンヴァリート橋の下流に一ヶ所、またアルマ橋の上流に一ヶ所、海陸軍器館の中央部に一ヶ所の假橋を架し、從來のイエナ橋の幅を擴張せる等、皆これか爲なり。又種々の交通機關即ち汽車、汽船及び自動汽車あり。また人力車、後方より押しゆくものの備へあり。門はコンコルドの大廣場より進入する紀念大門をはじめとして、凡そ三十六ヶ所の多きに及び、その所々に改札場ありて觀覽者の出入に便せり。殊にその大門は五十八ヶ所の改札口を設け一時間に十萬人餘の觀客を通過せしむるやうにせるなど、設計の宏大なるを知るべし。廣場の全體は、板塀を以て圍み、上部には簡粗なる彫刻を施し塗るに青色を以てし、又所々に格子やうのものを付し、蔓草をからましめたるもあり。

そも〳〵千八百八十九年の大博覽會は、鐵材鎖瓦石材建築の競爭ともいふべくして、現に今に殘れるエッフェル塔機械館のごとき、いづれも鐵材建築として大勝利を獲たりしものなり。然るに今回なるは、必しも鐵鎖瓦等その質の如何を論せず、專ら審美上の注意と、美術的趣味とを本としたれば、諸殿、諸館、橋梁、公園、道路等に至るまで、千態萬狀、各その趣を爲し、百花芳草相競へるがごとく、人をして、眞に極樂淨土に遊ばしめ、文明のいかなるものかを感せしめたり。殊にシャンゼリゼーなる大小美術館及び撫山三世橋は紀念として、長く殘るべきものたるにより、その意匠といひ、建築といひ、最も莊嚴に、最も趣味を存し、おのづから列館中に頭角をあらはしたり。

是等諸館に陳列せる物品は文學、美術、教育、天文、地理、博物、農工商、水產、衣食住、陸海軍の諸方面に渉り、近、十年間の進歩、發達を敍すべきものたるは、勿論、列國は、更に

その國の自負心をさへ世界に表示せんことを期したるがごとし。中にも露國の如きはその國固有の抱負心をこの大會を期し殊に佛國と競爭なる故を以て最も無遠慮に發展したり。例へばトロカデローの最高地を傾して東方露國の陳列館を建て、その傍に英斯科北京間の一大パノラマ館をおこし、二三輪の汽車を據ゑ、觀客その室に入る時は、自から露の北方の大川山野を越ゆて北京に至らしむるやうに構造せるなど、その趣巧の嶄新なると共に、暗に露清の意を示せる、その大計の在る處を知るべし。かくてその本館には滿洲鐵道の雛形を出し、工事の狀況を知らしめ、又滿洲地方の物產を陳列せるなど、彼は既に彼の地方を以て殖民國視し居るもの〻ごとし。又佛國か露國に好館を結べることは、今更に言ふを待たざれども、今回の集に際しても、一萬三千百五十四平方メートルの地を與へ、新道には「ニコラス二世」の名を附し、新橋には「アレキサンドル三世」の名を附し、その橋の大柱には、佛露の歷史を彫刻し、その畔には大花壇を設けて、露國の大門を立てたるがごとき、その厚意を表せること至れり盡せりといふべし。

又獨國が新奇なる工藝物の出品を盛にせると共に、この列國街の特別館にツリードリヒ大王の蒐集に係る佛國の繪畫及び織綿度を出品せるは、昔佛の舊交ある所以を明にして、今の昔國の美術工藝の淵源を知らしめ、同時に現今の進歩の著しきを誇り、又出版印刷の計畫の大なるを示さん爲、日本、安那、印度、埃及その他東洋諸國の文字を以て、各その國々の書籍を出版せるものを陳列し、暗に世界の文物工業の大王を以て任じたるがごときは、最も人目を引きたり。勾牙利か墺國に隸屬せるを恨みて自國固有の建築をおこしその國風の肖像を祭り延いて諸工藝諸技術の獨特の妙あることを深く知らしめんと計れるかごとき彼か特別館の如きは、最も心力を注き、殆どその國實を擧げて陳列するに至れり。又大方の國々がその現代及び古代帝王の肖像、有名なる將相名士、又は遠征して殖民地を開拓せし人々の肖像等を、美しく飾り立てたるか如きも、決して無意味の裝飾物にあらざりしを知るべし。或はその商品の効能を述ふる爲に、數百頁の大冊の書を、來る人ごとに無代價にて之をわたし、或は新式の印刷機械を備へおき、見

るまに當日の出來事を擬り立てゝ撒き散らせるなど、我れこそこの業の大王なれといふ抱負を示すに外ならず。

又最も目ざましきは、列强が各その殖民地の館を建てつらねしことにして、これらはその國人をさへ誘ひ來りて、その產物を賣捌かしめたり。是れ物品の競爭ならざらんや。

どこそいへ實は各國の勢力の競爭なり。

我が國のごときも、東方戰捷の餘光に伴ひて、その陳列も世界の注意を引きし事少からざりきといへども、惜しむらくは規模狹少にして、殊に彼の擬法隆寺金堂の建築物の生憎殖民國部内に立てられたるは、千歲の遺憾なりき。

是等諸館は午後六時にて閉つる定なれば、それより後は夕景色より夜にかけて光景一變す。かゝれば大方の見物人も一たびは家に歸りて更に入り來るもあり、終日の疲れを料理店に癒すもあり、一日平均三十萬人餘を以て數へられし縱覽人なれば、時至りて是等のひらがり出づるさまは、潮のよするが如く、軍隊のくづるゝがごとし。高さ百二十尺にあまる會の正門は一時間に五萬人を通過せしひへき餘裕あれども、是等諸勢の出て來る時には、頗の倒ふ間もなし。その他東西南北の諸大門、夕べ〳〵のすさまじさ名狀すべくもあらず。此に最も珍らしきは、蓋より夜をかけて、經濟的に見物せんとする群れ〳〵なり。こは巴里人は少く大方はいはゆる田舍紳士、又は亦毛布遠若くは何事にも、勿體無い主義を主張する定人組にて、一たび出でゝまた入るは切符の二度買ひにて勿體無いと主唱して殘れるものどもなり。

是等の客を待つ爲に、氣早き商人は、會場の所々に、麵麭肉の一切賣り、酒の一杯賣り、菓子菓物の一片賣りをする店を開きたれば、時刻迫れば四方より集まり來るもの、蒼蠅の肉に於るがごとし。彼等は僅に五錢拾錢を出して、腹を滿たしむるに止まるのみにて、素よりその味の美醜等を問ふべき餘暇なし。立ながら食ひ立ながら飲み、或はその店邊に腰うちかけて、疲突飲食せるもあり、素より家の內にあらねば、大抵の間は、卓にて盛ひながら、會食せるさま、戰場のやうなり。更に最も節儉なるは、初より弁當持參にて、入場せしものどもなり。

是等はこゝかしこの木蔭、また石段若くは橋の欄干、大厦の軒下等に、各々群を成して飲食せるが、その最も川に添ひて景色よき處などには、數萬人相集まりて、おのがむき〳〵食ひ誇れる、おさましきまでに見受けらる。會場には大庭園あり。大道あれば無數の腰掛は、打据ゑられたれども、暫く間に人々占領すれば、殘りの者は持參の新聞、又は半巾を敷きて蹲ゲるもあり。僅に十サンチームを拂へば、數千の椅子は押し出されたれども、千中の一二ならでは、席料を出して、これに憑るものあらず。老人小兒男女のむれ〳〵、その色の白く愛嬌ふかきほど、盞々節儉にそ、の臙脂ます〳〵臭く、その訶いよ〳〵だみたるほど、必ず客商なり。然れども他の方面より觀察すれば、この芝上の飲食大道の立食は、即ち平民的世界親睦會にして、知るも知らざるもに別なく、互に相識し相興じ相親しめるはたゞ一家族のごとき觀あり。

夜に入れば五十四萬メートルを蔽ける、各種の大館には、數億萬の電燈輝き合ひ、百八萬メートルの土地には、こゝかしこに電燈相照らし、並木の枝々には、紅燈所狭きまで掛れるなど、更にその美觀を添ふ。加之ず千尺のエッフェル塔はその頂上に、廻轉電燈を置きて、四方にその光を放たしめ、塔身を透間もなく、五色の燈光を取被ひたれば、怒にして五色の火の柱に化し、セーヌ川には數十艘の舟を浮べて、烟火を催し、音樂を奏するに、數十の紅燈は、各國旗と共に樹上より四方に釣り下げられたるなど、いかで目も心も寐はれざらん。シャンドマルスの大館の正面を、シャトードーと云ふ。陣して水城となる。こはその館より數十流の瀑をおとし、又その瀑流よりやがて數百口の噴水を進出せしむるが故なり。されば夜ゞ妻の間は、水中の殿のごとくなるが、一たび夜に入れば、その水に青黄赤紫等の火色を寫し出せば、怒にして水は紫となり、赤となり、その下れると、上れると、五色の飛沫空中に戰ふなど、この世の見ものならず。是の殿とセーヌ川とを隔てゝ、遙に相對せるはトロカデロー大殿なり。こは先年の大博覽會の遺物にして、常は博物館に宛てたるが、今回はその一部分を出品陳列場となしたり。この大殿には、その頂上より階下に至るまで、數萬本の瓦斯及び水道管を引きたるが、夜に入りては、水火

交逝り發するさまいもいはず加之す殿前は一大花壇なるが數多の光に照り合ひて百草の匂ひこほるゝなど之をしも樂境とはいはずして就處にか求めん會の爲に新に聞きたるニコラス二世通りは、シャンゼリゼーより入り、アレキサンドル三世橋をわたりて、エンウァリードに通じたるが、こは會場中の最大道路なり、この兩方に向ひ合ひて建ちたるが、大小の美術館なり、共に夜に入れば、數萬の瓦斯燈だれのごとく、軒につゞき、庭園の花卉の紅燈、電燈と輝き合へるは、危險なき火事とも見らるべし、エンウァリードの諸館も同じく火の殿とかはりゆき、三世橋の欄干高う、一種の色を放てるは、露佛同盟の光ともなどかいはれざらん、之よりアルマ橋に至るまで、數丁の間、川に添ひたる各國の建築には、いづれも〳〵さまゝの火光を放ちたるが、水に映せるは、數萬の錦繡の纏るとも見らるべし。その右岸の、巴里の町と稱するには、種々の興行物を建たり、狂言、物眞似、手品、芝居、落語、手術、活動寫眞、電氣曜、さては人相見、手相見、辻講釋に至るまで、隙無きまでに滿ちみちたり、この間には、珈琲料理店あり、花園あり、音樂隊あり、恰も我が淺草奥山の大なるもの〳〵如く、川上、一廛も、同じくこの町の一方に在りしが、さだやつこの繪態は、端無くも、萬國人士の鼻の穴をあかしむるに、至りぬ。興行物といへば、成るべく艶に成るべく派手に成るべく目に付くやうに裝ひ成すは、いづこの國も同じ事にて、この町の光景は、會場中一種特別の光彩を放ちたり、その町はマルニエーの逆水青々たるに、例の紅燈房のごとくつらなりたるが、遠くより望めば、鼠船玉のトンチルのやうにて、老も若きもうかれ出づるもさる事とぞおぼゆし。まことやエッフェル塔下、池に臨みたる處に、パレーリュミエー（火宮殿）とも稱すべき者あり、全殿悉く玻璃にて造り、夜に入れば、數千色の電燈を點じて、全殿悉く火に化せしむ、その裝飾の珍らしきさへあるに、數多の見物人は、この火の間をねり歩くなど、然げずやと思ふもおもしろし、彼の弁當持參の經濟的見物人と、夕食後の散歩がてらの見物人とは、晩れも夜に入ると共に、この數多の火の一時に點せらるゝ有樣を見んとて、七時前後になれば、蟻のごとくに集り、蛆のごとくにうごめく、是等の人々の足を休めん爲に、數十萬の椅子を所々に据ゑられたるが、時至

れば一の空席だにも殘さず。かくて一塔に光を放てば、萬人拍手して之を迎へ、一樓に光り輝けば、一圓歡喜して之に向ふ。かゝる程に例の並木の紅燈も、やう〳〵に紅うなり、廻轉電燈の光は、紹妻のごとく輝きわたりて、こゝかしこに烟花の散も添ひければ、東に走り西に馳せ、その混雜いふやうなし。

夕風徐ろに吹き來て、噴水の飛沫溫やかなるに、流行の節おもしろき樂隊の一列練り歩くもあり。或は安南或はダオメー、さてはアルゼリー埃及などの土人、おの〳〵その國裝して、灯提行列など爲しゆくに、暖やかさの更に添ひゆくもめづらし。中にも埃及の蠟燭顯といふは、彼の國の舞と聞ゆるが、正裝せる一婦人、數多の蠟燭をそが頭そが兩手そが兩足そが腹に、あまた並し立てたるが、初の程は缺昏の歌、鼓鳴の樂と合せて、練り歩き、舞ひ廻はれるに、中頃より彼の婦人は地に寢ころびて、どざまかうざまに體をひねるに、その火の消ねざるがめでたしとて、人々見はやす。又アルゼリー行列の中に、さま〳〵の魚いろ〳〵の鳥などの形せる行燈を作り、大きなる棒の先にさし立て、四五十人、二列に押しゆく、その跡よりは黑人の女王、轎に乘りて、かつがれつゝゆく、そが前後には、大鼓あり、鐘あり、又騎兵の異やうなるが、護衛し歩くなど、白人どもの目には、いかにめづらしかりけん。珈琲休息店は、或は川邊に、或は樹蔭に、電燈まばゆきまで照らし合ひて、客を待ちいづれも各國固有の服裝せる女ども多かれば、必しも喉渴かざるも、こを見んとて出入するもの引きもきらず。ユムユム會社の世界一週パノラマ館中には、夜に入りて國々の芝居めきたることを催すに、我が國は彼の烏森の十六紅裙に代表せられて、平躍り、歌うたひ、せる涼しき夜も、汗あゆるまでぞおぼゆし。それも遲咄印度等の土人の躍と並べられたるよ。

セイヌ川に添ひたる大花壇は、一週日ごとに、さま〳〵の花を植ゑ換ふる習ひなるが、夜は數百の燈の下に、その芳を競へる、めでたさは一しほ增すに、金光燦爛たるをとめがどもの裝の樣長う曳きて、その間を縫ひ歩けるなど、天女の遊び戯るゝがごとし。

御殿殿に入れば、禮服を裝へる妙齡の女子は、素肌に金銀の頸玉手玉して入り來

る人を迎ふるが、そが愛宕は、セイ川の底よりもふかく、そが嬌聲は音樂の響きのそれよりも妙なり。

此に於ていかで人種の異同をいはんいかで國の東西を思はん引かるゝまゝに、ボルカ、マジエル吻そのむき〳〵に離り明す紳士淑女會は夜と今宵女は言擧げすべし。

三伏のあつさも夜に入れば洗へるがごとく、商品陳列に各館に賑張り合ひしも、日没しては別世界のごとし。黒人白人と共に笑ひ、黄人赤人と共に歌ふ。世界親睦會のあるさまは夜に入りて初て見らるべし。

かくのごとく世界の大呼物となりし大博覽會は、言ふまでもなく現大統領ルーゼー氏によりて開會せられたりと雖も、その事務に秩序せしは、總裁ビカール氏なり。その費用は凡そ一億高法にして、之を支出せしは國庫及び巴里市より四千高法、その六千高法は富籤より之を得しといふ。その參觀せし國々は、獨逸露西亞英吉利伊太利瑞典諾威丁抹白耳義和蘭墺匈瑞西希臘土耳古西班牙葡萄牙、ブルガリア、フィンランド、ルーマニア、セルヴィーア、アンドール、ボスニヤ、ソベリヤ、リュクセンブール、モナコ、サンマリン、波斯、北米合衆國墨其斯古巴墨、エクワドル、トクンスバール、マロッコ、通暹、支那朝鮮、我が日本を加へて、總て三十七ヶ國而して是等諸國が支出せし總費凡そ三千四百〇二萬一千法と云ふ。

第一編　佛國巴黎

第二編　巴里より白耳義國ブルッセルに至る

明治三十三年(西暦一千九百年)九月二十七日(水曜晴)　友人龜井英三郎氏と共に大陸漫遊を思ひ立ち、巴里の寓居を出て立ちぬ。是より先、龜井氏は御用を帶びてこゝに來り、萬國學術會議に參列し、余は一昨年以來此の處に居り、當時より萬國大博覽會事務の一部を嘱托せられたりしが、今は執れも組事終へにたれば、この壯擧を企つるに至りしなり。

トロカデローけふ立いでゝ白雲の
むかふすかたも見てかへり來む

トロカデローはセーヌ川に臨める丘陵にして、余が年久しく寓せしところなり。午前十一時過ぎ、大小のカバン各一つを提げ、馬車にて北停車場(ナンヂール)に至る。まづ白耳義國に向はんとなり。同寓の淺井忠、鳴地復一の二氏、又相親める川地喜三郎氏等しの別れなれども、名殘惜しまんとて此處まで追ひ來りぬ。

十二時四十分に車ゆすり出つれば、手提りかはして別るゝこゝはブリュッセル直行車なり。其の室は八人詰にして四人づゝ向ひ坐するやうにせり。總車を通じて長廊あり。裝飾清楚にして心地よし。この北停車場はサンクザールの大停車場に次ぐる大構造なれば、暫しの間は、數百條の軌道、數百輛の汽車相續き、製造所あり、人家あり、諸廣告看板の立札等にて、見る目忙はしき程なりしも、やう〳〵時立つと共に、全く郊外に出でたり。

山あれども峻はしきにあらず、水あれども逆まくにあらず、丘陵の處々におこり、森林の遠近に見やらるゝなど、大陸の野は心廣く豊かなるにいかがしき煙突にて築き成せる百姓家のまばらなるがいづれも二階造さては一階など都とはさまかはれるも面白し。林檎畑の幾丁となく續きたるに、工場やうの建築處々に聳ゆ、黑烟高く登れるなど、我が國にては見がたきけしきなり。汽車は急ぎに急ぎて疾きこと矢のごとく、多くの停車場もたゞ走りに走りゆけば、いづこ如何なる地なるかも知られず。

小丘あり森生ひ茂り畑廣し

百姓いたづく里の名や何に

など戯れに打語しつゝゆく程に、人里いよ〳〵遠く、牧場いと廣きに牛どもの遊べるあり。

見わたしの限りしられぬ大野にも

すむ人あれや牛のあそべる

猶ゆけば羊飼ふ少女がともあり。

羊かふをとめ子見れば神どもの

ヨヤンヌがルクが書をぞおもふ

相乘れる婦人、手カバンの中より林檎、梨の實など取出し、皮ながら食ふさまのいとあわたゞしければ、戯れに、

皮そがんナイフはこゝにあるものを

なにをいそぐとさながらに食ふ

とやゝ高らかに言ひ合へれど、素より彼は聞き分くべくもあらず。

二時四十分といふに車とゞまりぬ是れはサンカンタンといふ處にて、低に白耳義國に入れるなり。野山のけしき更に異ならず車は程無く走り出て、やがてクヴ|ヒといふ處に着く。こゝに白耳義國の稅關あり。關吏來りて荷物ども改む五時にモンといふに至る。こゝは軒並ひし〳〵としていとゆかしき町のさまなれども、降り見るべき旅にもあらねばたゞに過ぎゆく跡にて聞けば、この地には白耳義國上院議員某の蒐集せる圖國古物博物館ありしよし、序あらばまたゆき見ん。

六時にブリュッセル府に着きぬ。即ち馬車にて間府上市大公園に向ひたる佛蘭西旅館に宿りぬ。この家は我が國人の屢々宿る處にして、能く馴れ親しみて旅情を慰めしこと少からざりき。

そもそもブリュッセルは白耳義國第一の首府にして、その地形は高低の二部に分れ、上市下市と稱するを得べし。その上市の方には宮殿、諸官省及び外國使臣の

館、貴族、紳士の住宅多く、下市の方には市役所、集會所等の建物多く、商工業に從事するもの競ひ住めりがゝれば上市の方はやゝ閑靜にして、風月を樂しむに足るべく、下市の方は雜閙として常に繁華をあらはしたり。住民大凡五十七萬餘、言語は佛語、獨語及びフレミッシュを缺すもの多く、宗教は大方羅馬舊教なり。世に小巴里の字あり。

二十八日 金曜 小雨　起き出てゝ見物すべき處々を定む。

ウォートルロー——古戰場

奈破翁一世が偉は、恰も月と花とのごとし。盛りと見し間に直に散り、滿てりと思ふ中に既に缺けそめぬ。ウォートルローの一戰實にその運命の極まりし處、當時を思はゝ誰人も一滴の涙を注かさるものなからん。是日午前馬車にて旅館を出て、中央停車場に至り、ウォートルローに赴かんとて、プレースラリエードといふ處までの切符を求めて汽車に乘る。十時二十分に發し、南をさして走ること數里十一時に忠す驛に着きぬ。汽車中より愚になりし當國人シランソトルといふもの、古戰場を案内せんとて附き來れば、彼が言ふまゝに馬車を雇ひ一里ばかり走らすれば、ウォートルローに着きぬ。いと廣き野にて、菜畑數丁につゞきたり。その野の中央に大なる塚を築きて、當時の紀念をとゞめたり。案内にまかせて上りかゝりしに、石階總て二百三十五、膝も折れんばかりにくるしかりしも、大和魂ふりおこし、息をもつかず、二人にて走り昇しかば、案内者おどろきて、日本人は足の短かきにかゝはらず、力つよきものなりと、道づれの人々ささゝやきしを聞きしは、背も延ぶる心ちして嬉しかりしも、實は疲れに疲れて殆ど苦しきまでなりき。昇りつむれば、更に石壇を築き、その上に當時同盟軍が佛軍より分捕せしといふ大砲をもて、大きさ六メートルの獅子を鑄成して、打ち据ゑ、その臺石にはXVIII Juin 1815 XV の文字を刻入れたり。四方を睥睨せる猛烈なるさま、當年の意氣思ひやらるゝに付ても、佛國人は崩る之を喜ばず、屢々上りて、この尾を缺き、その面を打くだかんとせしものありきといふ。案内者諸方を指さして、同盟軍は彼處よりぞ

進みし、ウエルリントン將軍は、かの處に陣せり、奈破翁は彼の見ゆるあたりにて敗れたりなど語りつゞくるに、心なき風雨も矢叫びの聲に聞きまがはれ、雲の低に靡き合ふも、その同盟のむれかとさへ思ひなされぬ。

獅子塚に我れ登り立つますらをが
むかし忍ぶと我れ登り立つ

高麗劍ソーヲルローに古へを
しのびて居れば小雨降りしく

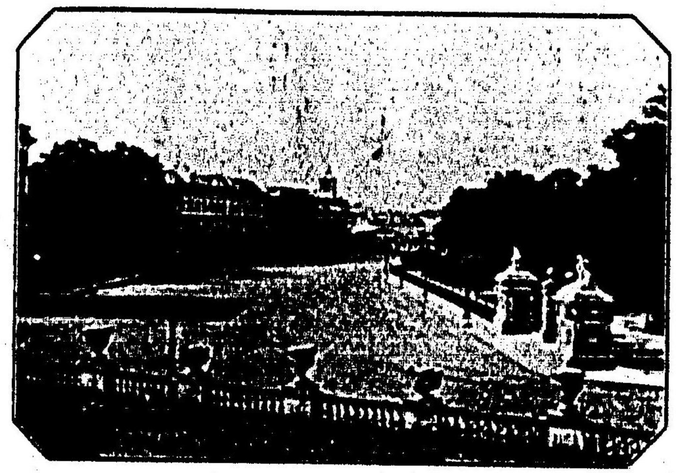
ウォーテルロー記念碑

ウェルリントンの勇を思はずして、心は敗將一世が上に及べるも、花は盛りに月は缺なきをのみあはれと思はざる人情にや。

武器展覽場といふに入り見しに當時の物として銃砲、彈丸、甲冑、刀劍、錢貨、軍服などを取り並べたり。そが寫眞帖などもありて、頗り人類に効能を陳べしも、長ならざるもの多きやうなり。頗朝公十三歳の頃性の頑はかゝる處の習はしとて東西同じ。ヴェルリントン旅館といふに入りて休ひ、茶菓など食ふ。ヴェンサンジャン及びベルアリヤンスなどいふ處々も一通り見て、本の停車場に歸る。時に午後一時頃なり。この逸恠しき客引多く、古戰場見廻る中にも、蕎麥、杖など押賣せんとて附き來るものゞもいと煩はしかりき。これ見物人を相手にしておくる遊民の徒なりとぞ。幸に余等を案内せしものは兵士上りとかいひて、すくよかなりし丈深く貪らざりしは嘉みすべかりき。

王宮

王宮といへば、我が宮城の如きを聯想すべけれども然らず、普通の家の莊嚴なるものに過ぎずして、別に町家と一區劃を成して築き上げたるにはあらず。こは西洋一班の風なり。こゝなるは、府の上市大公園の南方に在り、奥上高く國旗を騰がへし、殿門は殿に騎兵守護せり。この宮殿は古へは二個の建物なりしを、千八百二



ブリュッセル王宮

十七年に一個に合せ、希臘式に依て建築せりといふ、内部はバクー氏に依て裝飾せられ、歴代帝王の肖像をかゝげたり。現時の王はレオポルド二世にして、千八百六十五年に、一世の跡を受けて即位せしなり。今や既に老いたまひて白髮半のごとし。

國會紀念碑（コロンヌ・ド・ラ・ノーブル）

これ白耳義國の今日在る所以の碑なり。碑は、千八百五十年に起工し、同五十九年に至りて竣工せしものなり。即ち國民議會及びレオポルド一世の即位の紀念として、建てしものにして、高さ實に四十五メートル、その上に猶四メートルなるレオポルド一世の銅像を据ゑたり。かくてその柱脚には王國の九州を表せる偶像を刻み成し、當時の議員二百三十七人及び政府の重なりし官吏の名を彫り、四隅にも亜に最も妙に最も美に跪きたる婦人の像を刻成して、言論、教育、集會、信教の自由を表はしたり。この下に二大獅子を据ゑ、その傍より入る時は内部には一百九十六階の段ありて、人々隨意に頂上に昇り得るやうにせり。これに依て見る時は、當府は悉く眼中の物たり。

ブリュッセル我れ來て見れはレオポルド
一世が塔天にそひ久たり

裁判所

當府にて建築の見るべきものは、王宮よりも裁判所なり。古式の寺院よりも裁判所なり。王宮は伯林のごとく壯大ならず、寺院は羅馬の壮大に及はず、たゞ裁判所

のみは巴里のにもまさり倫敦のよりも大なるべし。蓋し近世稀に見る所のもの、面積實に二萬二千六百メートルに沙り三千四百メートル四方に及ぶ。窓の數二百四十五、大廣間二十七、中庭八ヶ所、さながら一大城郭のごとし。この建築は一千八百六十六年に起工し、同八十三年に落成せり。數多の彫像、數多の繪畫、孰れも法律裁判に關係あるものを以てせり。門傍に常に案内人ありて、觀客を導けり。以て白國に遊ぶものは必ず之を觀る習ひなるを察するに足る。

この他第一十字軍の大英雄たりしゴッフロイドブーイヨンの大彫像は今も猶英魂生きたるがごとく、又ワートルダームの建築はゴッタの當時を思はしめ、英術館なるユップ、ペーンエイックのアダームユブの繪は世界の耳目を引き、その他彫刻繪畫飾遊物等、その材料の精選せる、學士會院、大學の盛觀せる、圖書館の豐富なる、その他市廛、株式取引所、國立銀行、劇場等、その建築の壯麗なる素より見るに足るべし。

市中雜感

巴里よりこゝに來りて、先づ目にとゞまるは人の往來の少なき事なるが、こは小國なれはさもあるべし。繁かるゝは煙草店のいと美しく飾り立てられたる事なり。これ佛國は煙草は政府の專賣になりて競爭なければ、その店のごときは極めて狹隘にして、何の裝飾も爲さゝればなり。男女の服裝は巴里めかさんとしたるも見ゆれど、一般に質素にして格好わるし。巴里にては男女手を携ふる習ひなるが、こゝにては必ずしも然らず。珈琲店など、いと大なるもあれども、その不夜城として賑合へるは、僅の區域に止まれり。道路及び建築は全體にわたりて清潔なり。これは新らしき故なるべけれども、一つは人馬の往來少なきにも由るべきか。

パッサージュといふ通り抜けの勸工場、こゝにては殊に盛なり。大方の品物富貴風裝飾店などもありて、必ずしも物を購はずとも遊歩するに飽くことなし。されば夜に入れば、こゝのみは人の肩擦り合ふばかりなり。

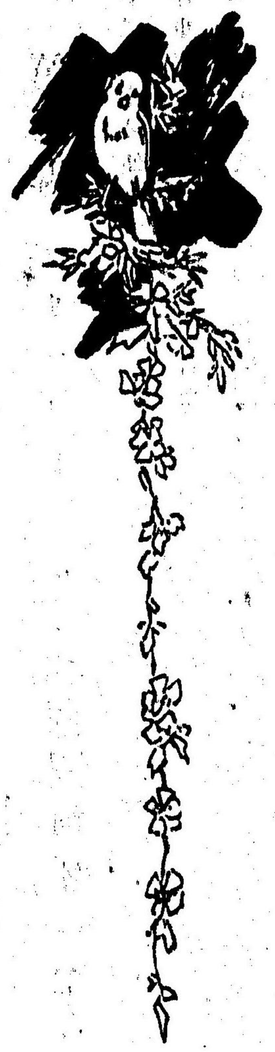
この國小なれども、農產物に富みたれば、押並べて國民格なり。本邦の公使館もこの府に設けられ、又海岸なるアンベルスにはわが領事館及び郵船會社の支店等もあり。英國人の海をわたりて遊びに來るもの多き爲に、利を獲ること多しとか。物價は巴里に比すれば一割は安し。

犬の小車を曳き歩くもの、巴里にては稀にも見ざる事なるが、こゝにては牛、乳車を曳き歩くは、大方大犬一頭若くは二頭なり。

最も奇なるは、銅製なる小兒の放尿を像らる〻噴水なり。マンヌケンピーと云ふ。これ佛語にてフッテートンムの意なり。こは一千七百四十七年に路易十五世が、當市を領せし時、白色の徽章を施したる帽子をこの彫像に戴かせ、路易十字勳章を與へし事ありしを初め、或は佛の三色、蘭の橙色等を以て飾りしことあり。かゝる緣故により、今に至り當市大祝祭の日には、夾に因みある服裝せしむるを例とすといふ。彫刻者はデクノイ氏にて、一千六百十九年に成れる物とぞ。素より稚

二十九日 土曜 晴

朝の中この地にて名高きグンタール工場に行き見る。こは一切機械を用ひず女工の纖手にて製造すといふ。案内の一婦人その模樣及び圖案等の事など懇かに說明し、はてはその陳列所に誘れゆきて、紀念の爲に購求せんことを說き勸むることいと巧なり。こは王室にて保護し、成るべく精美なるを貴びて敢て賣價の如何にのみ意を注かず、恰も巴里のコプラン織のごとき方法にて工場を立てたり。されば美を好むは人の習ひにて、その價の高きにも拘はらず年々五十萬フラン以上購求せらるると云ふ。



第二圖　巴里より白耳義國ブリュクセルに至る

第三編　ブリユッセルより和蘭國海牙に至る

是日は日本公使館にて荻原天野兩書記官、又福原大佐等と會談し、程なく別れて北停車場に向ひぬ。車上より名高き植物園（ヒヤルデンボタニク）を右に見つゝ九時三十分に忠す處に着きぬ。やがて乘車して和蘭國海牙府に向ふ。車窓は深からずといふにもあらねど、古式にして、佛國のよりも劣れり。相乘の人は年老いたる男と、若き女となりしがやう〳〵停車場の數加はると共に、小供も入り老婆も來りて、遂に滿員となりぬ。

蘭國の境に入ると共に、家やう〳〵小さく、田畑の取成し、百姓など御國風なるが多きに、松林の幾丁となく續きたるあり、さま、又農家の所々に建てられるが、生垣などさへ爲なしてそが内庭のあたりに洗濯物など執りかけたる工合さながら我が田舍のさまあり。だゞ牛馬の數多遊び、羊のひれ伏せるのみぞ西洋風なる。暫行きゆくに海は見わたして舟帆の數多ゆき〻するなど、景色いはん方なし。

流つゞき舟帆も見わたしらんだの

おほ野の旅はあく時もなし

ロッテンダールいふ處にて車暫し停まり蘭國の稅關吏來りて例の如く行李を改む。腹いたく減りぬれば、サンドウイッヂと葡萄とを購ふに商人の言語の不明なる能く〳〵推量すれば佛貨にては通せずといふ事を蘭語にていへるなり。止むを得ず停車場にて彼の國の錢貨と交換して、忠は遠しつれども聊か損せしは詮方なかりき。

車はいよ〳〵進み、大川小川多き中に、凡そ五分間餘をも費して通り過ぎし大橋あり。聞けばレーク川にしてライン川の枝流なりといふ。我等ははやくもロッテルダムに着きたるなり。こゝは北の海に面して良港を有し、運河ありていかなる大船も自由に出入し、蘭國商業地としてアムスタルダムと共に第一と數へらる。戶數も年々增加し、今は殆ど二十八萬餘の人口を有すといふ。降車すべき時もゆらねば、窓より覗ひ見るに船舶の出入、人馬の往復、その繁昌せるさま、我が大阪

川口の辺あり。森に目につきしは家屋の窓の数多くして幅の狭きこと、その間ごとに大方縁側めきたるもの一附けられたることなり。和蘭人の絵はやく我が国にも傳はりたるか多ければ昔て見しことある。大文學者ユゴスムはこの地より出でたりなど飯井氏と語り合ふ。こゝより北西に進むこと凡そ十六哩にして海牙府に着く。時に午後一時なり。直に馬車にてペルビユー旅館に投ず。こゝは我が公使館に近く、且つ公園に面して、楼上より臨めば恵水落深く鹿鶏などの群れ遊べる、實にその名に負かず。その地人口十九萬餘、王宮の在る處にして、當國の首府なり。

美術博物館

本館の創立は一千六百年代なりしも、事の整ひしは、同七百年代以後なり。案屋甚大ならざれども、繪畫館としては、歐洲中最も名高きものなり。奈破崙一世に蹂躙せられし時、その重なる繪畫は、巴里のルーブル宮に持ちゆかれしが、後本のごと

レンブランド畫解剖圖

くになりて今は更にその數を増加せり。即ち和蘭派、フラマン派、獨逸派、伊太利派、佛國及び西班牙派等、それ〳〵に區別して陳列せり。さはれこの館にて最も見るべきものはレンブランド及びポールポッタの筆なり。レンブランドの繪にては解剖の圖畫最も名高し。こは「ニコラス、チユルプ」といふ外科醫教授が屍體を解剖して決れ〳〵説明せるを、七人の醫師が熱心に觀聽せる處にして、その額前に立つ時はいづれも眞に逼りて思はず手足震はるゝがごとし。レンブランドが名手なりしことは衆て聞き及びしも、今この額に對

して、世の噂さに迷はざりしことを知りぬ。次にはポックが牛の圖畫なり。そは大木の下に、大小の牛ども遊べるに、一人の牧夫ありて、之を視ひ居る處にして、更に遠く牧場の見わかくれせる、他くそのありさまを寫し出したり。是はかの奈破倫の時、一たび巴里に持ちゆかれしを、後再び乞ひかへしたるものなりとぞ。實に世界の寶物たるべし。

蘭國獨立紀念碑

海牙市の中央小公園につゞきて樹青く風清き處に、一大紀念碑あり。階を築くこと數段、繞らすに鐵柵を以てす。これ蘭國獨立紀念碑にして、一千八百六十九年に設立せられたるものなり。全體は大理石にして、頂上には蘭國領たるバタビア州を代表せる女神の銅像を据ゑらる。左乎に國民旗を突き立て、右乎に矢把を抱れり。碑の正面の所には、維廉フレダリックの宜誓の圖を表はし、また所々飾るに三國及び七州の武具を以てし、大獅子を座せしめたり。下部には自由と法律とを像るも面白きに、唇には紅脂をいと赤うそめ、袖は肘までにして、大なる行燈袴を穿ちたる總て萬やうなり。物實るものは大なる笹を頂の上に載せて持ちゆく、我が小原女の面影あり。聞けばこはフラマン人の固有の服裝といふ。もとは海牙あたりにも數多ありしが、今は僅にかゝる鄙村にのみ殘れりとぞ。

暮るゝ頃まで遊び、更に同じ車にて公使館にかへり、書記官三浦彌五郎氏留學生村上直次郎氏などゝ共に、日本酒の樓應にあひ、夜更けて宿にかへりぬ。

三十日（日曜）　起き出でゝ當國の歴史など語りあふ。食後いでゝ王宮の前に至り、女皇陛下の肖像を拜す。女皇御名はウヰルヘルミナと申す。先皇ウヰルヘルムの第三世の女にして、千八百八十年に生れたまひ、現今猶妙齢にておはします。世に美人の御聞こえ高し。

海事歴史展覽會

當國の海事に經驗多きは言ふまでもなし。この日村上氏の勧めにまかせて、目下

して、世の噂さに遠はざりしことを知りぬ。次にはポッタが牛の圖畫なり。そは大木の下に、大小の牛ども遊べるに、一人の牧夫ありて、之を視ひ居る處にして、更に遠く牧場の見わかくれせる、態くそのありさまを寫し出したり。是はかの奈破翁の時、一たび巴里に持ちゆかれしを、後再び乞ひかへしたるものなりとぞ。實に世界の寶物たるべし。

獨立紀念碑

海牙市の中央小公園につゞきて樹蔭く風流き處に、一大紀念碑あり。階を築くこと數段、繞らすに鐵柵を以てす。これ獨立紀念碑にして、一千八百六十九年に設立せられたるものなり。全體は大理石にして、頂上には獨國領たるバタビア州を代表せる女神の銅像を據ゑらる。左手に國民旗を突き立て、右手に矢把を握れり。碑の正面の所には、維廉フレデリックの宣誓の圖を表はし、また所々飾るに三國及ひ七州の武具を以てし、大獅子を座せしめたり。下部には自由と法律とを像

欠

MISSING

るも面白きに唇には紅脂をいと赤うそめ、袖は肘までにして、大なる行燈袴を穿ちたる總て風やうなり。物實るものは大なる簪を頭の上に載せて持ちゆく、我が小原女の面影あり。聞けばこはフクマン人の固有の服裝といふ。もとは海牙あたりにも數多ありしが、今は僅にかゝる鄙村にのみ殘れりとぞ。

暮るゝ頃まで遊び、更に同じ車にて公使館にかへり、蓍記宮三浦彌五郎氏留學生村上直次郎氏などゝ共に、日本酒の歓應にあひ、夜更けて宿にかへりぬ。

三十日曇　起き出でゝ當國の歴史など語りあふ。食後いでゝ王宮の前に至り、女皇陛下の面影を拜す。女皇御名はウヰルヘルミナと申す。先皇ウヰルヘルム第三世の女にして、千八百八十年に生れたまひ、現今猶妙齢にておはします。世に美人の御聞ゑ高し。

海事歴史展覽會

當國の海事に經驗多きは言ふまでもなし。この日村上氏の勧めにまかせて、目下

開會中なる海事歴史展覽會見にゆきぬ。繪畫あり器物あり、古文書あり、いづれも當國古代の盛大を思ひ起さゝるものはあらず。中に就て最も目立しは我が國の書類の展覽せられたることなり。即ち慶長十四年七月二十五日の文書一通これはチヤタスタルランヘイケといふに宛てたるものにて朱印あり。又元和三年八月十六日の文書一通これはハンレイカホロツルに宛てたるものにて、その文は、阿蘭陀商船到本邦渡海之節、縱遭風浪之難難令着岸日本國程近地聊以不可有相違者也とありて、共に朱印あり。宛名の所人は、時の海軍將官にして、我が國にも渡り來りしものにて、その肖像も併に掲げあり。又リンスホーチの東洋日記あり。一千五百九十六年の版にして、我が風俗など挿入せるは珍らし。この他長崎なる蘭國商館書會國一枚は、崎陽川原慶賀寫と落款ありて、絹地彩色畫なり。その圖中に蘭人が日本婦人に接吻せんとするに、婦人が逃避に感じたるさま、彼我の情の宋だ通ぜざりし當時の狀態く察知せらる。

又長崎出島の圖の掛軸あり。これは肯地に金泥にて畫きたるが更に朱にて文字をあらはしたり。又八枚屏風一雙あり。これは復船が長崎沖にて暴風に逢ひて破損せる處より長崎のドックに入れて修覆せる處を畫けり。この他長崎詳細圖、蒸灣の圖などもありしが、既れも當時彼我往來の狀明かに知るに足る。

そも〳〵十七世紀頃は、彼の國は、實に世界海上の權を握り、我が日本ともはやく交通貿易し、歐洲に日本國を紹介し、日本に歐洲の事情を知らしめしは、たゞこの國なりしことは今更に言ふを要せざれども、この展覽會の物といひ、また家屋の共同住居ならざる、庭園の我が國風なるなど見るにつけ聞くにつけ、當時を思ひ出つる情禁すること能はず。

東の海路をかけて我れありと
しられしものを和蘭人はや

ドレフト

この日珍田公使に導かれて、ドレフトに赴く。この地今は人口二萬三千ばかりを

有する一市なるが、十五世紀の頃には獨立戰爭の盟主となりて、大に西班牙人と戰ひし、ウヰリヤム一世が古跡なり。その城も今に殘りて、其階下にて横殺せられきと云ふ處には、猶血痕の認めらるゝあり。千五百八十四年一世が遺物としては、地圖及び書籍武具銅皮等なるが、彼が座席は今猶構へられて、椅子卓子等のそのまゝなる、孰れも龍朴にして何の裝飾も加へざる、當時を忍ぶ種ならざるはなし。一世が墓はさし向ひなる寺院の中に在り、墓上には銅製の肖像を據き、又その愛犬の像をも刻み成せり。又この寺院の中には、同時代に在りて大に人道論を主唱せしユーゴードグローの墓もあり。先年海牙の萬國平和會議委員は打揃ひてこの墓に詣でたりといふ。

この地にはやく陶器製造所ありて、我が國及び支那等の陶器法も古へより傳はり、今猶盛なり。入りて見しに花瓶皿の類、あまた並べたるが、製造のよろしきを得たるのみならず、孰れも有名なる畫師の下圖を乞ひたるものなれば、横繪色合の味あるはさる事ながら、不廉も又其し。猶處々見んとおもひしに、俄に雨ふり出しかは、同じ車にてもとの道を急がせて夕ぐれの頃宿にかへりぬ。

第三圖　ソリヒクセルムより和蘭國海牙を望む

第四編　海牙よりアムステルダムに至る

この日六時二分といふに汽車にて出て立ち、道すがら新月の影かすかに中の嶋く樂のこゝかしことたどらるゝに、風車のあまた立てるが、おもしろければ、

風車めぐり〳〵て和蘭陀の
大野をたどる日本旅人

かゝるほどに、アムステルダムに落きぬ。時に七時十五分なりき。即ちアムステルダム旅館に宿りぬ。川にそひたる大厦なり。

この地は十三世紀の頃より開けそめて、一時は蘭國の首府たりしかば、今に古宮殿をはじめて古建築多し。彼得大帝が船工となりて潛みしも此處なり。人口殆ど五十萬、船舶自在に出入してロッテルダムと相對し、最も商業繁盛の地なり。彼の有名なる畫家レンブランド及び哲學者スピノザ等出生の地にて、其の彫像あり。博物館の種類多き中にも、いはゆる國有博物館は、繪畫、彫刻、建築、調度、文具、武器、陶器、玩具の類に至るまで、數部に分ちて陳列せるが、その繪畫の部は最も多數にして、殆ど小ルーブル博物館の觀あり。又植物園動物園あり。中にも動物園は最も完全にして、大方の鳥獸魚鼈暖國寒國の產に至るまで網羅したる、倫敦伯林の動物園につゞきて、世界中屈指のものとおもはる。

大學あり、海軍學校あり、官吏學校あり、新舊寺院大小勸工場、市場、劇場等數ふるに暇あらず。その製造所中、最も名高きは、金剛石製工場なり。數百人の職工を使役し、蒸汽機械にて疎より精に進ましむるさま、一見しておどろくべき事多し。その仕上げたる處には、某々國王の注文、何某女王の依頼など記しあるを見るに、目かゞやくばかりの事にて、頗みけん人の富豪の程さへ推し測らる。

蘭國雜感

和蘭は歐羅巴の西北部に於る最も低き國なり。英人が此の國をホルランドと云ひ、またチザーランドと云ひ、佛人がペイバなど云ふは孰れも低地窪地の意義な

り。實にその名の如く水面より低きこと十尺より十二尺に位する處も少からず。かゝれば常に水に抵抗するを以て事とし、或は海を埋めて新地を築、或は堤防を築きて海水を防ぎ、或は運河を開きて交通に便し、或は處々に風車を設けて排水の用に供するなど、昔より今に至るまで日と無く夜と無く、彼等の敵どもなり味方どもなるは水なり。

押並べて土地はあまり豐饒ならず、農產物としては麥豆馬鈴薯の類なり。牧場多きが故に、その副產物としては牛酪乾酪は世界中朋輩のものたり。僅に野に出づれば必ず牧場あり、必ず風車あるは實に此國の特色なり。工業としては紡績最も盛にして、綿花の輸入は英國につゞくといふ。

この國人口凡五百萬人面積は二千一百方里、我が九州よりも小なれども、十六七世紀の頃は、世界航海の權を握り、東洋諸國にも押し渡りて、東西印度に、殖民地頗る多く、その人口の如きは殆ど本國に七倍せり。然れどもその勢力漸々おとろへて、今は世界强國の中に齒ひせられざるに至れり。

されは彼の常に水と戰へる習はしより、國人一般に勤勉にして耐忍力に富み、古代海軍國たりし名殘を失はず、中等以上の交際には、東西印度の屬地談、若くは海上談ならでは、やゝ肩巾狹き風あるは、今も同じといへり。たゞ一體に猜疑心深くして容易に人を信せざるがごとき風あるは、常に諸强國に壓制せらるゝに基けるにや。

國人の清潔を貴ぶは殆ど歐洲中第一等なるべし。その家屋の如きも最も鄭寧に掃除し洗滌すれば、いづこを見てもさながら新築のごとし。殊に當國人は共同生活を喜ばず、多くは一家族一家を專有し、庭園之に添ひ、生垣之をめぐれるなど、やゝ我が國風に似たり。

乘合馬車鐵道馬車も多かれども、一頭の馬にて之を曳けるなど聊か田舍びたり。服裝は男女ともに質朴なり。その步行の時も兩性手を組めるは珍らし。男子の杖を携ふるもの少く、婦人の帽子履などは、巴里の粹を求めんよしも无れど、たゞその色の白きのみぞこゝろにくき。

人種は獨逸系なれども、言語は蘭語の外は、一般に通ぜず。道路は頗る狹く小にして、人道は僅に二人並行するばかりの處もあり。然れども清潔の民の習はとして、聊かも汚れたるとなし。家屋は一體に小さく二三階にして、小窓多し。公園は更なり、處々に生ひたる樹木も老いかゞまりて苔むせるが多く、そが下蔭などに小店しつらひて物賣れるさまなど我が俗の趣あり。

押並べて節儉の民なれば、飲食物等は極めて贅澤を避け、海産物のごときは、みづから需用あるに拘はらず他國に輸出すること多しといふ。

食事の時にソップは茶碗に入れ、小匕を添へ、珈琲などを飲むやうにして出せり。これ巴里などにて見ざる風なり。運河を浮る船の數多きに、船頭共の大棹小棹にて押し上るさまは、また我が國俗に似たり。アムステルダムにて、小兒の凧を玩ぶを見しに、我が長崎凧に似たり。我れ彼に習ひしにや、彼れ我れを學びしにや、歟へ來れば、これといひかれといひ、この國俗の我が國俗に近きことは他の各國に求め得べからざる事なり。

第五編　アムステルダムより獨逸國伯林に至る

伯林に至る

この日午後七時五十分發の汽車にて、當地を出て、獨逸國伯林に向ふ。初め停車場にて切符を買はんとせし時、定員めくるもの來て、蘭貨は不便なるべければ、獨貨に換へすやといふ。その詞だみて意の通せざるやうに覺ゆしかは、その値に止みしが、跡にて聞けば、こは一種の欺畫にて、交換の際に自から貪らんと謀れるものなりとぞ。世界大旅行に最も面倒なるもの三一つは、その國幣毎に通貨の異なることにして、その交換ごとには、多少の損失は免かれざる事なり。余輩は巴里出立の際より大に意を用ひ、總て英國の砂にて持ちゆきしかば、いづこにても通用せざる處はなかりしも、いはゆる小使錢は所々にて交換せざるべからざれば、損失の憂も少からず。されば大方銀行若くは大旅館の帳場にて交換したり。

汽車の中は、初の程こそ人々もありけれ、後はたゞ我等のみにていと心よく寢ね

たり。夜は更けゆき調はわからずいつこいかなる處を過くとも知られざりしに、戸押し開き入り來る人と共に車の止まれるを怪しみ見れば、既に獨國に入りたるにて、稅關吏の我等の行李調べに來りしなり。窓よりのぞき見しに、停車場の札には Emmerich と記したり。吏員の前に行李さし出せばだゞ打ながめしのみにて、よろしといひながら出でゆきぬ。野山の夜景色をだに見ばやと思へども、眠ければそのまゝにまた打ふしぬ。

二日 火曜　曉ちかうなりて目さめぬ。窓ごしに見れば、家あり畑あり、村童のはやく起き出でゝ牛おへるさまなど、油畫のやうなり。明けゆきてあさの空となりぬれば、家ます〳〵多く、ふまたの製造所の烟筒、林のごとし。看板廣告の札、數丁つゞき、數千の軌道、蛇のもこよへるが如きは、車くも伯林に着きたるなり。時に午前八時。群がり居る馬車の中より、コンチナンタール旅館と記せる帽子被れる取者をさしまねき、鞭を擧げて、その家に入りぬ。こゝは當市屈指の大旅館にして、建築の莊嚴さながら王城のごとし。休憩室、食堂、應接室、浴室、運動場等に至るまで、萬づに清らを盡したれば、その心ちよさいふべからず。一階の十四號に室を定め、中食後共に出でゝ、市中を見巡り、まづ故維廉老帝の陵に詣で、公園、凱旋門、議事堂及び諸の彫像等を見てかへりぬ。

維廉大王の陵墓

獨逸帝國の今日あるは、維廉大王の經營に由らざるべからず。故に獨逸といへば、吾人の腦中に直に老帝及び比公を畫き出すも理ありといふべし。余輩は到着の當日直に馬車を驅りて此の陵墓に詣でぬ。

陵墓はシャルロッテンブルヒといふやゝ伯林市を離れたる處に在り。ごゝには十六七世紀の頃築きし王城あり。今は兵營となれるが、尖よりつゞいて大庭園あり。池深く樹老い、風情く草青うして、仙境に入るがごとし。左に廻り右に折れ、砂石銀のごとく敷き詰められたる處をたどりゆけば、木いよ〳〵深く綠ます〳〵繁りたる奥に、一小宮殿あり。近づき見れば、武裝せる警士いと嚴かに戒め居れり。こ

れ、即ち維廉大王の陵墓なり。扉の扉を拂ひ帽子を脱し、一瞥してその門扉に入れば、例の西洋流の墓にて、死者の肖像を刻成したる石棺横はれり。中央に神像あり。その前方の左右に、維廉大王、フレデリック維廉三世、ルイス皇后及びオーギュスト女皇の陵墓あり、共にその肖像の屍姿なるを刻み成せり。この室は天井に紫色の玻璃を張り成したれば、日光に反射して、室内さながら紫霞の籠けるがごとし。懷舊の情仰慕の心身の毛立つまでに覺ゆるゝは、その帝王皇后の御德に非つくものといへども、また建築製造の宜しきを得たるにも由らずはあらず。拜して了りて園中を見めぐりしに、少女の一むれの園歌を謠ひつゝ過ぎゆくにあへりしは、心にくき限なりき。

取も木もなびきしその世おもほゆて
みさゝぎあたり秋風のふく

チエールガルデン

倫敦のハイドパーク、巴里のボアートブーローニュ、伯林のチエールガルデン、余はこの三大都府の公園を世界の三大公園といはんとす。ハイドパークはその宏大深遠なるを以て優り、ボアードブーローニュは繁落艶麗なるを以て優り、チエールガルデンは雅幽閑なるを以て優れり。これ自然の結果なるべしといへども、何となく三國人の氣風を寫し出せるもおもしろし。

伯林ルイズ皇后像

チエールガルデンは、ブランドブール門の西方とスプレー街の北方と、南方ポッダムの舊村落との間に跨り、その廣さ僅千八百五十メートル、幅七百五十メート

第五圖　アムステルダムより國境伯林に進る

ルより千百メートルに及べり。一たび此の處に入れば、老樹枝を交へ、苔蒸かにして、鳥囀づり、水流れ、異草奇木相匂ひ、殆ど仙境に在るがごとし。

その最も幽邃にして、最も閑雅なるは南西部なり。數條の細流は潺々として、草を伏せ、木を潤かしてルーソー島に注ぎ、或は巖石を迂流して、遠くシーパルクに亞れるなど、心ちよさいふべからず。又このわたりには、數多の紀念碑、彫像をおこされたるが、孰れも天下に名を知られし人々なり。中にもフレデリック維廉三世の像はドクケの作にして、平和祈願の意を表はせる彫刻の上に安置し、又エンタケの作なるルイズ皇后の彫像は、今も猶高貴の崇敬を引きて、綠樹蔭濃き邊に在り。

ペルビユー街の方なる園の端に、ウクンジエル噴泉あり。ゲーニグレス街の方にはゲーテレッシングシルレル等諸文豪の彫像あり。

かしこには血闘の傷猶脆き學生あり、こゝには劍光をきらめかして、人は武士てふ意氣込にて樹蔭に蹲げする軍人あり。必しも男女相伴はざれば歩を運ばざるハイドパーク、ボアードゾーロー、ユ等に比すれば、更に尚武的氣風の認めらるゝものなきにあらず。然れども日やう〳〵傾きて、鳥の聲もやゝ枯れゆく頃に至らば、いかなる人か出沒せん。余はこれを知らず。

この園につゞきて、大動物園あり。獅子あり、子を産めり、虎あり男女兩性相戯れり。白熊蹲り、駝鳥歩し、耳目を驚かすもの少からず。殊に獅子のその兒を慈しめるが如きは、この檻中にて產みしものにて、屈指の見物なるべし。

凱旋門及び紀念碑

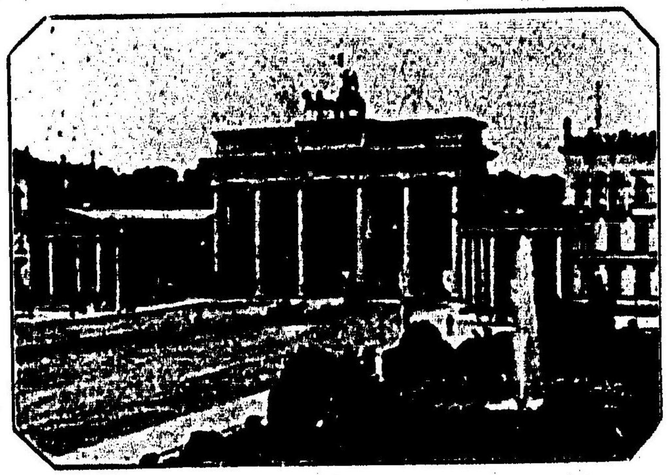
伯林市中最も繁華にして、最も美麗なる處をウンターデンリンデンの大通りとす。恰も巴里のシャンゼリゼーのごとし。この大通りはその名の如く菩提樹を左右に植え聯ねたるけしきへたゞならぬに、道路は最近式の木片にて畳み成し、兩側には宏大なる殿宇壯麗なる旅館絶美なる商店等軒を並べたればその清潔にして心地よさ眞に極樂淨土たり。若し大慈大悲の擁護を得てかゝる處を散歩しなば迦陵頻伽の聲もなどか聞く聞き得べからざらん。

菩提樹の蔭ふむ道にから玉を
手玉にまきてからをとめ立つ

この大通りの東端に最も高く聳ひて人目を射るものはフレデリック大王騎馬の銅像なり。こは高さ十三メートル五十に及び、その臺には大王存生中の重なる事跡を彫刻し、又當時の英雄をも併せ刻めり。それにつゞきてブランドブールの大門即ち凱旋門は建てられたり。この門は一千七百八十九年より同九十三年に至りて竣工せるものにして、高さ二十一メートル、幅六十二メートル五十を數へ、プロピーレ式築造にして、グンガン技師の設計といふ。門には五個の入口を設け、圓柱をもて隔てし、中央の口は宮城よりの通路に充てたり。

この門の頂上には凱旋女神の馬車に乘れる像あり。これは一たび奈破崙一世に奪はれて、巴里に持ちゆき、彼の凱旋門上に移されしを、普佛戰爭の時に再び奪ひかへして本に收めしものといふ。

そのいはゆる普佛戰爭凱旋紀念碑はチエールガルテン中に建てられたり。高さ

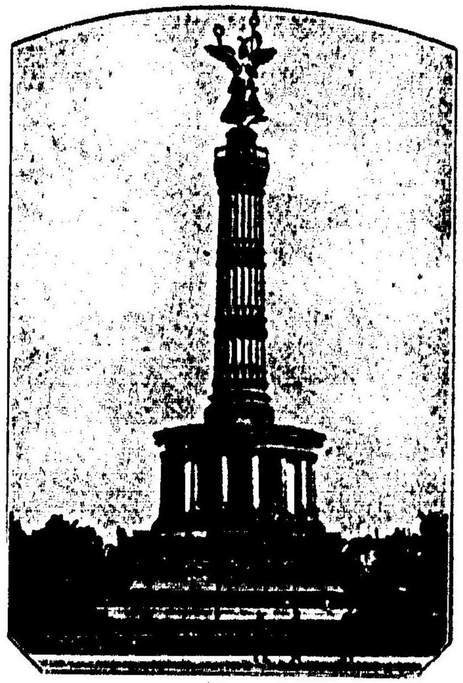


凱旋門

實に六十一メートル五十、その土臺には瑪馬克サトリ、セダン及ひ千八百七十一年軍隊凱旋の狀等を刻成し、その圓柱にも同じく瑪馬克塡太利佛蘭西等の大砲を以て飾り、頂上には例の凱旋女神の像を安置せり。この大碑を起點として大通りを開きたるを凱旋街といふ。その左右には現皇帝内帑の金を下して普國歷代の帝王の彫像を建設し、各文武の英雄を附屬せしめたり。こは全く帝の獨斷に出しものにて、帝は屢〻工人の家に行幸して、その成功を急がせられ、又常に皇后皇子等と、この通りを散歩し、この彫像に接

第五編　アムステルダムより巴里倫伯林に進る

して、心腸に感みたまふと云ふ、いかにも樹陰影淸き處に、この歴代の帝王名臣を見るは、たゞ昔國の當時を忍ぶのみならず、風教振作の上の大効あること言ふまでもあらじ。現皇帝の深謀遠慮は、この一事にても推知することを得べし。



凱旋記念大柱

三日（木曜日）　事ども爲し了へて後、例の二人にて市中を見めぐり、玉非喜作氏の寓を訪ふ。氏はこの地に長くありて、東亞といふ雜誌を發行し居れり。さま〳〵物語して後、氏が付せられし案内生菜と共に、王宮を拜觀す。

王宮

伯林市中に巍然として出を凌き、輪煥の美四方に輝けるは現皇帝の宮城なり。こは、もと選擧侯フレデリック二世が築造せるものなるを、修繕に修繕を加へ、改造擴張して、遂にかくの如くに至れりといふ。結構の大體を記せんに、建物は四階にして、奥行は實に二百メートルに及び、幅は百十七メートルを數へ、高さは三十メートルに達せり。中庭の大なるもの二、小なるもの二、北門はリユストガルデンに臨み、南門は即ち王宮城の廣場に接して、最も優雅に建築せられ、西門はセッチム、セペール、の凱旋門に擬したる入口を設け、その門上には、高さ殆ど八十メートルに達する宏大なる聴拜堂の圓塔を築きたるなど、莊嚴いふべからず。

この宮城は前に云ひしごとく、年を經て成功せしものなれば、その最も古代なる部分は東部に存し、彼の選擧侯時代の物も此に至れば見ることを得べし。公衆の道路は、この東部第二前庭をあてられたれば、余等も同じくこゝを通りて拜觀の

途に上れり。種々の彫刻物並べ建てられたる中に、聖ジォルジュが龍と闘ふ態を青銅に刻成したるは、有名なるキッス氏の作といふ。その男壯なる思はず戰慄せらるゝ例の鐵甲正裝の皇宮警手に一瞥して、奥に進みゆけば、拜觀者は十四五人、時の至るを待ちをれり。こゝは現皇帝の常住の宮殿なるに拘はらず、此の如く時を定めて内外人の區別なく、しかも各ゝ見料を拂はせて案内者之を率て拜觀せしむるなど、さすがに西洋風なり。

導かるゝまゝに昇りゆけば、普魯西國歴代の王及び王妃の畫像をかけつらねたる室あり。各種の畫像をかゝげたる大廣間あり。またいにしへのパラド室あり。その裝飾の善美を盡せるは、いづれも大選擧侯時代の物なり。畫像並畫亦當時の思ひさたらざるはあらず。その選擧侯室と名つけたる室には、ホーヘンツォルレン家の各選擧侯肖像をかゝげ、又王冠室といふには、古代の王冠を納めおかれたり。フレデリック一世の禮拜室結婚室のごときは、燦爛の光眼もくらまんとす。金襴紗室と名つけたるは、一千八百十三年に鐵勳章創定の紀念として純銀を以

ふゝものゝ如し。一通り拜觀了りて、前庭に出れば、近衛の將卒の練兵せるに逢ふ。胄輝き劍きらめき、足は木のごとく、腰の音粛々として威風當りを拂へり。嗚呼この帝王、この兵士、將來いかなる事をかなす。

それより、かねてこの地に滯在せらるゝ男爵松平正直氏の寓を訪ふ。巴里以來の事ども語り、氏に導かれて、小料理店にゆき、晩餐す。食器食料、佛國に比すれば都鄙の差あり。夜に入りてかへりぬ。

四日木曜 晴　この日ベルビユーホテルに移る。これ知人のこの館に宿れるが多かればなり。こゝはコンチナンタールより、家格やゝ劣れども、猶當市にてその名高し。殊に日本人間にもてはやさるゝ家にして、給仕人の中に、日本語の二三を話すものもまじれり。午後豫約により更に鶴井氏と松平男爵を訪ひ、井上友一氏も共に工業試驗所見にゆきぬ。これは工業機械の新發明の物またそれに關する諸器物を學理的に試驗する所にして、その成績の良好なる物に限りて、初めて世に發表する仕組なりとぞ。例へば家設計のごとき新に發明せられたるものと、從來

途に上れり。種々の彫刻物並べ建てられたる中に、聖ゼオルジュが龍と闘ふ處を青銅に刻成したるは、有名なるキッス氏の作といふ。その勇壯なる思はず戰慄せらる。例の銀甲正裝の皇宮警手に一體して、奥に進みゆけば、拜觀者は十四五人、時の至るを待ちをれり。こゝは現皇帝の常住の宮殿なるに、拘はらず、此の如く時を定めて、内外人の區別なく、しかも各〻見料を拂はせて案内者之を家て拜觀せしむるなど、さすがに西洋風なり。

爾かるゝまゝに昇りゆけば、普魯西國歴代の王及び王妃の畫像をかけつらねたる室あり。各種の畫像をかゝげたる大廣間あり。また古へのバラド室あり。その裝飾の善美を盡せるは、いづれも大選擧侯時代の物なり。畫像盡畫亦當時の思ひぐさたらざるはあらず。その選擧侯室と名つけたる室には、ポーヘンツオルレン家の各選擧侯肖像をかゝげ、又王冠室といふには、古代の王冠を納めおかれたり。フレデリック一世の戴冠式結婚室のごときは、燦爛の美眼もくらまんとす。

金羅紗室と名つけたるは、一千八百十三年に、鐵勳章創定の紀念として純銀を以

欠

MISSING

る、、、もの、、、如し、一通り拜觀了りて、前庭に出れば、近衛の將卒の練兵せるに遇ふ、胄輝き劍きらめき、足は牙のごとく、鷹の眼玉々として威風當りを拂へり。嗚呼この帝王、この兵士、將來いかなる事をかなす。

それより、かねてこの地に滯在せらるゝ男爵松平正直氏の寓を訪ふ。巴里以來の事ども語り、氏に導かれて、小料理店にゆき、晩餐す。食器食料、佛國に比すれば都鄙の差あり。夜に入りてかへりぬ。

四日水曜　この日ベルビューホテルに移る。これ知人のこの館に宿れるが多かればなり。ごゝはコンチナンタールより、家格やゝ劣れども、猶當市にてその名高し。殊に日本人間にもてはやさるゝ家にして、給仕人の中に、日本語の二三を語すものもまじれり。午後、歌約により、更に、龜井氏と、松平男爵を訪ひ、井上友一氏も共に、工業試驗所見にゆきぬ。これは工業機械の新發明の物、またそれに關する諸器物を學理的に試驗する所にして、その成績の良好なる物に限りて、初めて世に發表する仕組なりとぞ。例へば寒暖計のごとき新に發明せられたるものと、從來

萬國に行はれ居る物とを比較研究し、猶その發明者の學說を實地に試驗しつゝあるなど、いかに精巧を盡すらんと思はれぬ。その他電信及び諸測量に關する機械の如きも、頗る宏大なるものあり。こゝは創立未だ日淺く、且獨逸工業の進歩を促かす一大機關たれば、見物人甚多く、けふも三四十人一組になりて、敎場の羊のごとくに引き廻はされしが、說明敎授の熱心なるには、足も棒になるまでにぞおぼゆし。

この所見了りて後、アレキサンドルプラッにゆき、セダン戰爭のパノラマを見る。即ち奈破崙三世が、運命つきて、降を獨の軍門に乞ふ處にして、いかに當國人の得意の見せ物なるかを知るべし。これを巴里なるイエナ戰爭館と思ひ比ぶるに、世の盛衰ばかり測り知られざるものはあらず。

夜、倉知公使館書記官の案內にて、例のごとく市中を見歩く。舞踊場、コンセル等も一通りうかゞひしに、その夢麗妖艶、巴里と相比敵すべし。たゞその調いたくだみたれば、何となく品下れるやうなるは、己が耳目の馴れざるにや。この夜また蒼灣より出張せる長野純造、祝長巳の二氏、また公使館書記生廣銀吉氏に逢ふ。

五日（金曜）　けふは朝より當地留學の清水澄氏の先導にて、ポッダムに赴きぬ。同行は編井氏の外、井上友一氏、新海竹太郎氏なり。

ポッダム

ポッダムは伯林市の西南ブランドブール州にして、昔てフレダリック大王の宮殿を築かれしより、その名高く、今も人口五十六萬餘を有する地なり。バヴェル河とハヴエル湖との上方に位せれば、最も幽邃に最も閑靜なる一小天地なり。現皇帝の離宮もこゝに構へられたり。

いはゆるポッダム城は、一千六百七十年の頃フレダリック大王の築かれしものなるがその後聊改造せりといへども猶當時の忍ひくさとなる事多し。例の陸軍なる建築を仰き眺めつゝ案內に連られて入りゆけば、大王の筆跡にて Wallen, Laurel, Peine, 等の文字を額に掲げし室あり。又いたく塵汚に汚されし大王の机、

及び昔樂器等、その他に殘されたるあり。

見るもの聞くもの珍らしからぬはなきに、書籍室の隣にコンフキダンスといふ室あり。こゝは寢室と相並びたる處にして、銀柵にてその隔をなせり。これ大王が諸の人々を集めて、無禮講の會食を行ひし處なりとぞ、

その他勉强室、應接室あり。こゝには數多の美術品を飾れり。又フレデリック維廉一世の室あり。シャンフォーセンの筆なる畫像と自筆の額とあり。又維廉三世の室及びルイズ皇后の室あり。共に當時の忍びぐさならぬはなし。

此の城一通り觀了りて、サンスーシー公園に至る。こゝは市の西部にして一千七百七十年に建設せりといふ凱旋門あり。最も美麗なる噴泉あり。平和寺院あり。こゝには先帝フレデリック二世の墓及びその父フレデリック維廉一世の墓あり。その墳墓の周圍には、一千八百十三年、同十五年、同七十年に、佛國と戰ひたる時獲たりし旗數十本を建て並べたり。

道廣く若青く、樹老い鳥囀づる處を進みゆけば、彫刻あり、大池あり、噴水あり、石階を昇ること數百段にして、初めて殿然たる大宮殿を見る。これ即ち大王の築かれしサンスーシー城にして、一千七百四十五年より同四十七年に渉りて竣工し、その後常にこゝに住はれ、遂に同八十六年八月十七日の崩御の日に及びしところなり。

この城は、その建築甚壯麗ならざれども、最も風流に構造せられ、且つ崩御の日までこゝに住はれし處にして、その寢室もその他に殘されたるなど、懷舊の情は先に見し城よりもまされり。大王は大に佛國の文學美術を嗜まれ、遂にその學者ヴォルテールを常に近つけ、その書籍をも殿中に與へられしが、そこには今猶彼が肖像殘り、又彼が面貌の狀に似たりとて戲れに數多の狂面を彫り付けられたるもその他に殘れり。

大王の肖像は更なり、その一族の人々の、像及び圖書、文房具、美術品、諸器など、最も見るもの多し。この城より今昇り來し大庭園を見おろせば、その森その池その水等の、おのづから佛國ヴェルサイユの趣を成せるは、大王の寫に思ひよそ

へられし事ありしにや。

サンスーレーとは、佛語にして莫愁の意たり。友人日南子曾て記事あり。

莫愁城

大王莽立德、營宮闕于勃都壇也、宮前有一風車、車輪聳空、不宜展望、王乃召風車主翁、命撤去、主翁辭曰、小人有風車、猶大王有普國、有人欲奪王國、大王其聽之否、普國有法、王請問之于秋官、王欣然曰、朕國法、如斯其有信于民歟、叟莫愁、朕與叟相隣、永偕享天樂、因名宮闕、曰莫愁城、王德如斯、普國勃興、非偶然也、風車尚在、葛藟纏之、今我私忖度王意、代而歌之、

をちが屋に軒ば並べて風車
めぐる浮世を見てや過ざなん

維廉一世の山莊

ボッダム市をやゝ放れたるバーベルスベルヒといふに、一小宮あり、維廉老帝が帝業草創の殿といへり。地最も閑にして人跡稀なり、國强て營築を勉さず、建築甚精ならず。これシンケルの設計にして、老帝が親しく監督せしものといふ。入口狹く支那館めきたる處を進みゆけば、數多の室は、悉く當時裝飾の儘を留めたり。その大座敷、書齋、食堂、臥接室、浴室のごとき、僅に用を充すにとゞめて、決して无用の裝飾を施さず。然れども、その食堂に獨逸各聯邦の標章を額に揭げ成したるがごとき、王が當年の意氣想像するに足る。殊に最も余輩をして感せしめしは、その常住の室に、何の飾をも施さゞる素製の椅子と卓子と並び合ひたるものなり。こは老帝が宰相ビスマルク公と常に相對して、大計を凝ゝし、名殘といふ、帝に對して、比公が一ゝ起立して椅子の背後を握んで奉答陳述したりきといふ平坦の黑みたるに指の跡さへかすかに認めらるゝなど、如何でか當年の感を深から

しめざらん、又帝の机上には、その在世の時のごとく、文鎮筆架小照等の散處さへ、すこしもその位置を換へずして、之を並べ、又その寢臺も當日の儘なるが、その頭部の上に、十字架を掛け、基督の像を掲けられたるか如き、一も昔日の觀を改めず。調度を置きたる中に、同じく何の飾も施さゞる一木の杖あり、案内者これを軌つて、是こそ老帝が四十年間用ひられしものなれといふ。彼を思ひ是を思ふに、帝の偉勳は、遂に今日の獨逸帝國を產出せし基たるを知るに餘りあり。老帝は深くその宮殿を愛せられ、帝薨成りて後も、時々こゝに住はせられたりといふ。事の赴こそ異なれ、我が水戸西山公の太田の山莊に似かよひたり。

この日一輛の馬車を雇ひ、こゝかしこ引まはしたれども、觀るものは多く、日は短く、既に夕陽近くなりければ、新宮殿、植物館及び現帝の離宮等は遥ながらに見すごして伯林にかへりぬ。

是より先、巴里にて、最も睦び合ひし岡村司勝本勘三郎の二氏、イエナに留學せれば、伯林に上り來れよと打電しおきしが、この夕我等の宿に二人及び尾越辰雄氏來て待居たり。驛口の接吻もふさはしからざるべければ、爭の汗するばかりに握り合ひて舊情を暖めぬ。晶盃酒、麥酒、飲み且喫ひて、快談夜に入りぬ。

梓弓八つきの麥の新しぼり
くみつゝをれば御世はよろづ代

サスフエリヤンとしやるゝも、巴里の名殘なるべし。

六日（土曜）　イエナの客人飯井氏は更なり、新海氏などゝ、數多打つれて、諸博物館を見めぐる。時短くして、いづれもその一班ならでは見得ざりしぞ、くちをしかりし。さはれまた心にとまりし事なきにあらず。

博物館

博物館は文明の裝飾物にして、また文化の源泉たり、當市にても數多き中に余が觀たるは、新舊兩博物館及び國民博物館なり。

舊博物館

リユストガルテンの北にあたりて、壯嚴なる構造あるを舊博物館とす。千八百二十四年に起工し、同二十八年に竣工し、同三十年に開館せりといふ。間口八十六メートル、奥行五十三メートル、高さ十九メートルに及び、前面にはイオニック式圓柱を以て支へたる廊あり。希臘建築の模造云々の語を則みたり。

館は英雄寓古代（即紀元前二三世紀）寓、希臘寓、中古彫刻寓、これは第一第二第三に分ち、各派の作を分類せり。繪畫寓、これも分ちて和蘭派、十五世紀伊太利派、十六世紀伊太利派、ラファエル時代のフロランス派、十七世紀伊太利派、日耳曼古代派、十七世紀和蘭派等の數部に分ちたり。その陳列はいづれも歴史的にして、進化の狀況、一覽して分明なるやうにせり。

この館はフレデリック大王の勢力によりて成立し、ポリヤック僧正最も意を注いで蒐集せりといふ。近き頃までは羅馬滅亡時代の物のみ多かりしも、漸次改革精撰して、凡庸普通の物品を退け、或はペルガムの古代物品を徵し、或はサビュ

ロー陳列場の古代品を集めしなど、大にその面目を改めきと云ふ。

新博物館

舊博物館の後方に接ゐたるものを新博物館とす。千八百四十三年に起工し、間四十五年に竣工せるものなり。間口十五メートル七十、幅七十メートル、高さは二十メートル二十を數ふれども建築としては見るべき値なく、その内部の裝飾は他の諸館に比して最も醫劣を盡せり。

第一を錫造物陳列場として、十二に分ちたり。即ち古代希臘彫刻の模造より初めて編年式に陳列し、中古時代に下りたり。他階には中古日耳曼彫刻、東部亞細亞古代遺物及寓、墳墓寓、古代磨物寓等あり。新舊の名はその陳列品に依りて起りたるにあらず、建築の年代によりたる稱なり。

國民博物館

新博物館の東方に位し、噴水彫像またはドリック式圓柱を以て圍繞せられたるものを國民博物館（ナシヨナルガルテン）とす。千八百七十六年の開館にして、間口六十メートル、幅三十

第五圖　アムステルダムより國民博物館に至る

二メートル、高さ十メートル七十、コレンチユン寺院の形を摸したるものと云ふ。館面に八本の大圓柱あり、夫より段階をすゝみて奥に入れば、種々の彫刻あり、その最も人目を引くは、フレデリック維廉四世の騎馬の像にして、カランドリー氏の作と云ふ。

この館は、十九世紀日耳曼の繪畫を主として陳列せるものにして、初めワンチルコンシュルの進貢所として、総面二百六十點を陳列したりしに基けりとぞ。今は全額面殆ど千點に達し、彫刻も數百點に及べり。こゝには現時有名なる畫家、彫刻家の作品大方陳列せられたり。

先にいひし新舊兩博物館は、巴里にていはゞルーブルのごとく、これはリユクサンブールのやうなれども、其内容に至りては、到底彼に比敵しかたし、然れども獨の美術は、近年著しく進歩し、國人集つて佛國に負けじと競ひ合へるさまなれば、遠からずして刮目見るべきものあるに至らんこと疑ふべからず。

この他、普國歴代帝室の御物を陳列せる博館物あり、佛國に戰ひ勝ちし後その戰利品等をもて設立せし戰捷館あり、服裝沿革博物館あり、郵便博物館あり、衛生博物館あり、又常置の繪畫館ありて、臨時にその陳列を取替ふるもの等あり。余は時日なかりしが爲に、僅にその繪畫の一館を見て、餘はその門前を通過せしに止めしは、かへす〳〵も遺恨なりき。

この夕岡村勝本尼越氏、イエナに歸る。

七日晴　初め鳥井氏と共に着せし日、我が公使館を尋ねしも、時おそくて館人にも逢はざりしかば、この日疾く井上公使の宿を訪ひ、公使及び夫人に逢ふ。鮮途山口銳之助氏を、在留日本人間に、衆でもてはやさるゝ日本塾が家に訪ふ。日本塾とは、あるじの刀自、日本人をいたく愛し、そが爲には、おのが財産をも費しもてなしけるより、おのづからかく字せらるゝに至りしとぞ。衆より日本食もこゝにて調理すといふ。山口氏は近々歸朝すべしとて、その用意中なりき。

夕歸宿。この夜より露國に赴かんと思へば、相宿せる木内重四郎氏、衆ねて知れる大概龍治氏、倉知鐵吉氏、井上友一氏、さては一行の鳥井氏と、近傍の料理店にて會

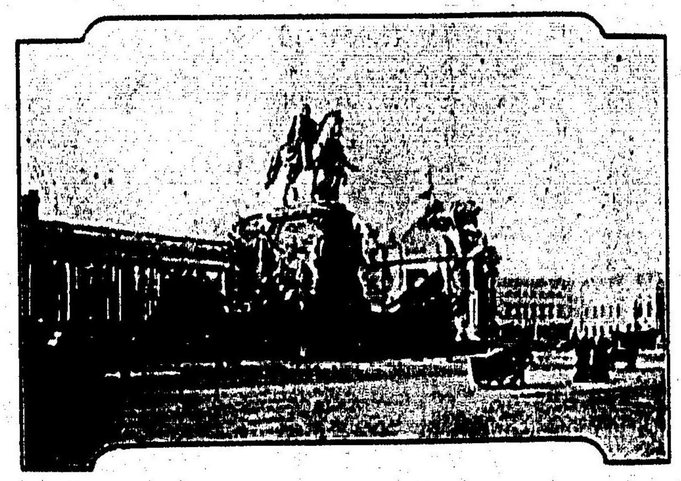
食す井上氏は、余等と共に萬國の旅を企てらる。今伯林を去るに臨みて、その感せしことのかず〳〵を記さん。

伯林雜感

巴里より伯林に至りて、先づ目につくものは、家屋道路の整て新らしき事なり。宮殿議事堂をはじめ、諸官衙諸會社學校、旅館商館等孰れも新築なるが多し。從ひて塗色、光色鮮明にして頗る清潔なれども、何となく猫額に乏しく、一口に評せば、成上り身代の家のごとし。道路も明劃にして水道垣々樹木整然たりといへども、枝葉苔蒸すといふこと无きは、新開地をゆく心ちして、頗る風致に乏し。森に處々の小庭に植ゑ成したる樹木のごとき、幹小さく葉薄くして、何の趣もなし。これを巴里と思ひ比ふるに、蒼を厭ひ、新を喜ぶは一般の人情なれども、文學的藝術的趣味は、まゝ古色蒼然たる間に存すること少からざることを悟り得べし。

その大通りなるウンター、デン、リンデンの如き、清潔端麗なりといへども、規模狹小にして、シャンゼリゼーの大通りに比すべくもあらず。凱旋街の歴代帝皇の彫像のごときも、風致振作尊王的思想を注入する點よりいへば、世界に誇るべき一大創作といへども、その配置、その刻みかた、藝術上より觀察する時は、猶巴里の處々の公園庭園等に、英雄豪傑を據えたるに劣れり。

有名なる老帝即ち維廉一世の騎馬の大像間フレデリク大王及びフレデリック維廉の像のごときも、その製作健雅にして、仰慕せらるゝこと少からずといへども、巴里の彫刻に比して、優乎たる處を缺



故老帝彫像

きたる感なき能はず、さはれこれ伯林技術の果りたる點なりといはゞまた何をか評せん。

フレデリック大王像

交通機關は、巴里よりやゝ優れるを見る。いはゆる乘合電氣車、乘合馬車のごとき、縦横に貫き通りて、時時も乘客を待たしめざるは、巴里倫敦に比して、人の少なきにも由るべけれど、能くその程度を知れるものといふべし。但し乘合馬車の一頭曳は巴里にはなし。

普通の馬車は、大體二通り、あり。時計を正面に掛けおき、乘客の約成れば、その針を

見せず分も遠はず賃錢を請求するものと、又然らざるものとあり。その數一萬七千輛餘前なる方は、御者の帽白塗にして、後なる方は、黑塗なり。共にその賃のブラッキにして高帽なることは、巴里も同じ。服は青色にして、襟と袖口とを赤くせるは、愛嬌ありて、しかも勇ましし。

珈琲店、酒舗等、巴里のごとく、富店なるは稀なり。さりとて倫敦のごとく奥まりたるにもあらず。大かたは街道と玻璃一重ごし、或は鐵柵柴垣等にて隔をつけたり。

その椅子、卓子のごときは、巴里に比しては頗る汚なく、塵多き心ぢす。

男女の服裝は、巴里倫敦に比しては、蓋だ質素なり。高帽、フロックコートを常用、せるものは、十中の二三にして、笠形帽、山形帽、横行し、セピロ、ペーニング等、勢力を擅にせり。劇場等に行き見しも、素より强て綺麗を飾る風見えず。婦人の絹帽絹服などは、さるかたの者の外は、容易に求め得べからず。これ貴の然らしむるにはあらじ。儉勤の德の然るにや、はた國風として外形の美を希はざるにや。

婦人にして紅粉を裝ふもの稀なり。然れども、その色は雪のごとく、その頬は桃の

ごとし。但しその風采は巴里婦人に劣れり。その所謂水草を逐ふ蛮は、いづこも同じけれども、この市には殊に多く、谷蟆蝦のさわたる極みも、遠ひ沙らざることなし。

食物は、巴里倫敦よりも一しほ節儉なるかごとし。麵麭は白色の外に、黒色にして黒砂糖くさきものあり。中食を、デンチーとして取きものとせるは、佛國流と反對なり。彼等一般の常食とせるものには、鹽附豚肉最も行はる。その價甚廉し。飲みものは、いふまでもなく、麥酒なり。これ我が國に於る茶のごとし。その味ひミュンヘン產なる最もうまし。コップは一リートル入、二リートル入、三リートル入もあり。酒れも盞あり、帽子あり。食事ごとに之を飲むはさる事にて、麥酒會といひて、最も盛に、夜を徹して飲むことあり。かゝる處には、麥酒吐所ありて、滿腹せる時は、その處にゆきて、一度吐き出して、又飲みつゞくるなり。學生間に行はるゝこの會の風を聞しに、一リートル入の杯にて、七十八杯を飲み盡せるものありといふ。彼等は各自にコップを持參し、その姓名を盞に彫り付けたり。彼の決鬪　のごときは、その決鬪の度數をさへに刻みつけたる、その意氣の盛なるを知るべし。

食品は概して濃厚なり。ソップは、茶碗に入れて飲むもの多し。これ蘭國以來見るところなり。葡萄酒は、やゝ奢れる方に屬せり。

到る處の殿堂、旅館、商店さては路傍の小舖にも、漏るゝことなく、崇め敬ひ、掲げられたるは、現皇帝の肖像なり。理髮店、珈琲店のごとき、殆ど規則のやうに之を並べ掲げたり。まして人の集まる劇場、停車場、寫眞館、繪草子屋のごとき、均しく掲げさるはなし。

現皇帝は、申すまでもなく、天才敏速の君なり。人の言ふを聞くに、居處暇まる暇なく、常に諸方を巡りおはすとぞ。帝はその口髯いたく逆立ち、左右の兩端は、殆ど眉目に達せんとす。此を以て軍人及ひ交際社會は、勉めて之を學び、毎年十一月いはゆる交際時期に至れば、髯動器械にて、就寢時間に之を捲き上げすこしにても、龍顏に似んことを以て、榮とすといふ。かゝれば、歐洲の諸國に、口髯の逆立てるものを、獨逸皇帝流といへり。

維廉二世が聲のさかだちに

すぶれ川原の波立さわぐ

すぶれ川は、伯林市を流るゝものにして、我が隅田川より小なり。

軍帽の道聲につゞいて目立つものは軍人の服裝なり。銀甲の輝き渡るだにきらびやかなるに、その服裝の美麗なる「人は武士」と謳はまほしくぞ思はるゝ。聞く處によれば、交際社會にて、最もてはやさるゝは軍人にして、令嬢令夫人の秋波は常にかの銀甲の上に注がるといふ。されば軍人も、これを畢生の名譽と心得、ロルセットを帶するものさへ少からずなどきくに、昔平家の公達が、緋の威毛を誇ひし事さへ思ひ合せられて、うたてかりしよ。

押並べて中流以下には、外國語通せず、たゞ土着の洞離のみ。文字も彼の海老的トゲあるものならでは讀み得るもの少し。

東洋語學校は、歐洲諸國中にて、その進歩第一といふべし。その上級の學生は、日本文を讀み、日本語にて談話するもの多しといふ。

珈琲店の重なる家にては、日本の新聞を取りよせおくものあり。これ彼等には、犬と鳥目との關係なるべけれど、日本旅客の愛顧をひくには、千鈞の力ありといふべし。

伯林風俗繪葉書の中に、男女を追つかけ、犬、男を追ひかくる圖あり。見やうなりといへども、此の市の實景なり。

巴里にては、男子の杖を携ふるは普通にして、女子の犬を曳くものまた少からず。この地に來て、兩樣ともにその少きを見る。

葉店を設けて、新聞雜誌を賣るもの、巴里にては普通なれども、この地にては見ず。

郵便函の製法は、巴里より一しほ進歩したるを覺ゆ。

之を花に譬へんに、巴里は櫻のごとく、伯林は桃のごとし。之を書に譬へんに、伯林は顔眞卿のごとく、巴里は王羲之のごとし。畢竟伯林はあまりに明劃にして優雅に乏しく、爲にやゝ田舍じみたるは、地理及び歴史の然らしむるにや。

第六編　伯林より露國聖彼得堡に至る

この夜十時過旅館を出て、龜井氏井上氏と共に、フリードリーヒストラッセー停車場に至る。杉本貞次郎氏、こゝまで送り來て、何くれと世話す。十一時十二分、汽車は一筋の烟を殘し、目輝く伯林市の火光を跡にして、露京に向ひ走り出でぬ。

車中に一露人あり、長崎に久しく居たりとて、日本語を片言交りに話す。日本ノ酒頂ガイタイなどいひて、猪口にて酒飲むことの珍らしくおもしろき由を云ひ、剛身モクヒマスなどいふ、いと興多し。一行は露語に通ずるものなく、意外の人に逢ひて、旅館その他の事ども聞くに、大に便利を得たり。夜やう〳〵更けゆけば、各寢室に入りぬ。

八日（月曜）　起き出でゝ窓より見れば、四方平野なり。牛羊處々に群がり、家をり〳〵見ゆ。車の進むこと矢のごとく、野もやう〳〵盡きて、遂に海水の天に漲るを何ぞと問へば、バルチック海といふ。

羊ふす大野はつきてゆく舟の
　ほのかに見ゆるバルチックの海

百姓家の、赤き煉瓦にて築きたるが、處々に立てる、そのさまいと鄙びたり。停車場ごとに、聊か時間あれば、必ず降り立ち、若くは窓より覗ひ見るに、男女の服裝、體つきなど、いと異やうなり。彼等も我等人種を見なれざるにや、事々しく立さわぎて、彼是と評し合ふめり。中にはその友人をさへ呼び集めて、おのれらを打守る。

　赤家の中よりいでゝめづらしと
　わがつら見れば我も彼れ見る

など戯れによみて語へるを、彼等は何事とかきゝけん。

程なく車とゞまりぬ。見れば Eydtkuhnen といふ驛なり。時に午前十一時。既に露境に入りたるなり。こゝにて車を乘換ふ。煙程もなくして稅關あり。皆降りぬ。いと廣き家に、凹字形に長卓子を並べ、定員數多立ちて、旅客の荷物を一々その卓子の上に陳列せしめてその中を開きて嚴かに點檢せり。同時に旅行券をも調ぶるな

どいと濃かなり。怪しむべき事无きときは、點檢眶をわたす。これ无れば關門を出づること能はず。關の一方に燭を點して無れるを何ぞと見れば基督の像なり。これ彼國人の宗教に熱心なるに由れども、祝關の神像を保つ爲なりと云ふ。

時なり。左右共に大野漠々として、目に障るものもなし。折々牛馬見わ、鷄犬走れるは、人里近きなるべし。伴車場の傍には、さすがに人家少からぬが、就れも茅茸なる、は、我が田家のさまに似たり。

我が國のおほみたがらか家つくり

こゝにて見んとおもひかけきや

この夜、余とさし向ひにて寢たるは、露國の下士官なり。彼は佛語を解したれば、さま〳〵語る。余を軍人ならずやなど問ふ。あらず、書生なりと答ふれば、自分も書生の時は云々なりと、鼻うごめかして、巴里遊興の事など語れる、さながら小供のごとし。彼は寢ながら行李より水爪を取出し、皮ながらにその半以上を食ひたり。馬

などの類にやと驚き思はるゝも、その奈適のほど推し測られぬ。

九日　晴　霜の花のみ咲つゞく野を過ぎて、午前九時頃に蒼波得堡に着きぬ。雨さへ降り頻れば寒さ面を裂くやうなり。客待の馬車を招きよせ佛蘭西旅館といふに走らす。こゝは日本公使館に近く、王宮にも遠からずして、便利の地なればなり。先づ盛せられしは、道のいと廣く、建築まばらに、人のゆきかひの少く、何となく田舍めきたることなり。旅館は、當市にて第一等に數へらるれど、伯林に思ひくらぶれば、いと鄙びて淸からず。即ち龜井氏と余とは三階の七十六號室に、井上氏は同じく八十三號室に投せり。就れも薄暗くいぶせきは、その隣戸を二重にして寒さを防ぐにもよれども、一つには、空の色常に曇りて、天日の見わざるにも、本けし。入浴して疲を醫し、やがて三人にて我が公使館に赴く。小村公使は、龜井氏の案よりの知人なれば、懇談時を移す。落合書記官、小田外交官補の案内にて、とある料理店にて、初て露國料理を食ひ了りて、ネヴァ川に添ひたる彼得大帝の創業の宮殿を見る。

彼得創業殿

チヴァ川に添ひたる處に、一小屋あり。その中に木造の小殿あり。これ彼得大帝が創業の當時住はれし處にて、その設計は大帝みづからせられきとぞ。これ實に彼得堡市の第一の家屋にして、帝業成りて後こゝを中心として漸次今日のごとき大都府となりしと云ふ。

この小殿は、廣さ僅に十九メートル、幅六メートルに過ぎず。たゞ一階にして、殿中は二の部屋と、一の書斎とあるのみ。調度やうのものも、大帝の親しく製せられたるもの多く、殊にその常に用ひられたりといふ椅子は、蘇來なる木片を全體皮をもてつゝみたるものなるが、同じくその自製といへり。其窗掛クーブルの類もたゞ實用に充つるを目的とせられたりとおぼしく、歐洲流の輝く裝飾等を施さず。是等を見るにつけて、大帝がいかに自ら奉ずること薄くして國家經綸に苦心せられしかを知るに足る。

大帝創業殿

殿の一方に祭壇あり、紺地に基督の像を畫きたる尺餘のものを掲げたり。こは大帝が常に信仰して身を放たれざりしものとて、今に至るまで日々參詣者絶ゆず。そも〳〵西洋の禮として、最も敬愛を表する時には、接吻する習はしなるを以て、參詣者悉くこの像に接吻す。像は一にして、人は限り无ければ、それが爲にその畫像を痛め盡さんこと、依て先年來玻璃を以て之を押へ、今はその上より接吻の禮を行ふ事とせりとぞ。けふも困ふりたれども、參詣者絶ゆず、巡査はその入口に立て、濫りならざるやうに注意せり。露國の禮

第六編　伯林より露國聖彼得堡に至る

は、粗日本流にして、一々跪き拜する事なれば、二三人づゝその前に立ちて跪きさて、進んでこれに接吻せしむるさまいと畏やうなり。これは宗教上の信仰に本づく事なれども、一は大帝の威德の然らしむるなるべし。

ねば川のなみ立かへりそのかみを
しのぶにあまる小柴木の宮

この小殿木造にして破れ安きまゝ、カプリーヌ二世保存の爲に石にてその側を蓋ひ立てたり。この宮の前房に戰艦ありごれ大帝が親しく用ひられしものにて、あまたの小銃我が種子が島筒と名くるごときもの、を掘ゑありごれ當年の軍艦なり。大帝が嘗てアムスタルダムに行きて船工となりし事などおもふに、古今の慨に堪へず。創業の君はおのづから素質あり。錦衣玉食世をおくり空々乎として日月を消すもの、いかで大事業を爲すことを得べき。

歷山公園にゆきしに、大帝の當市の紀念として創立せしといふ大寺あり。ごゝにもまた小宮殿あり。ごは創業既に成りて、皇后と並び住はれし處といふ前のより

はやゝ大なれども、今日歐洲の諸宮殿に比すれば、一市民の家にも價せず。ごゝにも大帝の自製といふ諸器多し。この公園は、エリサベス女王彼得の女の時より、夏時遊興の場所となりしかば、夏公園の稱あり。園の入口には、鐵門を設け、園中には彫刻あり、小道あり、樹さかゆ鳥囀づること、いづこも同じ。げふは秋風たちて落葉道を埋め、雨さへふれば、とかく物かなしきを感じたり。

夜食後更に打つれて、當京駐劄武官村田陸軍大佐の寓を訪ふ。公使及び書記官又野本海軍少佐等同席なり。快談午前三時に至りぬ。

十日水曜　午前又打つれて、公使館にゆく。げふは小田試補、田野書記生及び留學生上田僑太郎氏の案内にて、孤兒院を、兒、又王宮を拜觀す。孤兒院は、私生兒のみを慈惠的に養育する處にして、一千七百九十七年の創立にかゝり、現に一年以下の赤兒千名餘ありといふ。ごゝに入るには、その兒に番號を附し、強て父母の名を顯はさゞるもよきやうにせり。乳母車あり、運動場あり、室には小さき寢臺あまたおかれて、最も鄭寧に取扱はれをれり。附屬學校ありて、初は幼稚園に入れ學齡に

至れば小學校に進む。又婦人學校あり。小學卒業の者をこゝに入れしむ。女子は成長の後引取人なき時は、大方婦人とし、またこの學校の教員とす。或は地方の農家などに遣はすこともありといふ。又望み乎あれば婚姻せしむることは、素より自由なり。男子は成年の後は兵役に服せしめ、身體之に適せざるものは、この院に雇ひ俸給を與へて、諸般の事務を負擔せしむといふ。余等一行のゆきし時も、幼兒を懷きて預けにとて來りをりしもの五六人あり。宮内を巡覽するに、小供等のあまた遊び戯れる、その憎げなきを見るにつけても、如何なる人の子なるにかと憐を催さるゝこと多かりき。

そも〳〵かゝる慈恵的事業は、病みすべき事といへども、能に考ふれば、一は沼風を慰ならしむる本にならんとも保しがたし。さるは私生兒のみに限られたれば、あるまじき事動のもとに生れし兒まづは多分を占むべし。さるものは恥らふべきわざなるに、かゝる雑物あればやゝ心安きやうに思ひなすやからもなどかなからん。されば、この院の庭なるは、反比例に、露國風俗の敗腐を證すともいふべく

や。

王宮

專制國の產物として、王宮の壯大なるは珍らしき事にはあらねど、この王宮の壯なるを見ては、如何なる人か驚かざるものあらん。こゝは冬宮ともいふべき處にて、その期節間、住みたまふ殿といふ。これ當國にてはその嚴寒なるに拘はらず、交際時期は年中にして多期を最も貴べばなり。

殿の長さ百五十二メートル、幅百十七メートルに及び、西北はネバー川に面し、東南は宮城大路に臨み、軍支令部に接せり。屋上には諸の彫像あり。壁間また種々の彫刻を施せり。その色は屋根赤く、四壁黄褐にして、雪などの降りかゝりたらんには、いかにその照應おもしろからんとおし測らる。その建築はバロック式といへり。

拜觀人はジョルダ門といふ處より入る。こゝにはカラール大理石にて作り成せ

第六圖　伯林より露國宮殿停車場に至る

る、最も華美宏壯なる階段あり。尖より漸次奥に進めば彫刻裝飾の美、人目をかゞやかし、殊に本玄關のごときは、四方に古代宗教畫を浮彫せる、その神々しさいふべからず。

新大廣間といふに至れば、ヰサイッタの美、殆ど驚くべきものあり。こゝは中庭に續き、そこには大理石の彫像數多並び立てり。この間に一の鳩舍あり。これカラリ一メ二世の時より存在すといふ。

セントジオルジュ大廣間は、毎年十一月二十六日、十二月十八日に、その祭を行ふ處にして、二十メートルより、四十七メートルに至れる廣間なり。帝座は小高く設けられ、例の踏調度、所せまきまで並べおかれぬ。

歴山二世の皇后マリーアレキサンドロヴナの禮拜堂あり。裝飾悉く神畫なり。次に徽章間ともいふべき室あり。こゝには露國各時代の軍人、歴代の徽章を手にせる圖を畫き成せり。この室の壁には、歴山三世に人民より獻じたりといふ鹽と麵包とを盛りたる大皿數枚を掲げたり。これ露國にては古より帝王行幸の時には、その地の人民等、固有の黑麵包と鹽とを皿に盛りて獻りしものにて、亦心を盡して歡び迎ふる意なりといふ。然るに世の降ると共に、その器は金にて作り、鹽と麵包とも、雛形をもて獻上し、いはゆる告朔の餼羊として進すに至れりといふ。

やゝ進めば、彼得大帝の室あり。こゝには大帝の光彩燦爛たる畫像を掲げ、その上に帝冠を据ゑたり。僅並べたる調度類は悉く銀製にして、壁は皆亦天鵞絨に金色の縫を施したり。こゝは各國公使謁見の場處とし、この室につゞきて、プエルマレシオー廣間に至る。これ露國古來の名將賢臣の肖像を掲げたる處なり。

尖よりポンペイヤン陳列館を過ぎて、玄關に至れば、又カテリーヌ二世に獻じたりといふ例の鹽と麵包との大皿あり。是よりすこし行けば、露土戰爭圖（千八百七十七年）數枚を掲げたり。

猶進めば、エコクス帝廣間あり。チバァー川に臨みたる室なり。ニコラス一世の騎馬像あり。尖より各室を過ぎゆけば、歴山一世二世及び各皇后等の肖像あり。

海軍廣間といふには、グレナン戰爭（千七百二十年）バンゴー戰爭（千七百十四年）圖あり。歴山二世

の食堂には、千八百八十年に瀘鑪破裂して、皇帝の身體を危くせしといふ、軍艦の機型を置きたり。猶奥に入れば、帝の崩御の室も、當時の儘にて、血痕未だ乾かざる心ちせらるゝ物もあり。又白廣間といふあり。白大理石にて則める諸の像あり。又歴山二世に獻じたる例の大皿あり。

世界の最も呼物となれる、寶藏室は、近衛下士常に護衛せり。名高き寶冠は中央なる硝子棚の上に納めあり。有名なるオルロー金剛石を付したるものなり。この金剛石は、昔印度某國の帝座にありし金製獅子の一眼にして、他の一眼は今英國皇室の寶庫に藏せりといふ。オルローとは、露國の貴族の名にして、この人嘗國に於て、この石を米國商人より得カクリーヌ二世に獻じたるものなりとぞ。その目かた百九十三カラ四分の三とぞ。この寶冠はビザンチーヌ形にして、カクリーヌ二世の即位の時作られしものにて、その價百十萬留といふ。その金銀珠玉を鏤めたる、夜光る玉にもいかで劣るべけん。

全體に通じて、壯麗帝麗宏大なる、蓋し歐洲中第一の宮殿なるべし。その調度寶器の、こゝは、強ていふにも及ばず、彼の瓷器、絹繡、この皿のごとき、歴代の徽章、寶のごとき、歴代帝王、貴族及び文武の名士、さては宗教、歴史等に關する繪畫、彫刻を以て、專ら裝飾せしが如きは、たゞに耳目をよろこばしむるのみの目的にあらず、風教振作、國民の氣風を養成せん爲なるはいふまでもあらざるべし。これ本日王宮拜觀しをはりて、最も感せられしことなり。

宿に歸り中食して後、市中を見めぐり勸工場に入りぬ。大方目馴れたる品なるが、たゞ獸皮及び毛製の類には驚かるゝもの少からざりき。

夕かねて招かれしにより、亀井、井上氏などと共に、公使館にゆきぬ。公使心入れにて、赤豆飯、鰻の蒲焼等饗應せらる。村田、野本二氏、及び館員一同と共に例により快談夜更けぬ。

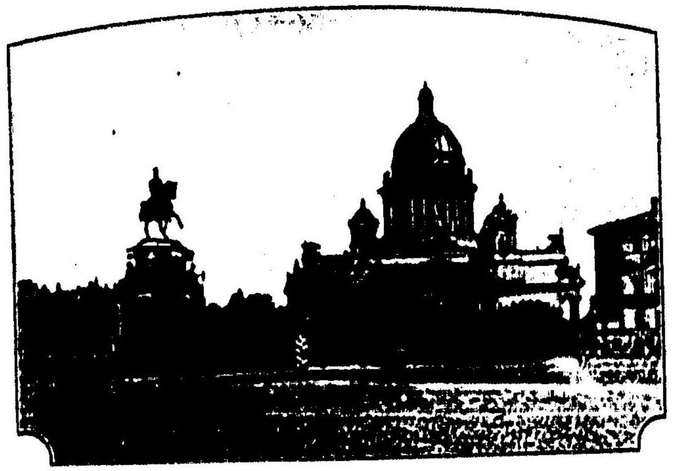
この夜かねて當地に滯留せる、島川喜三郎氏に逢ふ。氏はこの頃芬蘭土より歸り來れる由にて、同地の事さまゝ〳〵語る。その最も耳に殘りしは、彼の地の人民、悉く露國の壓制を厭ひ、獨立の氣象物々たりといふことなり。例へば言語の如き、止む

を得ざる公文の外は、悉く芬蘭土語を用ひ看板のごときは二様に書き、普通教育なども出来得る丈固有語を用ひつゝあり、總ての事この一つにて推測るべしといへり。強國に壓せられて、その國語をさへ滅されんとする民人の苦心實に思ひやられたり。

十一日（木曜）　上田僊太郎氏の案内にて、所々見巡る。

セントイザック寺

彼得堡府中、最に聳ゆる一大建物を、セントイザック寺とす。この寺はカタリーヌ二世、一千七百六十八年に、大理石にて建設せん設計なりしも、中途崩御の爲に果さず、ポール一世の時に至り、ブルノといふ技師に計りて、煉瓦石にて建築したるものにて、そのコンセクラシオンの式は、千八百二年五月三十日に擧行せられ、同十九年六月二十六日に歷山一世、親ら第一の礎石を據え付けたりといふ。其後ニコラス一世の非常なる督勵にも關はらず、四十餘年の長きを經て、同五十八年即ち歷山二世の朝に至りて漸く竣工せり。これが爲には數處の森林を裸にしたりといふ程にて、内部の裝飾等に至る一切の費用、二十三億留に上れりとぞ。



セントイザック寺院

第六圖　伯林より獨逸帝國議會に至る

建物は希臘十字架の形にして、高さ百五メートル四十、幅九十メートルに達し、頂上には宏大なる圓屋根なり。その上に小樓を作り、その上に更に高さ五メートルの十字架を建てたり。正面には青銅に浮彫を以てセントイザック、基督及び歷山一世の肖像等を施し、又屋根の角々には天使の像をあらはせり。柱は孰れも花崗石の四形なるが、その大なるは高さ十七

メートル、直徑二メートルを數へ、悉く青銅の蓋を付したり。

我等一行は、その預人の案内者と共に、寺内に入り鐵の階子を昇りて、進みゆくに、一足ごとにやう〳〵狹くなり、頂上に至れば、階子は直立して、幅僅に二尺斗なり。足の震はるゝを念じて行くに、案内人後方より尻を押上げ〳〵續いて昇る、いと恐しく面白し。彼の十字架の下に至れば、府下百萬の人家、恰も將棋の駒を並べたるがごとく、チバァー川は銀紙を引たるがごとし。野を越ゆて遙に海の光れるは、バルチック海にして、船の帆さへかすかに數へらるゝ景色よきはさる事にて、この國のこの地をこの寺上より見下す我等の心ちいふべからざる慨あり。さて掠を見れば、上りし人の姓名など彫りつけあれば、我等も小刀して、日本人何々本月本日この寺に上り露京を見卸す由を彫り込みぬ。

巴里などゝ異なりて、一體の人家褐色にして、何の艶もなくさながら火事に逃ひたるあとのごとく、又道廣く家少ければ、老人のたま〳〵殘れる齒を見るがごとし。さはれ、林の如くに立てる烟筒より烟の立上れるが、屏びきゝて雲にまがへるなど、猶都は賑ひにけり。眺望了りて本の階段を下るに、こたびはなか〳〵に足のいたくふるはれしもをかしかりき。

彼得大帝騎馬銅像

佛國に遊ぶものゝ屢々奈破翁大帝を思ひ起すごとく、露京に來るものにして、誰か彼得大帝の功業を仰ぎ慕はざるものあらん。チバァー川の遠からざる處、元老院前の大廣場に當國人の大恩大帝として日夕忘るゝこと能はざる彼得大帝の銅像は建てられたり。

帝は月桂冠を戴き、馬を巨巖の上に立てゝ、チバァー川の波を睨み、右手を伸して帝か創設せりといふアートル街を指せり。その馬は前の二足を上げ、後の二足と尾とにて支へたるが、その足下に一匹の蛇を踏まへたり。像の丈大凡三メートル、馬の高さ五メートル。佛國彫刻士ファルコネ氏の設計にして、一千七百七十五年に竣工し、同八十二年に除幕式を行ひたりといふ。費用四十二萬五千留といへり。

大帝の偉業は今更に言ふ要なしといへども、この都府を開き、この民をして西歐の文明を汲收せしめて、今の繁榮あるを致したる大功はたゞひこの巖石に苔むし、この銅像朽ちぬともいかで世に忘れられむ。大人の事業豈奚ましからずや。

夕、一行打つれて約に從ひ、野本少佐の宿を訪ふ。晩餐の饗あり、村田藩合小田開氏、また加藤大尉等と談論夜を更して歸りぬ。

十二日 金曜 この日田野氏の嚮導にて、チバアー川に添ひたる繁國大學を見る。

大學はアレキサンドル一世の創立にして、現今は歷史科、博言學科、物理數學科、法科及ひ東洋語學科に分れたり。學生凡そ千二百人。一行は理科教授某氏の案内にて、諸室を見しに、別に異なりたる點を認めず。東洋語學科の中には、無論日本語も加へたるが、こは商業的又は東洋進入的に學習するものにて、伯林巴里等のごとく學問的に研究するは、その目的にあらざるがごとし。目下この教國に支那人はあれども、日本人は居らずといふ。學生のいづれも清拎なりしは、何となく唐代の

昔ゆかしくおもはれたり。

又美術學校あり。カラリーヌ二世の創建にして、その建築の美麗し市中第一なるべし。時なければ校内を見ること能はざりしはくちをしかりき。

夕一行にてかねて招きおきしかば、小村公使をはじめ、村田大佐、野本少佐、藩合田野、小田、上田諸氏來會、晩餐を饗して、この日頃の厚遇に酬ゆ。

第七編　聖彼得堡より莫斯科に至る

車ども下りて、人と別れ旅宿を發して、停車場に至る。落合田野小田上田諸氏こゝまでおくり來る。十時發車莫斯科に直行す。室は寢棄つきなれば、足さし伸ばして熟睡せり。

十三日（水曜晴）　見わたす限り野原にして、山もなく水もなし。例の百姓家の茅ぶき又は赤煉瓦なるが、枯葉の間に見隱れするのみ。三人はこの頃來の眠の足らざるにや、話しては又眠り、目さめては野を眺めなどせしほどに、車とゞまりぬ。聞けば已に莫斯科に着きたりといふ。この間凡四百三哩。俄に衣服を整へて車を降りぬ。井上氏は靴をさへぬぎて椅子に安座せしが、この報に接しそれも穿きあへずして急きおりたるさまのをかしかりければ、

井上のみことはあはれ靴さげて
莫斯科ゆかすそのみことあはれ

欠

MISSING

も珍らしきはこの殿中の一部に純乎たる支那風の建築ある事なり。こゝは玉座をはじめ天井壁及ひ敷瓦さては扉戸の類悉く露國と思はるゝはなし。このわたり建築頗る古めきたれは、古へ彼の人種の專有せし頃の遺風か、そも〳〵また殊に支那風を學ひて築き成しゝか、いまだ研究する暇を得ず。

一通り觀了り帝室御物の博物館に至りしも、時切れて見る事能はざりしは頗る遺恨なりき。

夫より當市のウースペンスキー本山に詣でぬ。こは一千四百年代のものにして、四角形をなせる大寺なるが、露帝世々即位の式を擧げらるゝ處といふ。數多の參詣人どもの跪き拜しをるさま、西歐諸國の風と異ふも、おもしろし。この寺の頂上より見おろせば、莫斯科全市一目の中にあり。こゝにて撮く寫は全市に響くとぞ。

そも〳〵莫斯科は聖彼得堡の東南にして、露國の舊都なり。人口凡そ九十九萬、全國の中央にして、商業の一中心たり。莫斯科川は市の中央を流れ、汽車はソルソリ、オヂッサ及びサマラにも通じて交通便利なり。家居のさまなど亞細亞風を帶び

たるが多く彼得堡の西歐風なるとは萬づその趣を異にせり。されば露國の蒼然はこの都に殘れること恰も我が京都に似たる處あり。故に今に至るまで露帝の戴冠式はこの地にて行はるゝを例とし現帝の御時もこゝにて行はれしなり。

莫斯科に殘れ來て見れば歐羅巴
亞細亞をかけて秋の風ふく

雀が岡（リンゲンヒロイベール）

莫斯科市を去ること三里ばかりの處に一丘あり。直譯して雀が岡とよぶ。これ奈破翁一世が軍をかへしゝ跡なりといふ。道わるく風さむきを犯して馬車にて亞りしに果ては車の輪もめぐりかねれば徒歩すること一丁ばかり。辛じて志す處に達したり。小旅館あり。小休憩所あり。クリンキャンといふ家に亞りやすらへば四面に額をかゝげたるは大方奈破翁苦戰の圖にして人馬群中に雜れ將卒相抱きて暖を取る等のさまなり。此處より見れば莫斯科市は眼下にありて奈翁の當日の恨みさへ思ひおこされざるにあらず。

身にしみて昔をぞおもふたづねこし
すゞめが岡は風さむくして

この都府は古へ韃靼人が四百年ばかりも占領して、歐人は殆ど息せし時代もあり。かの見ゆるあたりは今も韃靼屋敷と唱へ、又美人が原（ビイヒンバシ）などいふもありて、彼の人どもが驕奢を恣にすること、國中の美人を聚めて一團となし、遊び戯れし處と言ひ傳ふ。是をおもひ彼をおもふに感慨いかで一身にあつまらざらむ。

東のふく風つよみ荒驚の
つばさたわみし時もありしを

日暮れて寓にかへり更に打つれて市内を散歩す。げふは土曜日にて諸店も早く閉ざしたれば、燈くらく人靜なり。だゞ大家の門前に、人々の三々五々淋しげに立ちたるが、數多目につきしを何ぞと問へば、當地の慣習にて富强の者は、その門衛の爲に、かく人を立たしむるなりとぞ。

この夜みぞれふり、寺々の鐘かすかなり。寢て後。

鐘のおとはみぞれにきゆて莫斯科の
川なみふかく物をこそおもへ

露國雜感

聖彼得堡を見、莫斯科を過ぎ、將にオダッサに向はんとするにあたり例によりて見聞せしことの雜感を叙すべし。

露西亞の大國たるは、今更に言ふを要せじ。その大國なる丈に、人種の雜駁にして、言語のさまゝなること、また更に言ふを待たず。いはゆる露語、ポール語、ヘブリュー語、獨逸語、レッサッシュ語、エストゥア語等なり。

社會の階級は大別して四となす。を得べし。一に貴族(ブリヤンヒ)、二に商民(クプツ)、三に新商民(シンクプツ)、四に農民(クレスチヤニン)なり。官吏及び社會權要の權を掌るものは皆貴族なり。

財政は頗る紊亂し、商工業の實權は大方外國人の手に在り。例へば聖彼得堡の大商人といへば獨逸人多く、莫斯科の大工業會社といへば、大抵英人の權力の下に在るが如しかくの如くなるにも拘はらず、中外に權力を振ひつゝあるは、全く英傑の力試し、政界に存す。そは權要の地位を與へたる人には萬事それが智識に一任し、一切政府の間意を伺ふやうなる事を爲さしめず。いはゆる任せ切りのさまあれば、彼等は一生懸命にその敏腕を振はんことを務む。故にたまゝ失策なきこともあらざれども、強て之を咎めず、値に左遷する位に止めしむといふ。一體の人民の無智無能なること、殆と驚くべきものあり。然れども之を統率する人は、最も頴敏の人なるにより、政令おのづから行はれて、今日の强を致せるなり。莫氏の話に例へば天長節のごときは、戸毎に國旗を掲るとなるが、大方は其何のいはれなるを知らず、中には巡査にすゝめられて掲るものもありとぞ。山らしむべし、知らしむべからずとは、この國政略なりとか。

露國人の氣象に貴き所は佛語にいはゆる「ザメフエリヤン」といふに在り、我が「何ゞ構ハメ」といふ意義なり。彼等は自信に厚く、例ひ他より如何やうなるといはん

も、如何なる干渉あらんも更に恐れず顧みず、深く信じ厚く頼みて所信を貫通す。

この氣象は政治上にも、商工業の上にも、一般習慣の上にも行きわたりたりとぞ、

彼等は英人を憎むこと蛇蝎のごとく、口を極めてその非行を罵るを快しとす。小

學讀本なども、特にその意味にて編したるが多しといふ。

宗教は希臘教最も多く、皇帝は即ち之が首長たり。この外羅馬教、新教、及び猶太

教、回教あり。押並べてその人民の宗教に熱心なること、恰も我が佛教に熱心なる

翁媼を見るがごとし。宮殿、官衙、學校、その他大建物の中には必ず祭壇を設けて祭

るのみならず、橋のたもと、道の傍さては勸工場、市場のやうの處にも悉く祭祀せ

ざるはなし。かくて夫等の前を過る人は、必ず跪きて叩頭念誦して後に徐に行き

過るを禮とす。高朝の紳士も、足をとゞめて之を禮し、寡人も之を拜し、老幼婦女上

下の別なく、必ず跪き再拜して過ぎゆくさま頗る異やうなり。その祭壇は大なる

あり、小なるあり、小なるは我が道傍の地藏堂のごとし。孰れも常に香花を絶たず。

押並べて人民は怠惰にして奢侈なり。夜は殆ど晩に迄するまで酒及び茶を飲み

むだ話しに時を費し、朝は下等人民ならざれば早起せず。勤儉貯蓄の風更に行はれず。夜越しの金は持たぬといふを露人氣質として之を貴ぶ。偶〻その勤勉貯蓄を勧むるものあれば、例の「何ダ構ハヌ」の一語にて之を排するを名譽のやうに心得居れり。

現皇帝は最も人民の心を取ることに務めたまへり。常に二三の侍臣と共に市中を散歩し、貴者を憐れみ、弱者をいたはり給ふこと亜らざることなし。大臣及び亜高の官にて、病氣せるものあるときは、親ら馬車を飛ばし、密行して之を慰め給ふがごときは珍らしき事にあらず。素より直奏をも許しあれば、途上にて建言せるものも少からずとぞ。これ親裁圖殆ど壓制圖ともいふべき處にて、思の外の事どもなり。

貴族社會の腐敗は、蓋し歐洲第一なるべしといふ。賄賂公行、亂倫敗德、實に言ふに忍びざること多し。或る在留日本人の直話に、余が久しく當市(彼得堡)に在るまゝに、一日一人の紳士余に語りて、貴君かくて久しく外國にあれば、貴君の夫人は定